

ご挨拶

成長する鳥取県の「生涯現役」

世界中で新型コロナウイルスが猛威を振るっています。その勢いは、なかなか収まりそうもありません。私たちの暮らしも、すっかり変わりました。どこでもマスク、手洗い、うがい、検温……人込みや「密」を避け、規則正しい生活が求められています。人との触れ合い、交流が減ることで、コミュニティの後退が気になりますが、明けない夜はありません。コロナが収束すれば、全国そして海外から再び多くの人を鳥取の地に迎えて、2022年にはワールドマスターズ、そして2024年には全国高齢者健康福祉祭（ねんりんピック）が開かれます。

鳥取県自慢の人材銀行・とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」は、コロナ禍にあっても、しっかり成長を続けています。登録者は6千人を超え、活動者数は累計で4千人余りになりました。年々、県民の期待が高まっています。コロナに負けず、これからも創意工夫して、期待にこたえてまいります。

シニアバンクは60歳以上の元気な県民が、資格や特技や技能などを登録され、生涯学習や地域イベントなどでご活躍いただいております。全国でも珍しい人材銀行です。登録者は「あの人」「この人」顔なじみの方々ばかり。“お宝人材、がいっぱいです。

その“お宝人材、の顔ぶれや活躍の様子は、シニアバンクのホームページやフェイスブックでご覧いただけますが、今年も冊子「生涯現役」を発行しました。2020年1年間の登録者の活動を日記風にまとめたものです。併せてバンク発足以来の活動の足跡も一覧表にしました。ご覧いただくと、県民の関心事がよくわかります。

鳥取県は全国に先駆けて高齢化と人口減少が進行中です。元気な高齢の方々、それぞれの持ち味を生かし、地域の担い手となって、活性化のために、ご活躍いただくことが期待されています。シニアバンク「生涯現役」を運営する鳥取県社会福祉協議会は、明るく元気な長寿社会を実現するため、その先頭に立ってがんばっています。

2021年1月吉日
社会福祉法人 鳥取県社会福祉協議会

会長 藤井 喜臣



とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」の概要

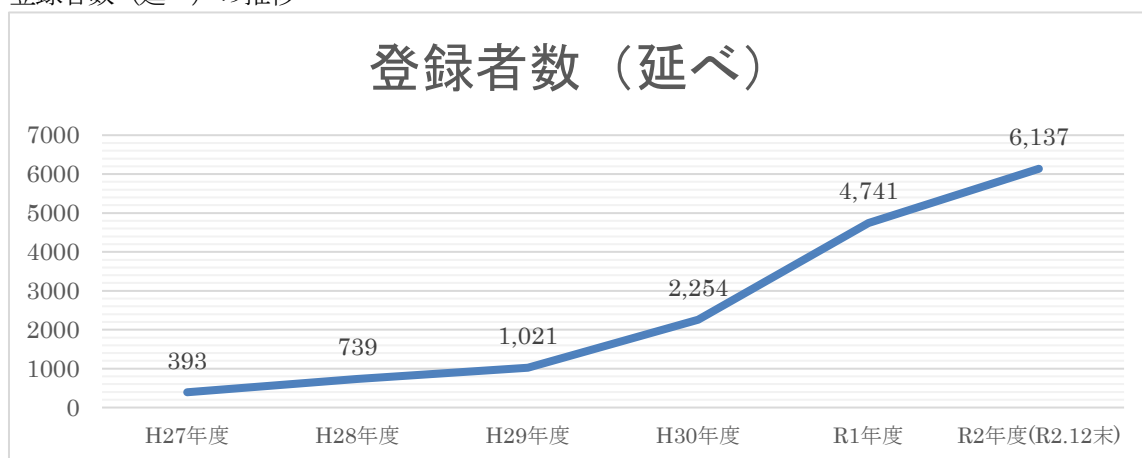
鳥取県福祉保健部ささえあい福祉局長寿社会課

1 制度の目的

とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」(以下、「シニアバンク」)は、高齢者の方の生きがい・元気づくりのため多様な活動を推進するとともに、過疎化・人口減少が進む中、高齢者の方が地域の担い手となることや、地域の活性化のために活躍していただくことが期待されていることから、高齢者の方の資格、特技、技能などを生かした活動を促進する環境・仕組みづくりを目的に、平成27年7月に鳥取県が創設しました。

2 登録者の状況 (令和2年12月末時点)

- (1) 登録者数(延べ) 6,137人(173団体5,588人・個人549人)
- (2) 登録者数(延べ)の推移



- (3) 登録者(個人)平均年齢 74.0歳
- (4) 登録者(個人)男女構成 男性:393人、女性:156人
- (5) 市町村別登録者数

	個人(人)	団体(件)	団体(人数)	人数合計
【東部】	260	87	2,244	2,504
鳥取市	216	75	1,935	2,151
岩美町	11	7	126	137
八頭町	20	4	177	197
若桜町	5			5
智頭町	8	1	6	14
【中部】	104	35	2,100	2,204
倉吉市	41	24	1,930	1,971
湯梨浜町	22	1	8	30
北栄町	16	2	23	39
琴浦町	20	5	119	139
三朝町	5	3	20	25
【西部】	185	51	1,244	1,429
米子市	96	37	863	959
境港市	24	7	190	214
大山町	21	1	12	33
南部町	7	2	85	92
伯耆町	9	2	20	29
日吉津村	7			7
江府町	3			3
日野町	12	2	74	86
日南町	6			6
計	549	173	5,588	6,137

3 活動の状況（令和2年12月末時点）

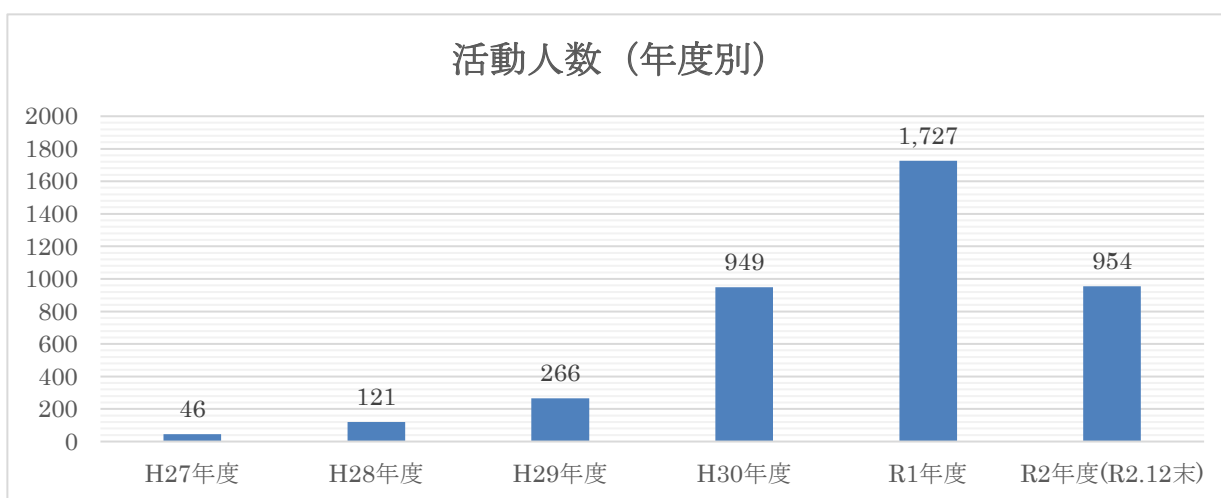
(1) 活動人数（延べ） 4,063人

※今年度の活動人数 954人（令和2年4月～令和2年12月末）

(2) 活動人数（年度別・延べ）の推移〔表〕

	H27年度	H28年度	H29年度	H30年度	R1年度	R2年度（R2.12末）
活動人数（年度別）	46	121	266	949	1,727	954
活動人数（延べ）	46	167	433	1,382	3,109	4,063

(3) 活動人数（年度別）の推移〔グラフ〕



4 沿革

平成27年 7月：シニアバンク創設

平成27年 9月：シニアバンク登録開始

平成28年 3月：シニアバンク・キックオフフェスタ開催（鳥取市、米子市）、登録者初活動

平成29年 7月：第1回とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」まつり開催（米子市）

平成30年 2月：登録者数1,000人

平成30年 8月：第2回とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」まつり開催（鳥取市）

平成30年10月：活動人数1,000人

平成30年12月：登録者数2,000人

令和 元年 5月：登録者数3,000人

令和 元年 8月：登録者数4,000人、活動人数2,000人

令和 元年 9月：第3回とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」まつり開催（倉吉市）

令和 2年 2月：活動人数3,000人

令和 2年 4月：登録者数5,000人

令和 2年10月：第4回とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」まつり開催（鳥取市）

令和 2年11月：登録者数6,000人

令和 2年12月：活動人数4,000人

シニアバンク「生涯現役」登録者募集要項

◎ 登録できる方

資格、技能、特技を有する県内在住の60歳以上の方で、次のような場所で講師、指導者等として活動が可能な方

(例) 公民館活動、高齢者大学、老人クラブ、社会福祉施設、放課後児童クラブ、学校支援ボランティア、児童・生徒の学習支援の場、その他県・市町村等が開催する催事など

◎ 登録する資格、技能、特技の例

◆資格に係るもの

教員、保育士、保健師、栄養士、看護師、調理師、理学療法士、健康運動実践指導員、地域スポーツ指導員、審判員、つりインストラクター、シニアライフアドバイザー、通訳、PCインストラクターなど

◆技能に係るもの

伝統工芸、大工、染色、織物、木工など

◆特技に係るもの

書道、絵画、歌唱、カラオケ、社交ダンス、生け花、茶道、手芸、楽器演奏、ステンドグラス製作、切り絵、ちぎり絵、版画、陶芸 俳句、短歌、ガーデニング、野菜栽培、着付けなど

※シニアバンクでは、上記以外にも様々な特技等をお持ちの方を募集しています！

◎ 登録の期間

随時受付をしています。

登録の更新は1年ごとに行い、特に申し出のない場合は次年度も登録を継続します

シニアバンク活用の仕方



◎ お問い合わせ先

社会福祉法人鳥取県社会福祉協議会 福祉人材部

とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」担当

電話：0857-59-6336 FAX：0857-59-6341

〒689-0201 鳥取市伏野1729番地5

とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」登録者活躍の足跡

(2016年～2020年、敬称略)

2016年

日程	活動場所	登録者	活動内容	
3月	日吉津村・イオン日吉津店	新宮雄子(司会者)、港ベンチャーズ、近藤盛一(マジック)、近藤勢津子(腹話術)、合唱団Glanz、加藤哲英(鳥取県美術家協会会長)、柴山抱海(鳥取県書道連合会長)、森山盛桜(鳥取県川柳作家協会会長)、倉益敬(鳥取県歌人会長)、遠藤甫人(鳥取県俳句協会会長)	シニアバンク・キックオフフェスタ	
3月	鳥取市・イオン鳥取北店	蔵本紀代子(司会者)、パードベンチャーズ、山下真一郎(マジック)、河下哲志(トウフルート奏者)、鳥取市民合唱団、米澤高明(鳥取県美術家協会理事)、石山ヨシエ(朝日新聞鳥取版俳句選者)、森山盛桜(鳥取県川柳作家協会会長)、北尾勲(鳥取県歌人)	シニアバンク・キックオフフェスタ	
3月	琴浦町・社会福祉センター	近藤勢津子(腹話術)	介護予防教室	
4月	季刊誌「志あわせへ」	杉本雅美(鳥取県写真家連盟会長)	フロント写真(4回)	
6月	倉吉市・小鴨公民館	君野弘明(高齢者マラソン)	健康教室	
6月	江府町・防災情報センター	佐々木満(奥日野古道保存会長)	奥日野ガイド養成教室	
6月	境港市・境漁港ほか	石丸なつ子(鳥取県写真家連盟運営委員)	日野川源流写真教室	
7月	鳥取市・倉田公民館	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	鳥取県人の生き方教室	
7月	米子市・成美公民館	小西怜子(水彩画)	夏休み絵画教室	
7月	岩美町・小田公民館	河下哲志(トウフルート奏者)	小田地区納涼祭	
7月	南部町・南部町公民館	倉益敬(鳥取県歌人会長)	夏休み短歌教室	
8月	境港市・夢みなとタワー	加藤哲英(鳥取県美術家協会会長)、小谷悦夫(チャーチル会米子幹事長)	夏休み親子写生教室	
8月	倉吉市・小鴨公民館	長谷川泰二(コンベンションビューロー前理事長)	男のクラブ研修会	
8月	琴浦町・古布庄公民館	大谷治(ステンドグラス工房)	ステンドグラス教室	
8月	岩美町・里久の里	畑井章子(洋服、きものリフォーマー)	手編み教室	
9月	米子市・老人ホーム福原荘	河下哲志(トウフルート奏者)	敬老会	
9月	鳥取市・とりぎん文化会館	松弘美会(民謡ショー)、煎茶道黄檗茶流鳥取支部(お茶席)、鳥取姫柿愛好会(盆栽展示)、中部建築工務士会(山車展示)、加藤哲英(鳥取県美術家協会会長)、米澤高明(鳥取県美術家協会理事)、福田典高(画家)	県民総合福祉大会	
9月	鳥取市・福祉人材研修センター	西田輝明・穴戸剛・岡本雄(関金竹細工クラブ)、濱幸子(日本絵手紙協会公認講師)、森文江(鳥取和紙ちぎり絵サークル代表)	センターイベント	
9月	大山町・だいせんデイ	中川正純(ハーモニカ奏者)	敬老会	
10月	鳥取市・NHK文化センター	北尾正幸(元新聞記者)	文章の書き方講座	
10月	米子市・宇田川公民館	加藤哲英(鳥取県美術家協会会長)	似顔絵教室	
10月	鳥取市・NHK文化センター	近藤勢津子(腹話術)	腹話術講座	
10月	鳥取市・文化ホール	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	社会講座	
11月	鳥取市・県立図書館	鳥取ものづくり道場	親子ものづくり教室	
11月	日野町・たたら楽校	石丸なつ子(鳥取県写真家連盟運営委員)	日野川源流写真教室	
11月	鳥取市・鹿野小学校	畑井章子(ワード・エクセル3級)	高齢者パソコン教室	
11月	岩美町・網代公民館	山崎郁雄(日本医師会認定スポーツ医)	超高齢社会の生き方講座	
11月	鳥取市・県社会福祉協議会	鳥取流しびな真向会	健康・ストレッチ教室	
11月	倉吉市・上井公民館	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	母子会役員研修会	
12月	倉吉市・市立図書館	中部ものづくり道場	ものづくり教室	
2017年	1月	倉吉市・小鴨公民館	岩室久美子(終活ライフプランナー)	人権学習会
1月	米子市・日本海新聞	大原俊二(郷土史家)	私たちの大山さん講座	
1月	鳥取市・福部公民館	紙原四郎(切り絵作家)	切り絵教室	
1月	米子市・日本海新聞	大杖正彦(元札幌五輪日本代表選手)	私たちの大山さん講座	
1月	鳥取市・文化ホール	徳永耕一(八頭郡郷土文化研究会会長)	歴史講座	
2月	米子市・日本海新聞	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	私たちの大山さん講座	
2月	米子市・日本海新聞	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	私たちの大山さん講座	
2月	米子市・米子コンベンション	大原俊二(郷土史家)	「日本遺産大山」出演	
2月	大山町・大山自然歴史館	矢田貝繁明(大山自然歴史館長)	「日本遺産大山」出演	
2月	鳥取市・文化ホール	中林保(歴史地理学者)	市民大学歴史講座	
3月	鳥取市・県立図書館	小山富見男(新県史編纂委員)、沖廣俊(いなば国府ガイドクラブ代表)、河根裕二(あおや郷土館長)	歴史大河ドラマ候補発表会	
3月	米子市・日本海新聞	川越博行(米子下町観光ガイド)	私たちの大山さん講座	
3月	岩美町・小田公民館	本田正法(パソコン講師)	高齢者パソコン教室	
3月	米子市・日本海新聞	竹内道夫(鳥取県近代文学史研究者)	私たちの大山さん講座	
3月	湯梨浜町・公民館泊分館	中部ものづくり道場	春休みものづくり体験教室	
4月	季刊誌「志あわせへ」	紙原四郎(切り絵作家)	フロント表紙(4回)	
4月	鳥取市・とりぎん文化会館	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	退職公務員研修会	
4月	日野町・間地峠	佐々木彬夫(観光ガイド)	奥日野歴史講座	
5月	鳥取市・面影公民館	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	教養講座開校式	
5月	日野町・鏡山城下町	杉本準一(郷土史家)	奥日野歴史講座	
5月	米子市・米子美術館	米子ちぎり絵水星会	山下清展ワークショップ	
5月	江府町・江府中学校	足立博明(パソコン教師)	高齢者パソコン教室	
5月	伯耆町など・日野3宿	佐々木彬夫(観光ガイド)	奥日野歴史講座	
5月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室	
5月	米子市・ワシントンホテル	港ベンチャーズ	金沢工大同窓会	
5月	鳥取市・市内	岡村洋次(尾崎放哉研究者)、石山ヨシエ(朝日新聞鳥取版俳句選者)、野田哲夫(鳥取県俳句協会会長)、柴山抱海(鳥取県書道連合会長)	放哉句碑めぐり	
5月	鳥取市・とりぎん文化会館	田貝英雄(伯耆国たたら顕彰会長)	歴史大河ドラマ候補発表	
6月	湯梨浜町・ハワイ夢広場	玉木純一(レクリエーション・コーディネーター)	尚徳大学講座	
6月	伯耆町・二部宿	二部地区活性化推進機構	奥日野歴史講座	
6月	倉吉市・倉吉セントパレス	角秋勝治(郷土作家研究者)	青色申告会講演	

6月	智頭町・社会福祉協議会	荻原恵子(フォークダンス指導者)	高齢者健康ダンス教室
6月	日野町・鶴の池周辺	恩田記子(調理師)	奥日野歴史講座
6月	鳥取市・県立図書館	中川政雄(鳥取ものづくり道場)	かんたんな工作教室
6月	大山町・名和保健センター	篠原正明(鍼灸師)	寿学級「体を学ぼう」
6月	境港市・境漁港ほか	石丸なつ子(鳥取県写真家連盟運営委員)	日野川源流写真教室
6月	鳥取市・福祉人材研修センター	倉吉ギターアンサンブル	アビリンピック鳥取県大会
7月	鳥取市・歴史博物館	小山富見男(県史編さん委員)	占領期の鳥取を学ぶ会
7月	鳥取市・流しびなの館	鳥取ベンチャーズ	リサイクル
7月	倉吉市・倉吉未来中心	徳本義則(介護福祉士)、佐々木洋一(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
7月	米子市・城山、城下町ほか	安達佳恵(気功太極拳)、川越博行・岡田信行・岸本裕・前角達也・上田正規(米子下町ガイド)、春蘭会、船原濤軒(書道家)、佐藤千秋(画家)	シニアバンク・フェスティバル
7月	岩美町・小田公民館	バードベンチャーズ	小田地区納涼祭
7月	南部町・公民館	倉益敬(鳥取県歌人会長)	夏休み短歌教室
7月	境港市・夢みなとタワー	小谷悦治(チャーチル会米子幹事長)	夏休み絵画教室
7月	米子市・日本海新聞	根平雄一郎(郷土史家)	大山さん講座
8月	境港市・夢みなとタワー	加藤哲英(鳥取県美術家協会会長)	夏休み絵画教室
8月	鳥取市・東郷地区公民館	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	夏休み自然体験
8月	大山町・森の国	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	大山さん講座
8月	江府町・防災情報センター	森下哲也(葉草栽培)	明德学園
8月	米子市・福原荘	吉島潤承(紙芝居)	教養講座
9月	鳥取市・文化ホール	野田修(鳥取家政学園理事長)	尚徳大学教養講座
9月	倉吉市・未来中心	澤田勝(サクソ奏者)、福田典高(画家)、高塚俊蔵(切り絵作家)、森本せつ(ステンシルアート)、藤井正幸(マジック)、玉木正枝(レクリエーション)	県民総合福祉大会
9月	米子市・成実新山地区	南京玉すだれ山陰保存会	敬老会
9月	日南町・日南中学校	倉益敬(鳥取県歌人会長)	短歌教室
9月	鳥取市・福祉人材研修センター	徳本義則(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
9月	鳥取市・県立図書館	原田堅吉(鹿野城ガイド)、片山長生(教育カウンセラー)、四井幸子(碧川かた研究者)、田中精夫(郷土史研究者)、田村幹夫(郷土史研究者)、小山富見男(新県史編集委員)	大河ドラマ選考会
9月	湯梨浜町・中央公民館	松本薫(小説家)	東旧郡公民館連合会研修会
9月	米子市・夜見公民館	大原俊二(郷土史家)	大山講演会
9月	鳥取市・福祉人材研修センター	本城義照(尺八奏者)、澤田勝(サクソ奏者)、河下哲志(トウフルート奏者)、清水増夫(映画上映)	福祉人材研修センターイベント
9月	鳥取市・福部公民館	谷本由美子(太極拳)	太極拳教室
9月	鳥取市・福祉人材研修センター	佐々木洋一(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
9月	鳥取市・福部コミセン	岩室久美子(終活ライフプランナー)	人権啓発セミナー
9月	江府町・防災情報センター	政岡日枝子(川柳作家)	明德学園
9月	湯梨浜町・公民館泊分館	紙原四郎(切り絵作家)	切り絵教室
9月	鳥取市・浜坂公民館	川上巧(ものづくり)	社会人教室
9月	大山町・大山寺周辺	竹内道夫(鳥取県近代文学史研究者)、森田尾山(書道家)	大山文学碑めぐり
10月	八頭町・安部公民館	山根教子(樹脂粘土人形作家)	ものづくり教室
10月	鳥取市・県立図書館	森本良和(映画監督)	鳥取藩と西郷どんシンポ
10月	江府町・防災情報センター	山本邦彦(三徳山三仏寺法嗣)	明德学園
10月	鳥取市・文化ホール	有本喜美男(さじ民話会)	尚徳大学郷土学習講座
10月	琴浦町・古布庄公民館	桑原正(木工作業療法士)	大人のものづくり
10月	三朝町・福祉センター	西田輝明・山崎重三(関金竹細クラブ)	福祉まつり
10月	江府町・防災情報センター	杉原幹雄(イラストレーター)、小田隆(郷土史家)	日野軍秋の陣ふいご祭
10月	鳥取市・松泉寺	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	気高郡曹洞宗研修会
10月	鳥取市・文化ホール	玉木純一(レクリエーション・コーディネーター)	尚徳大学
10月	鳥取市・モナーク	河下哲志(トウフルート奏者)	中国市議会議長会
10月	倉吉市・体育文化会館	青亀千弘・飯田啓子(看護師)	中部高齢者健康運動会
10月	大山町・大山寺周辺	千田明(大山の地蔵研究者)	大山さん講座・地蔵めぐり
10月	倉吉市・灘手小	澤田勝(サクソ奏者)	灘手こーまい秋まつり
10月	岩美町・あすなろ	清水増夫(映画上映)	高齢者施設映画上映会
11月	鳥取市・市民体育館	瀬川和義・藪田道男・山下真里(鳥取ものづくり道場)	労福協ものづくり教室
11月	鳥取市・歴史博物館	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)、松田章義(元児童福祉施設長)	占領期の鳥取を語る会
11月	日野町・たたら古道	佐々木彬夫(観光ガイド)、杉原幹雄(イラストレーター)	日野軍秋の陣
11月	日野町・明地峠	松本利秋(カメラマン)	日野のオシドリと雲海
11月	鳥取市・文化ホール	田中精夫(大河ドラマを推進する会代表)	市民大学歴史講座
11月	鳥取市・なごみ苑	清水増夫(映画上映)	高齢者施設映画上映会
11月	江府町・防災情報センター	多羅尾整治(古代史研究者)	明德学園
11月	米子市・ふれあいの里	徳本義則(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
11月	江府町・道の駅奥大山	手島征夫(江府町文化協会会長)	アラカシ群落を往く
11月	日南町・石見地区	温湯正人(ウォーキング指導者)	奥日野ロゲイング
11月	日野町・後谷	長住武美(造園現代の名工)、佐々木彬夫(観光ガイド)	奥日野大人の遠足
11月	米子市・産業体育館	近藤盛一(マジック)、近藤勢津子(腹話術)、房安寿美枝(折り紙作家)	とっとり介護フェア
11月	米子市・文化ホール	森井徳訓(刀剣研究者)	大山さん講座
11月	湯梨浜町・公民館泊分館	藤井正幸(マジック)、森本せつ(ステンシルアート)	公民館まつり
11月	江府町・防災情報センター	倉益敬(鳥取県歌人会長)	明德学園特別講座
12月	鳥取市・文化ホール	森本良和(映画監督)	市民大学歴史講座
12月	米子市・弓ヶ浜中学校	荒井玲子(看護師)	弓ヶ浜中学人権学習
12月	米子市・公民館宇田川分館	後藤俊夫(小説家)	老人大学
12月	三朝町・三喜苑	澤田勝(サクソ奏者)	クリスマス会
12月	鳥取市・市教委国府町分室	アール・ファイブ(ポップス・バンド)、胡桃の会(二胡)	クリスマスコンサート
12月	江府町・江府小学校	杉原幹雄(イラストレーター)	明德学園交流学習

2018年

12月	湯梨浜町・アロハホール	西村光司・石川達之・柳井沙羅(歌手)	ゆりはま歌のカンコンサート
1月	智頭町・心和苑	清水増夫(映画上映)	高齢者施設映画上映会
1月	江府町・江府小学校	古瀬美保子(合唱団Glanz代表)	明德学園
1月	倉吉市・河北小学校	伊藤美都夫(元県議会議長)	修学旅行事前学習
1月	岩美町・駅前コミセン	片山長生(教育カウンセラー)	岩美町の大河ドラマ
1月	鳥取市・文化ホール	橋谷田岩男(漆研究家)	歴史講座
2月	鳥取市・ニューオータニ	小山富見男(県史編さん委員)	新年会
2月	倉吉市・倉吉交流プラザ	淀江さんご節保存会	ふるさと再発見講座
2月	江府町・防災情報センター	安達佳恵(気功太極拳)	明德学園
2月	倉吉市・社会福祉協議会	鳥取県健康マージャン連盟	健康マージャン大会
2月	鳥取市・因幡万葉歴史館	北尾勲(鳥取県歌人顧問)、田中道春(万葉集朗唱の会会長)	万葉茶会
3月	倉吉市・小鴨公民館	脇坂幸司(講談)	シニアクラブ
3月	鳥取市・歴史博物館	小山富見男(県史編さん委員)	占領期の鳥取を学ぶ会
3月	鳥取市・因幡万葉歴史館	小泉幸子(香道家)	香道体験講座
3月	鳥取市・鳥取空港	中部ものづくり道場	空港ロード開通記念
3月	鳥取市・因幡万葉歴史館	澤田勝(サクセス奏者)	和歌うたコンサート
3月	鳥取市・県立図書館	四井幸子(碧川かた研究家)	碧川かた研究会
3月	琴浦町・琴浦町社協	玉木純一(レクリエーションCD)	介護ボランティア研修会
3月	米子市・ANAホテル米子	石村隆男(コンベンション理事長)、川越博行(米子下町ガイド)	米子城フォーラム
3月	倉吉市・未来中心	中部ものづくり道場	ワークショップ
3月	鳥取市・米里公民館	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	教養講座
4月	季刊誌「志あわせへ」	紙原二郎(切り絵作家)	フロント表紙(4回)
4月	江府町・防災情報センター	木下登士彦(ひなの館ガイド)	ひな祭りコレクション
4月	日野町・たたら楽校	杉原幹雄(イラストレーター)	始業式記念講座
4月	鳥取市・県立博物館	森本良和(映画監督)	明治維新シンポジウム
4月	鳥取市・文化ホール	森本良和(映画監督)	郷土歴史講座
4月	鳥取市・県民文化会館	小山富見男(県史編さん委員)	澤田美喜に学ぶ
4月	日南町・御墓山	奥日野ガイド倶楽部	奥日野5山
4月	鳥取市・県立図書館	片山長生(元高校教員)	三菱のクニへ研究会
5月	倉吉市・鳥取短大	高田典裕(接遇教育インストラクター)	社会人マナー講座
5月	大山町・大山寺参道	千田明(大山の地蔵研究家)	大山地蔵フェア
5月	大山町・大山寺豪門湯院	大原俊二(郷土史家)、伯耆伝承隊	豪門僧正を語る
5月	米子市・春日公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座
5月	湯梨浜町・浅津ゲートボール	玉木正枝(介護予防運動士)、飯田啓子(元看護師)	因伯シルバー大会
5月	鳥取市・宝林堂	森田尾山(書家)	森田尾山書展
5月	北栄町・レクサイド大栄	玉木正枝(介護予防運動士)、飯田啓子(元看護師)	因伯シルバー大会
5月	鳥取市・久松公民館	廣澤孝彦(鳥取市観光大学講師)	鈴の音大使教育講習
5月	日野町・古民家沙々木	坂上達也(クロマチックハーモニカ奏者)	古民家コンサート
5月	若桜町・響きの森	星見清晴(鳥取県地学会会長)	ふるさと探訪会
5月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室
5月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニューススポーツ教室
5月	岩美町・役場	玉木純一(レクリエーションCD)、山下眞一郎(マジック)、佐々木洋一(ハーモニカ)	高齢者学級
5月	湯梨浜町・はわい夢広場	玉木純一(レクリエーションCD)	シニアスポーツを楽しもう
5月	倉吉市・社会福祉協議会	鳥取県健康マージャン連盟	健康マージャン
5月	鳥取市・県立図書館	北村隆雄(小鴨シニアクラブ)、吉島潤承(紙芝居)、田中精夫(郷土史家)	大河ドラマ候補発表会
5月	倉吉市・未来中心	日本将棋連盟鳥取県キッズ	将棋大会
5月	倉吉市・未来中心	種久仙十郎(鳥取県囲碁連盟会長)	囲碁大会
5月	鳥取市・福祉人材センター	徳本義則(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
5月	鳥取市・市民会館	澤田勝(サクセス奏者)	金婚式
6月	鳥取市・文化センター	小山富見男(県史編さん委員)	郷土歴史講座
6月	鳥取市・福祉人材センター	佐々木洋一(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
6月	米子市・福米東公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座
6月	倉吉市・未来中心	石川達之(防災士、フォークシング)	職員研修会
6月	米子市・福生西公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座
6月	米子市・和田公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座
6月	鳥取市・美吉町ふれあい会館	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	教養講座
6月	鳥取市・とりぎん文化会館	みずばしょうコーラス、山の手コーラス	100曲マラソン
6月	鳥取市・文化センター	四井幸子(碧川かた研究家)	郷土歴史講座
6月	鳥取市・文化センター	ギターアンサンブル・アミーゴ	ギャラリーコンサート
6月	伯耆町・八郷小学校	近藤勢津子(腹話術)	高齢者学級交流授業
6月	日南町・花口	奥日野ガイド倶楽部	たたら古道を歩く
6月	大山町・大山寺	鷺見寛幸(大山町教育長)、矢田貝繁明(大山自然歴史館長)	大山講座(大山の自然)
6月	鳥取市・文化ホール	松弘美会	民謡ふるさと巡り
6月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室
6月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニューススポーツ教室
6月	岩美町・役場	山下眞一郎(マジック)、佐々木洋一(ハーモニカ)	高齢者学級
6月	鳥取市・福祉人材センター	岩室久美子(パソコン講師)	アビリンピック審査員
6月	鳥取市・福祉人材センター	ハッピー・ウクレレ・ハーモニー	アビリンピック・アトラクション
7月	鳥取市・ひなの館	鳥取ベンチャーズ	リサイクル
7月	米子市・福米東公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座
7月	鳥取市・文化ホール	近藤盛一(マジック)	健康講座
7月	米子市・公会堂	ジョイフルプラザ	郷土・ダンス・合唱講座
7月	鳥取市・散岐公民館	山根教子(樹脂粘土人形作家)	人形づくり教室
7月	鳥取市・福部中央公民館	桂小文吾(落語家)	文化協会記念講演会
7月	鳥取市・さざんか会館	牧野芳光(県文連文芸分野座長)、北尾勲(短歌)、岸本俊彦(俳句)、森山盛桜(川柳)、胡桃の会(二胡)	ごちゃまぜ講座
7月	江府町・防災情報センター	倉益敬(鳥取県歌人协会会长)	明德学園
7月	鳥取市・わらべ館	伯耆伝承隊	夏休み体験教室
7月	鳥取市・とりぎん文化会館	筆・てまり会	結成25周年コンサート
7月	日南町・阿毘縁	伯耆国たたら顕彰会	伯耆安綱ゆかりの地巡り
7月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室
7月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニューススポーツ教室
7月	岩美町・役場	菊川貴裕(生きがいくくりアドバイザー)	高齢者学級
7月	鳥根県・隠岐島	倉光信一郎(鳥取短大講師)	学校司書研修会
7月	岩美町・役場	山下眞一郎(マジック)、佐々木洋一(ハーモニカ)	高齢者学級
7月	大山町・保健福祉センター	劇団ふたり	ことぶき学級

7月	伯耆町・溝口公民館	森則俊(木彫作家)	夏休みものづくり教室
7月	鳥取市・大茅公民館	サーフライダーズ	納涼祭
7月	鳥取市・鳥取空港	鳥取ベンチャーズ、藤井正幸(マジック)、鳥取ものづくり道場	ツインポート・フェスタ
7月	鳥取市・文化センター	クインビー・ジャズ・オーケストラ	ギャラリーコンサート
7月	鳥取市・文化センター	鳥取ものづくり道場	手づくりまつり
7月	南部町・公民館	倉益敬(県歌人会会長)	夏休み短歌教室
8月	湯梨浜町・中央公民館	角秋勝治(郷土作家研究家)	歴史講座
8月	鳥取市・因幡万葉歴史館	中永廣樹(鳥取県前教育長)	万葉集講座
8月	琴浦町・古布庄公民館	西田輝明(関金竹細クラブ)	大人のものづくり
8月	境港市・夢みなとタワー	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	大山の昆虫教室
8月	鳥取市・パレット	鳥取ものづくり道場	鳥取商工会議所事業
8月	南部町・公民館	倉益敬(県歌人会会長)	夏休み短歌教室
8月	鳥取市・文化センター	木谷清人(鳥取市文化財団理事長)	郷土歴史講座
8月	倉吉市・上灘公民館	岡村洋次(元新聞記者)、高橋孝之(映像ネットワーク会社社長)	市町村社協広報研修
8月	米子市・市内	米子美術家協会、米子工芸会	大山芸術祭
8月	鳥取市・文化ホール	鳥取ベンチャーズ、APON、アール・ファイブ、一音会、松弘美会、みずばしよコーラス、鳥取県大衆音楽協会、どじょこの会、美保踊りの会、花えみの会、鳥取ものづくり道場、陶の会、いけばな小原流鳥取支部、廣澤孝彦(鳥取市観光大学講師)、野田哲夫(俳句選者)、岡村洋次(放哉の会事務局長)	生涯現役まつり
8月	鳥取市・佐治人権センター	山口輝幸(竹細工)	夏休みものづくり教室
8月	米子市・真誠会	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座
8月	米子市・崎津公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座
8月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室
8月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニュースポーツ教室
8月	江府町・防災情報センター	鈴木稔(俳人協会)	明徳学園
8月	鳥取市・県立博物館	鳥取歴史振興会	「維新の魁」完成上映
8月	岩美町・役場	山下真一郎(マジック)、佐々木洋一(ハーモニカ)	高齢者学級
8月	米子市・加茂川	米子観光まちづくり公社、春蘭会	大山講座・米子地蔵まつり
8月	米子市・中央隣保館	近藤勢津子(腹話術)	地蔵まつり
8月	倉吉市・関金温泉	中部ものづくり道場	たたら操業
8月	米子市・日野川ほか	石丸なつ子(植田正治写真美術館講師)	日野川源流写真教室
8月	鳥取市・吉成	中尾三郎(ビジネス書法士)	賞状筆耕
8月	米子市・コンベンション	田中みつとし(トランペット奏者)	県民総合福祉大会
9月	鳥取市・文化センター	片山長生(教育カウンセラー)	郷土歴史講座
9月	米子市・さなめホール	北村隆雄(小鴨シニアクラブ)、吉島潤承(紙芝居)、田中精夫(郷土史)	大河ドラマ選考会
9月	鳥取市・モアスマイル富安	山下真一郎(マジック)	敬老会
9月	鳥取市・文化センター	濱田英一(鳥取県地域社会研究会顧問)	郷土歴史講座
9月	米子市・福原荘	キタローズ(尺八楽団)	敬老会
9月	鳥取市・県福祉人材センター	鍛冶木いつ子(鳥取県栄養士会顧問)	調理補助講習
9月	鳥取市・まさたみの里	山下真一郎(マジック)	敬老会
9月	江府町・防災情報センター	政岡日枝子(川柳作家協会)	明徳学園
9月	鳥取市・因幡万葉歴史館	根鈴輝雄(倉吉博物館長)	万葉集講座
9月	鳥取市・風紋広場	バードベンチャーズ、西小路晴子(カラオケ講師)	西日本災害チャリティー
9月	鳥取市・用瀬町	橋谷田男(漆研究家)	八頭郷土文化研究会
9月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室
9月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニュースポーツ教室
9月	岩美町・役場	山下真一郎(マジック)、佐々木洋一(ハーモニカ)	高齢者学級
9月	鳥取市・県福祉人材センター	徳本義則(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
9月	鳥取市・因幡万葉歴史館	鳥取雅楽会、アールファイブ	雅楽舞楽の宴
10月	鳥取市・県福祉人材センター	徳本義則(介護福祉士)、佐々木洋一(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
10月	鳥取市・文化センター	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	郷土歴史講座
10月	鳥取市・県福祉人材センター	佐々木洋一(介護福祉士)	介護補助スタッフ講習
10月	鳥取市・河原あすなろ	鳥取コミュニティシネマ	高齢者映画上映会
10月	琴浦町・まなびタウン	石川達之(防災士、フォークシンガー)	方言ナイト
10月	米子市・真誠会	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座
10月	鳥取市・気高公民館	花えみの会	人権文化祭
10月	鳥取市・公文書館	伊藤廉(学芸員)	明治150年展
10月	鳥取市・佐治アストロパーク	田中みつとし(トランペッター)	星空コンサート
10月	鳥取市・玄忠寺	竹内道夫(文芸家)、佐藤翔風(詩吟)	荒木又右衛門祭
10月	鳥取市・文化センター	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	自然講座
10月	倉吉市・小鴨公民館	坂本寛豊(終活講師)	シニア研修講座
10月	鳥取市・文化センター	片山長生(教育カウンセラー)	郷土歴史講座
10月	湯梨浜町・羽合温泉羽衣	鍛冶木いつ子(鳥取県栄養士会顧問)	羽衣天女伝説のタベ
10月	伯耆町・畑池公民館	米子マジック同好会	敬老会
10月	鳥取市・県民ふれあい会館	民謡さくの会・虹の会	10周年記念
10月	鳥取市・有隣荘	中永廣樹(県体協会長)	源氏物語講座
10月	米子市・ふれあいの里	鷺見寛幸(大山町教育長)	大山1300年講演会
10月	鳥取市・津ノ井小学校	小谷博徳(元高校教諭)	人権教育保護者研修会
10月	米子市・産業体育館	荒井玲子(看護師)	西部高齢者健康運動会
10月	米子市・コンベンション	遠藤甫人(鳥取県俳句協会会長)、佐藤翔風(詩吟)、由木みのる(俳句誌「城」花鳥抄選者)、中村襄介(ホトトギス同人)など	大山を詠む(俳句大会)
10月	米子市・コンベンション	森田尾山(書家)	大山さん文芸祭典
10月	米子市・コンベンション	淀江さんご節保存会	食と農のフェスタ
10月	米子市・コンベンション	米子田植唄保存会	食と農のフェスタ
10月	日南町・阿昆縁地区	温湯正人(ロゲイニング指導)	にちなんロゲイニング
10月	琴浦町・河本家住宅	真田廣幸(倉吉文化財協会長)	秋の公開イベント
10月	米子市・公会堂	伯耆国たたら顕彰会、石村隆男(コンベンションビューロー理事長)	全国たたらサミット
10月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室
10月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニュースポーツ教室
10月	米子市・皆生温泉	淀江さんご節保存会、桂小文吾(落語家)	中四国リーダー研修会
10月	岩美町・役場	山下真一郎(マジック)	高齢者学級
10月	岩美町・あすなろ	佐々木洋一(ハーモニカ)	高齢者学級
10月	琴浦町・河本家住宅	小谷恵造(河本家保存会会長)	秋の公開イベント
10月	鳥取市・末恒公民館	田中久大(郷土誌すえつね編集委員長)	郷土誌発行記念講演会
10月	鳥取市・若葉台公民館	河下哲志(トウフルート奏者)	文化祭
10月	米子市・中央隣保館	南京玉すだれ山陰保存会	文化祭
10月	鳥取市・豊実公民館	バードベンチャーズ	地区まつり

10月	南部町・農業者トレセン	港ベンチャーズ、米子マジック同好会	ボランティアフェスティバル	
10月	鳥取市・県社会福祉協議会	牧野芳光(鳥取県川柳作家協会会長)	介護川柳審査会	
11月	鳥取市・県立図書館	沖廣俊(いなば国府ガイドクラブ)	国府町歴史遺産再発見	
11月	米子市・ふれあいの里	田中文也(古代史研究者)	古代史講座	
11月	倉吉市・灘手小	淀江さんこ節保存会	灘手こーまい秋まつり	
11月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室	
11月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニューススポーツ教室	
11月	日野町・町内	伯耆国たたら顕彰会、梅林敏彦(農業)	平成のふいご祭り	
11月	鳥取市・なごみ苑	鳥取コミュニティネマ	高齢者映画上映会	
11月	鳥取市・メモワールイナバ	澤田勝(サクセス奏者)、山根澄子(大正琴)	終活フェスタ	
11月	鳥取市・文化センター	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	尚徳大学	
11月	鳥取市・万葉歴史館	甲斐清明(元高校教師)	万葉集講座	
11月	江府町・奥大山古道	佐々木満(奥日野古道保存会長)	奥大山ウォーク	
11月	倉吉市・倉吉交流プラザ	波田野頌二郎(河本緑石研究会会長)	生涯学習講座	
11月	鳥取市・青谷支所	鳥取雅友会	青谷上寺地遺跡活用	
11月	日野町・日南町	奥日野ガイド倶楽部、多田重美(大石見神社宮司)	奥日野神社めぐり	
11月	鳥取市・大茅公民館	桂小文吾(落語家)	公民館まつり	
11月	鳥取市・文化センター	田中精夫(大河ドラマを推進する会代表)	郷土歴史講座	
11月	倉吉市・鳥取短大	高田典裕(接遇教育インストラクター)	社会人マナー講座	
11月	鳥取市・やすらぎ	鳥取コミュニティネマ	高齢者映画上映会	
11月	米子市・夜見公民館	吉島潤承(紙芝居)	さわやか人生大学	
11月	鳥取市・県社会福祉協議会	小谷明男(吉野そばの会)	そば打ち研修会	
11月	米子市・伯耆町・日野町	奥日野ガイド倶楽部、杉谷愛象、高橋輝夫(米子の宝88選委員会)	富次精齋を訪ねて	
11月	鳥取市・高齢者福祉センター	鳥取流しびな真向会、のぼなの会	市民活動フェスタ	
11月	鳥取市・県民ふれあい会館	鳥取姫柿愛好会	姫柿盆栽展	
11月	倉吉市・鶴乃齋	まちゼミ・鶴乃齋	倉吉まちゼミ	
11月	倉吉市・倉吉ワイナリー	まちゼミ・倉吉ワイナリー	倉吉まちゼミ	
11月	鳥取市・産業体育館	鳥取県フォークダンス連盟	連盟10周年フェア	
11月	鳥取市・おおちだにアパート	小山富見男(県史編さん委員)	戦前の歴史地図研究	
11月	智頭町・町総合センター	田中みつとし(トランペッター)	ふれあいコンサート	
11月	鳥取市・文化センター	有本喜美男(さじ民話会)	郷土歴史講座	
11月	伯耆町・岸本公民館	劇団ふたり	高齢者学級	
11月	倉吉市・写真のカワラジヨー	まちゼミ・写真のカワラジヨー	倉吉まちゼミ	
12月	日南町・菅沢	古民家net	古民家deくつろいday	
12月	鳥取市・ホテルモナーク	山下真一郎(マジック)	忘年会	
12月	鳥取市・県立博物館	田村昭夫(鳥取昆虫同好会長)	自然シンポジウム	
12月	倉吉市・伯耆しあわせの郷	山本福寿(智頭の山人塾長)	木育講座	
12月	倉吉市・未来中心	太一車歴史文化部会、林かおる(ピアニスト)	公民館まつり	
12月	鳥取市・神戸公民館	河下哲志(トウフルート奏者)	冬の祭典	
12月	鳥取市・県立博物館	清水増夫(映画上映)	まわる映写機めぐる人生	
12月	日野町・黒坂	梅林敏彦(農業)、渡部敏樹(農業)	家庭菜園肥料づくり講座	
12月	鳥取市・湖山西公民館	山下真一郎(マジック)	クリスマス会	
12月	米子市・米子観光案内所	桂小文吾(落語家)	いも煮寄席	
12月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室	
12月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニューススポーツ教室	
12月	鳥取市・市立図書館	有本喜美男(さじ民話会)、小林龍雄(鳥取県民話サークル会長)	民話を聞く会	
12月	米子市・日本海新聞西部本社	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	大山講座・大山さんの自然	
12月	鳥取市・イオン鳥取北店	本城義照(尺八)	年忘れコンサート	
2019年	1月	北栄町・公民館由良分館	岩室久美子(終活ライフケアプランナー)	くらしの講座
	1月	米子市・米子高島屋	森田尾山(書家)、松原幹夫(写真家)	大山二人展
	1月	鳥取市・かわはら道の駅	山根教子(粘土細工作家)	粘土細工展
	1月	米子市・公会堂	国際メンタルセラピスト協会	童謡メンタルセラピー
	1月	鳥取市・県立図書館	油野利博(鳥取県体育協会名誉会長)	陸上競技を読む
	1月	境港市・夢みなとタワー	赤石有平(尺八奏者)	中海園域和菓子まつり
	1月	鳥取市・文化センター	鳥取ものづくり道場	因幡・冬の手づくり教室
	1月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室
	1月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニューススポーツ教室
	1月	鳥取市・文化ホール	小山富見男(県史編さん委員)	郷土歴史講座
	1月	倉吉市・体育文化会館	玉木純一(レクリエーションCD)	福祉学習スキルアップ講座
	1月	北栄町・道の駅	田中みつとし(トランペッター)	ディナー・コンサート
	1月	米子市・コンベンションセンター	石村隆男(米子コンベンションセンター理事長)、長谷川泰二(同前理事長)	岡本おさみトリビュートコンサート
	2月	倉吉市・未来中心	河下哲志(トウフルート奏者)、のぼなの会	童謡メンタルセラピー
	2月	鳥取市・因幡万葉歴史館	澤田勝(サクセス奏者)、北尾勲(鳥取県歌人会顧問)、田中道春(万葉集朗唱の会会長)	万葉茶会
	2月	鳥取市・因幡万葉歴史館	村上千砂(書家)	万葉かな書道教室
	2月	湯梨浜町・ゆるりん館	柳井沙羅(歌手)	ハートフルコンサート
	2月	倉吉市・未来中心	河合鎮徳(伯耆稻荷宮司)、村上俊夫(元日本海新聞論説委員長)、古川茂樹(中海テレビ放送顧問)	研修会・広報コンテスト
	2月	鳥取市・ワシントンホテル	石川達之(防災士、フォークシンガー)	モーニングセミナー
	2月	北栄町・中央公民館	岩室久美子(パソコン検定試験官)	高齢者パソコン教室
	2月	北栄町・中央公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	高齢者ニューススポーツ教室
	2月	湯梨浜町・中央公民館	杉原弘一郎(日本音楽熟成協会理事長)	女性研修会
	2月	湯梨浜町・ハワイアロハホール	のぼなの会	いきいきサロン
	2月	鳥取市・若桜通り商店街など	岡村洋次(放裁の会)	街なか美術展
	2月	鳥取市・ワシントンホテル	石山雅章(地域プランナー)	モーニングセミナー
	3月	鳥取市・文化センター	河下哲志(トウフルート奏者)、のぼなの会	童謡メンタルセラピー
	3月	岩美町・小田公民館	のぼなの会	講演会
	3月	鳥取市・歴史博物館	小山富見男(県史編さん委員)	占領期の鳥取を学ぶ会
	3月	鳥取市・布勢陸上競技場	鳥取ベンチャーズ	応援ボランティア
	3月	鳥取市・県民ふれあい会館	いけばな小原流、民踊さくの会、棕誠一郎(俳句)、荻原恵子(鳥取県フォーク)	まなび・ふれあい交流会
	3月	岩美町・小田公民館	小谷博徳(日野町議会議長)	人権講演会
	3月	倉吉市・小鴨公民館	杉原幹雄(伯耆国たたら顕彰会)	シニアクラブ
	3月	鳥取市・倉田公民館	玉木純一(レクリエーションCD)	レクリエーション教室
	3月	鳥取市・白兔はまなす園	岸本美代子(美容ボランティア)	みだしなみ講座

3月	倉吉市・倉吉交流プラザ	池本一郎(県歌人会顧問)、多田典子(羽合短歌会)、倉益敬(県歌人会長)	山上億良賞表彰式
3月	北栄町・中央公民館	松本薫(作家)	豊田父子展記念講演会
3月	鳥取市・河原福祉センター	石川達之(防災士、フォークシンガー)	人権講演会
3月	米子市・文化ホール	石村隆男(コンベンションビューロー理事長)	市民公開プログラム
3月	鳥取市・とりぎん文化会館	鳥取東部美術家協会	協会展
3月	倉吉市・日本海新聞	中森清(上神焼)、高力弘(木工)	中部手仕事展
3月	智頭町・天木森林公園	山本福寿(智頭の山人塾長)	国際森林デー
3月	鳥取市・鳥取城跡	鳥取歴史振興会	鳥取城フォーラム
3月	鳥取市・NHK鳥取支局	歴史大河ドラマを推進する会、伯耆伝承隊	大河ドラマ化要請
3月	智頭町・総合センター	玉木純一(レクリエーションCD)	ふれあいサロン研修会
3月	鳥取市・旧美敷水源地	澤田勝(サクソ奏者)、井口勉(因幡の傘踊り)	旧美敷水源地桜まつり
4月	鳥取市・興禅寺	放哉の会	放哉忌のつどい
4月	鳥取市・きなんせ広場	鳥取ペンチャーズ、ハッピー・ウクレレ・ハーモニー	鳥取桜まつり
4月	倉吉市・伯耆しあわせの郷	鳥取ものづくり道場、中部ものづくり道場、しだれ桜の里を育てる会、八東川清流クラブ	しだれ桜の里まつり
4月	鳥取市・勤労青少年ホーム	西垣小夜子(書家)	実用ペン字教室
4月	大山町・仁王堂公園	仁王堂茶楽会、米子福生風の会	花まつり
4月	鳥取市・県立図書館	四井幸子(碧川かた研究家)	研究会
4月	智頭町・山郷公民館	田中みつとしとその仲間たち、山郷ミュージックビレッジ	ミュージックビレッジ
4月	鳥取市・鳥取敬愛高校	松浦ふさ代(チェロ演奏家)	ポヌッチ音楽祭
4月	米子市・本の学校	同人誌米子文学	米子文学発表会
4月	鳥取市・勤労青少年ホーム	西垣小夜子(書家)	実用ペン字教室
4月	鳥取市・万葉歴史館	柴山抱海(鳥取県書道連合会長)	新元号「令和」揮ごう
4月	鳥取市・わらべ館	鳥取ものづくり道場、山根教子(粘土細工作家)	ものづくりひろば
4月	若桜町・駅前広場	ミンミンchieと森のくまさん	若桜桜まつり
4月	岩美町・網代漁港	県漁協網代港支部女性部	ワカメフェス
4月	鳥取市・鳥取駅	本城義照(尺八奏者)	えきなかコンサート
4月	湯梨浜町・倭文神社	鳥取雅友会	改元宵宮
4月	鳥取市・鳥取城跡	久松山を考える会	新元号「令和」点灯
5月	鳥取市・勤労青少年ホーム	西垣小夜子(書家)	実用ペン字教室
5月	米子市・児童文化センター	米子マジック同好会	マジックフェスティバル
5月	鳥取市・鳥取城跡	久松山を考える会	鳥取城攻防戦
5月	鳥取市・とりぎん文化会館	塩宏(医師)	婦人部研修会
5月	米子市・美術館	安部朱美(人形作家)	創作人形展
5月	鳥取市・青谷上寺地遺跡	吉田幹男(古地図研究家)	ふるさと探訪
5月	倉吉市・未来中心	小鴨地区振興協議会	太一車セミナー
5月	鳥取市・市民会館	ハッピー・ウクレレ・ハーモニー	うたごえコンサート
5月	境港市・夢みなとタワー	港ペンチャーズ、因幡〜ず、平家ペンチャーズ、ブルースネーク、ザ・ブルーバース	ペンチャーズカーニバル
5月	米子市・米子城跡と城下町	米子観光まちづくり公社	大山講座
5月	鳥取市・勤労青少年ホーム	西垣小夜子(書家)	実用ペン字教室
5月	岩美町・役場	岩室久美子(終活ライフケアプランナー)、山下眞一郎(マジック)、佐々木洋一(ハーモニカ)、中川信恵(民謡指導者)	高齢者大学
5月	琴浦町・社会福祉協議会	じい〜じい〜ず	デイサービス誕生会
5月	湯梨浜町・潮風の丘とまり	鳥取県グラウンド・ゴルフ協会	グラウンド・ゴルフ国際大会
5月	岩美町・浦富海岸など	いわみガイドクラブ、田後漁協婦人部	浦富海岸ジオウォーク
5月	米子市・児童文化センター	米子パラ会	春のパラ展
5月	境港市・境小学校	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	総合学習
6月	鳥取市・久松連山	久松山を考える会	鳥取城攻防マラソン大会
6月	鳥取市・文化ホール	箏・てまり会	箏曲演奏会
6月	大山町・大山寺	伯耆・伝承隊	豪円和尚命日ボランティア
6月	伯耆町・日野町	石丸なつ子(サークル)	日野川写真塾
6月	日野町・汐々樹	坂本信文(サクソ奏者)	古民家コンサート
6月	鳥取市・県立図書館	歴史大河ドラマを推進する会	総会、候補発表会
6月	鳥取市・鹿野町公民館	どじょこの会	敬老会
6月	米子市・ふれあいの里	笑劇座	ファミリーフェスティバル
6月	米子市・美術館	伯耆書院	山陰鉄道書道展
6月	鳥取市・鹿野町公民館	澤田勝(鳥取県健康マージャン連盟副会長)	健康マージャン
6月	鳥取市・さびアストロパーク	里山地域研究会	青空体験塾
6月	鳥取市・旧美敷水源地	美敷水源地保存会	ホタル・サクソ観賞会
6月	鳥取市・因幡万葉歴史館	中永廣樹(県体協会長)	万葉集講座
6月	若桜町・平家落人の里	平家弘之(自治会長)、平家ペンチャーズ	平経盛祭り
6月	米子市・福生西公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	隠岐騒動講演会
6月	江府町・鏡ヶ成	矢田貝黎明(大山自然歴史館長)	湿原自然観察会
6月	岩美町・道の駅	APON	コンサート
6月	鳥取市・わらべ館	四井幸子(碧川かた研究家)	露風生誕130年コンサート
6月	鳥取市・県立博物館	鳥取歴史振興会	明治維新大激論
6月	鳥取市・福祉人材研修センター	APON	アトラクション
6月	岩美町・岩井温泉など	いわみガイドクラブ	ガイド養成講座
6月	鳥取市・大河ドラマを推進する会	田中精夫(郷土史家)、尾崎孝介(日本語講師)、笹間政典(通訳)、伯耆・伝承隊	紙芝居・豪円和尚翻訳
7月	佐用町・健康の里みかづき	メンタルセラピスト協会	童謡で元気になりましょう
7月	八頭町・八東体育文化センター	桂小文吾(落語家)	講演と落語と踊り
7月	鳥取市・パレット	鳥取山草同好会	鳥取山野草展、苔玉講習会
7月	鳥取市・県立福祉研修センター	坂本昭文(元南部町長)	福祉研究学会
7月	鳥取市・流しびなの館	鳥取ペンチャーズ	リサイクル
7月	米子市・尚徳中学校	荒井玲子(看護師)	人権教育
7月	境港市・老人福祉センター	渡部敏樹(農業)	中海の話
7月	八頭町・船岡公民館	桂小文吾(落語家)	講演と落語
7月	八頭町・中央公民館	入江宜明(元わかさ生涯学習情報館長)	研修会
7月	鳥取市・あおや郷土館	清末忠人(自然に親しむ会会長)	清末コレクション展
7月	鳥取市・とりぎん文化会館	小原流鳥取支部	創立70周年記念花展
7月	境港市・夢みなとタワー	清末忠人(自然に親しむ会会長)	夏休みこども教室
7月	倉吉市・打吹回廊とその周辺	APON、因伯音、倉吉打吹太鼓、打吹童子ばやし	打吹回廊オープン
7月	鳥取市・浄宗寺	菊弘瀬恭子(箏・てまり会代表)	街角コンサート

7月	鳥取市・高住公民館	山下眞一郎、藤井正幸(マジック)	ふれあいデイサービス
7月	倉吉市・倉吉交流プラザ	真田広幸(倉吉文化財協会長)	文化財講演会
7月	北条町・北条砂丘	中部ものづくり道場	砂鉄集め
7月	鳥取市・友和苑	原孝幸(安来節踊り師範)	夏の集い
7月	鳥取市・厚和寮	どじょっこの会	納涼祭
8月	琴浦町・旧以西小学校	じい〜じい〜ず	いさい夢まつり
8月	鳥取市・荒木神社	佐藤翔風(詩吟)、本城義照(尺八奏者)	夏祭り
8月	南部町・天満庁舎	倉益敬(鳥取県歌人会会長)	短歌教室
8月	鳥取市・美保公民館	清末忠人(鳥取自然に親しむ会会長)	川の生き物教室
8月	鳥取市・養源寺	平家六栄(紙芝居)	はだしのゲン
8月	境港市・老人福祉センター	佐々木邦広(元境港市教育長)	絵葉書に見る戦前の境港
8月	鳥取市・県民ふれあい会館	現代詩人協会	交流会
8月	境港市・夢みなとタワー	加藤哲英(鳥取県美術家協会会長)	夏休みこども教室
8月	鳥取市・文化センター	鳥取ものづくり道場	因幡のものづくり教室
8月	岩美町・役場	澤田康路(鳥取県建築士会専務理事)	空き家利用シンポジウム
8月	鳥取市・県立博物館	有本喜美男(さじ民話会)、中嶋寿美子(民話の語り部)	鳥取県の民話を聞く会
8月	浜田市・市立中央図書館	倉光信一郎(鳥取短大講師)	研修会
8月	米子市・加茂川	米子観光まちづくり公社、春蘭会	加茂川まつり
8月	倉吉市・関金町	中部ものづくり道場	たたらワークショップ
8月	鳥取市・文化センター	河内おどり隊、因幡傘踊り保存会、勝部岩力踊り保存会、淀江さんこ節保	とっとり手踊り・手笠踊り
8月	倉吉市・成徳公民館	紙原四郎(切り絵作家)	切り絵教室
9月	鳥取市・とりぎん文化会館	真田広幸(倉吉文化財協会長)	戦国時代フォーラム
9月	倉吉市・市立図書館	大河ドラマを推進する会	大河ドラマ選考会
9月	米子市・貴布禰神社	米子マジック同好会	車尾ふれあい祭
9月	米子市・夜見公民館	定岡敏行(境港楽習会代表)	国際教養講座
9月	米子市・市立図書館	佐々木満(元米子市立図書館長)	万葉集講座
9月	倉吉市・倉吉交流プラザ	中永廣樹(前鳥取県教育長)	万葉集の言葉を味わう
9月	日野町・日野郡神社めぐり	奥日野ガイド倶楽部	奥日野神社めぐり
9月	境港市・老人福祉センター	山本美知枝(青い目の人形研究家)	境港楽習会
9月	鳥取市・とりぎん文化会館	米子マジック同好会、どじょっこの会、美保踊りの会、のぼなの会	県民総合福祉大会
9月	米子市・新山自治公民館	山田義則(防災士)	敬老会
9月	鳥取市・モアスマイル富安	原孝幸(安来節踊り師範)	敬老会
9月	鳥取市・中郷公民館	小泉幸子(香道家)	体験講座
9月	倉吉市・打吹回廊とその周辺	中部ものづくり道場、黒川哲夫(倉吉風づくり)、玉木純一(レクリエーションCD)、小谷和上(仏師)、倉吉商工会議所、倉吉打吹太鼓、ブルースナイク、田中みつとし(トランペット)、倉吉ギターアンサンブル、脇坂幸司(講師)、太一車歴史文化部会、石川達之(防災士、フォークシンガー)、林かおる(ピアニスト)、赤瓦ジョニー、ブルーレイズ	生涯現役まつり
9月	倉吉市・成徳公民館	紙原四郎(切り絵作家)	切り絵教室
9月	境港市・時の里	スマイルせつこ(腹話術)	敬老会
9月	鳥取市・国府町	いなば国府ガイドクラブ、本城義照(尺八奏者)	日本遺産をめぐる
9月	八頭町・郡家西小学校	桂小文吾(落語家)	講演と落語
9月	倉吉市・未来中心	根鈴輝雄(倉吉博物館長)	彫刻めぐり
9月	鳥取市・シニアステージ幸町	藤井正幸(マジック)	敬老会
10月	大山町・福祉保健センター	榮原正(ペンションわくわく村)、遠藤道夫(からす天狗)、鷺見寛幸(大山町教育長)	大山講座「大山食のまつり」
10月	米子市・夜見公民館	大谷治(米子工芸会代表)	ステンドグラスづくり
10月	湯梨浜町・水明荘	荒井玲子(看護師)	人権講座
10月	境港市・老人福祉センター	竹内道夫(文芸史家)	文芸講座
10月	湯梨浜町・水明荘	鍛冶木いつ子(鳥取県栄養士会顧問)	羽衣天女サミット
10月	倉吉市・市内	根鈴輝雄(倉吉博物館長)	大江磐代ゆかりの地めぐり
10月	鳥取市・国府町	いなば国府ガイドクラブ	国指定文化財めぐり
10月	鳥取市・国府町	池本一郎、北尾勲(県歌人会顧問)、万葉集朗唱の会ほか	万葉フェスティバル
10月	大山町・大山寺	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	大山講座歴史ガイド
10月	鳥取市・県立博物館	碧川かた研究会、APON	フォーラム
10月	鳥取市・青谷町	河根裕二、長谷川正昭(青谷ガイドネットワーク)	日本遺産をめぐる
10月	鳥取市・美保南公民館	川上巧(いやし地蔵作家)	教養講座
10月	倉吉市・八島農具興業	中部ものづくり道場	たたらワークショップ
10月	米子市・心身障害者センター	笑劇座	秋まつり
10月	南部町・農業者トレセン	APON	ポランティアフェスティバル
10月	倉吉市・成徳公民館	紙原四郎(切り絵作家)	切り絵教室
11月	鳥取市・因幡万葉歴史館	中永廣樹(元県教育長)	万葉集講座
11月	鳥取市・福祉人材研修センター	八幡健一、松本俊行(東部ものづくり道場)、紙原四郎(切り絵作家)など	支え愛フェスタ
11月	日野町・役場周辺	伯耆国たたら顕彰会	ふいごまつり
11月	鳥取市・市民会館	鳥取県民踊指導者連盟	民踊のつどい
11月	鳥取市・大茅公民館	多賀利寛(鳥取天文協会)	星の話
11月	境港市・老人福祉センター	寺澤敬人(済生会常務)	鳥根半島の洞窟遺跡
11月	鳥取市・扇ノ山	いなば国府ガイドクラブ、いわみガイドクラブ	トレッキング
11月	倉吉市・社公民館	福井伸一郎(前倉吉市教育長)	研修会
11月	米子市・日野川河川敷	米子福生風の会	風揚げ大会
11月	鳥取市・県立福祉研修センター	村上俊夫(元日本海新聞論説委員)、古川茂樹(中海テレビ放送顧問)	広報コンテスト
11月	鳥取市・湖山ツクイデイ	民謡弦声会	お楽しみ会
11月	倉吉市・市福祉センター	鳥取お手玉の会	お手玉遊びの会
11月	倉吉市・人形のたいら	人形のたいら	まちゼミ
11月	倉吉市・きたや寝具	きたや寝具	まちゼミ
11月	倉吉市・打吹回廊	打吹回廊・打吹天女	まちゼミ
11月	境港市・しおさい会館	小山富見男(県史編さん委員)	鳥取県の満蒙開拓の歴史
11月	鳥取市・文化センター	北村隆雄(太一車歴史文化部会長)	歴史講座
11月	鳥取市・湖山西公民館	平家裕一(公民館長)	スーパーカレッジ
11月	鳥取市・県民ふれあい会館	吉田幹男(古地図研究家)	伊福部昭の音楽
12月	米子市・米子高島屋	米子バラ会、森田尾山(書家)、安部朱美(人形作家)、入江淑元(画家)	バラのパレード
12月	鳥取市・文化センター	鳥取ものづくり道場	冬の手づくり教室
12月	鳥取市・文化ホール	鳥取県能楽連合会	合同能楽祭
12月	米子市・奥日野	伯耆国たたら顕彰会、小谷博徳(日野町議会議長)、中尾慶治郎(祐生出会いの館副館長)	伯耆国たたらゆかりの地めぐり
12月	鳥取市・文化センター	稲垣晴雲(書家)	文化講座
12月	鳥取市・気高総合支所	濱田英一(鳥取県地域社会研究会顧問)	歴史講座

2020年

12月	米子市・日本海新聞西部本社	岸本俊彦(鳥取県俳句協会会長)、遠藤甫人(鳥取県俳句協会副会長)、佐藤夫雨子(米子俳句作家協会会長)、由木みのる(俳句誌「城」花鳥抄選者)、中村襄介(ホトギス同人)	大山俳句表彰式	
12月	米子市・日本海新聞西部本社	鷺見寛幸(大山町教育長)	大山講座	
12月	米子市・日本海新聞西部本社	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	大山講座	
12月	鳥取市・神戸公民館	アンサンブル済美	クリスマス会	
12月	倉吉市・三朝町	伯耆国たたら顕彰会ほか	伯耆安綱ゆかりの地めぐり	
12月	鳥取市・文化センター	内田克彦(大河ドラマを推進する会代表)	歴史講座	
12月	鳥取市・県民ふれあい会館	クインビー・ジャズ・オーケストラ	演奏会	日記掲載
12月	米子市・県内	高橋亮(米子文学同人)	書籍「澤田家の人びと」出版	ページ
1月	鳥取市・県立博物館	鳥取県写真家連盟	鳥取県写真家連盟展	1
1月	鳥取市・わらべ館	中嶋須美子(昔話語り部)	新春語り部	2
1月	倉吉市・倉吉博物館	鳥取県美術家協会	鳥取県美術家協会展	3
1月	鳥取市・厚和寮	澤田勝(サックス奏者)、脇坂幸司(講師)	新年会	4
1月	倉吉市・小鴨公民館	紙原四郎(切り絵作家)	小鴨シニアクラブ新年会	5
1月	鳥取市・イオンモール鳥取北	のばなの会、鳥取コミュニティシネマ、鳥取県フォークダンス連盟、ギターアンサンブル・アミーゴ、鳥取流しびな真向会	鳥取市民活動フェスタ	6
1月	鳥取市・市文化センター	岡村洋次(放哉の会)	鳥取市民大学歴史講座	7
1月	倉吉市・小鴨公民館	ころころ草取り物語一座	男のクラブ	8
1月	鳥取市・裁判所	小谷公子(太極拳)	メンタルヘルス講座	
1月	米子市・裁判所	小谷公子(太極拳)	メンタルヘルス講座	
1月	北栄町・道の駅大栄	田中みつとしとその仲間たち	新春ディナー・コンサート	
1月	鳥取市・桐友ホール	田中精夫(郷土史家)	土地家屋調査士会研修会	9
2月	鳥取市・宇倍神社	吟道翔風流日本吟翔会	吟翔会奉吟60周年	10
2月	若桜町・公民館	川上巧(いやし地蔵作家)	若桜町社協いきいきサロン	
2月	倉吉市・倉吉セントパレス	小山富見男(新県史編さん委員)	鳥取県環境衛生組合研修会	11
2月	境港市・境公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	教養講座	12
2月	岩美町・東コミセン	のばなの会	岩美町人権講習会	13
2月	米子市・山陰歴史館	小谷博徳(日野町議会議長)	若者と民俗芸能	14
2月	鳥取市・県立博物館	油野利博(鳥取県体育協会名誉会長)	鳥取地域史研究会総会	15
3月	鳥取市・鹿野往來交流館	上田勝俊(コレクター)	伊能忠敬と鹿野	16
3月	真庭市・久世公民館	池本一郎(県歌人会顧問)	真庭市短歌大会	
3月	鳥取市・わらべ館	米澤章夫(脳トレプランナー)	ゲームの世界	17
3月	鳥取市・とりぎん文化会館	鳥取洋画家協会	鳥取洋画家協会展	18
4月	倉吉市・鳥取短期大学	藤井喜伸(鳥取県社会福祉協議会会長)	現代鳥取学	19
4月	鳥取市・福祉人材センター	勝原公一(生涯現役コーディネーター)	記事の書き方・取材の仕方	20
5月	倉吉市・小鴨公民館	小鴨シニアクラブ	はがき出し運動	21
5月	米子市・義方公民館	古川重樹(中海テレビ特別顧問)	義方成人学級	
5月	米子市・灘町	米子観光まちづくり公社	朝市	22
5月	米子市・本の学校	同人誌米子文学	合評会	
5月	鳥取市・文化センター	青木清輝(庭園文化研究者)	鳥取尚徳大学教養講座	23
5月	八頭町・杉原邸	杉原一司短歌集刊行会	杉原一司没後70年の集い	24
5月	倉吉市・日本海新聞中部本社	玉木純一(レクリエーションCD)	手づくりパズル・プレゼント	25
5月	鳥取市・小倉天体物理観測所	多賀利寛(鳥取天文協会)、足利裕人(鳥取環境大特任教授)	星空観望会	26
6月	境港市・渡部農園	渡部敏樹(農業)	実習農場オープン	27
6月	境港市・根平邸	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	「た・ま・え・ま・る」出版	28
6月	鳥取市・川端巢箱	紙原四郎(切り絵作家)、柿田隆(クラフト作家)、苅込由紀(らたん加工)、前田富美子(パッチワーク)、山根教子(樹脂粘土人形作家)	クラフト みんなの猫展	29
6月	日野町・日野軍デザイン会議	杉原幹雄(作曲家)	「コロナに負けるな」曲づくり	30
6月	鳥取市・禊谿公園	禊谿公園の美観を守る会	花菖蒲が咲きました	31
6月	北栄町・大栄環境改善センター	倭国古代史研究会	例会	32
6月	鳥取市・市文化ホール	鳥取県大衆音楽協会	大衆音楽祭	33
6月	鳥取市・県立博物館	油野利博(鳥取県体育協会名誉会長)	輝いていた60年代	34
6月	鳥取市・県民ふれあい会館	加藤典紅(接遇インストラクター)	接遇研修	35
6月	鳥取市・県立博物館	大杖正彦(元五輪日本代表選手)	輝いていた60年代	36
6月	米子市・米子城と城下町	米子観光まちづくり公社、岡田信行(まち歩きレポーター)	米子城歴史ウォーク	37
6月	鳥取市・米里公民館	グループさくら	帯アート	38
7月	倉吉市・倉吉シティホテル	川西義人(漫画家)	くらよし市報(4コマ漫画)	39
7月	鳥取市・中郷小学校	北尾勲(県歌人会顧問)	出前短歌講座	
7月	日野町・都合山	奥日野ガイド倶楽部	都合山たたらトレッキング	
7月	鳥取市・国府中学校	池本一郎(県歌人会顧問)	出前短歌講座	40
7月	鳥取市・県立鳥取盲学校	北尾勲(県歌人会顧問)	出前短歌講座	
7月	米子市・大篠津公民館	根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	大山歴史ロマン紀行	
7月	八頭町・中央公民館	新家完司(川柳)	としょかん川柳教室	41
7月	米子市・古代の丘公園	石丸なつ子(サークルU)	写真撮影会	
7月	鳥取市・県立博物館	橋谷田岩男(漆研究者)	漆塗り体験講座	42
7月	鳥取市・宮ノ下小学校	池本一郎(県歌人会顧問)	出前短歌講座	
7月	鳥取市・用瀬小学校	北尾勲(県歌人会顧問)	出前短歌講座	
7月	八頭町・船岡町	本城義照(尺八奏者)	ミニふなおか納涼祭	
7月	鳥取市・仁風閣	小山富見男(鳥取地域史研究会会長)	明治の韋駄天長之助	43
7月	鳥取市・ルーテル幼稚園	多賀利寛(鳥取天文協会)	星を見る会	44
7月	鳥取市・ふれあい会館	澤田勝(サックス奏者)	ランチタイム歌謡ショー	45
7月	鳥取市・市文化センター	木谷清人(鳥取民藝美術館常務)	吉田璋也の活動	46
8月	県内	片山長生(元高校教師)、「三愛のクニへ」研究会	小説「愛郷」出版	47
8月	南部町・天満庁舎	倉益敬(鳥取県歌人会会長)	短歌教室	
8月	大山町・大山寺周辺	矢田貝繁明(大山自然歴史館長)	大山の森観察会	48
8月	鳥取市・西いなば気楽里	竹の風車同好会	竹の風車手づくり教室	49
8月	琴浦町・大栄環境改善センター	倭国古代史研究会	例会	
8月	鳥取市・久松山	久松山を考える会	大文字・アマビエ点灯	50
8月	大山町・仁王公園	桂小文吾(落語家)、鷺見寛幸(大山町教育長)、杉谷愛象(伯耆伯楽クラブ主宰)、上田美風(尺八奏者)	仁王堂星取祭	51
8月	米子市・湊山公園	田村昭夫(鳥取昆虫同好会会長)	「大助・花子のはてはてな」	52
8月	南部町・天満庁舎	倉益敬(鳥取県歌人会会長)	短歌教室	53
8月	鳥取市・愛真幼稚園	山下眞一郎(マジック)	夏休みお楽しみ会	54
8月	南部町・祐生出合いの館	森田尾山(書家)	書展「金子みすゞに憑かれて」	55
8月	湯梨浜町・上浅津農事集会所	鳥取県中部建築工務士会	木工教室	56
8月	米子市・車尾公民館	廣澤虔一郎(米子文学代表)	車尾の歴史	57

8月	三朝町・桜づつみ公園	里山地域研究会	三朝あおぞら体験塾	58
8月	若桜町・公民館池田分館	平家ベンチャーズ	若桜町寿大学	
8月	北栄町・北条オートキャンプ場	中部ものづくり道場	砂鉄集めと選鉱体験	
8月	鳥取市・文化センター	小山富見男(鳥取地域史研究会会長)	天変地異と防災の日	59
8月	米子市・和田公民館	ことぶき劇団ふたり	山陰の神々を訪ねて	60
8月	大山町・中山公民館	亀田洋子(樹脂粘土講師)	ものづくり講座	61
8月	鳥取市・とりぎん文化会館	打吹童子ばやし、三朝さいとりさし	とっとり伝統芸能まつり	62
9月	米子市・県公民館	矢田貝繁明(大山自然歴史館長)	大山の自然	
9月	鳥取市・鹿野総合支所	亀井さん検定実行委員会	亀井さん検定	63
9月	鳥取市・青谷町総合支所	ハッピーウクレレハーモニー	高齢者教室	64
9月	鳥取市・若葉台地区	山田義則(防災士)	認知症高齢者等捜索訓練	65
9月	鳥取市・福祉人材研修センター	勝部岩力踊り保存会	DVD寄贈	66
9月	米子市・まちなか観光案内所	桂小文吾(落語家)	大山収穫祭	
9月	鳥取市・米里公民館	谷口知佐子(ヨーガ講師)	ヨーガ体験教室	67
9月	鳥取市・県民ふれあい会館	岸本みゆう(オカリナ奏者)	ランチタイムコンサート	68
9月	倉吉市・小鴨公民館	太一軍研究委員会	太一軍出版	69
9月	鳥取市・バードハット	紅のくれぐれも乙女	青い鳥コンサート	70
9月	琴浦町・花見潟墓地	小谷恵造(河本家保存会会長)	安倍晴明供養祭	71
9月	大山町・有美園	桂小文吾(落語家)	桂小文吾一門会	
9月	米子市・米子市立図書館	松本薫(作家)	日野三部作講演会	72
9月	米子市・コンベンションセンター	山田義則(防災士)	地域防災推進大会	
9月	鳥取市・文化センター	吉田茅穂子(日本画家)	ジオパーク認定10周年展	73
9月	倉吉市・八島農具興業	中部ものづくり道場、八島弘明(八島農具興業社長)	たたら操業とナイフづくり体験	74
10月	日南町・日南町美術館	森井徳訓(刀剣研究家)	伯耆の刀剣の歴史	75
10月	米子市・皆生温泉観光センター	安部朱美(人形作家)、淀江傘伝承の会	皆生温泉100年記念展	76
10月	米子市・日本海新聞西部本社	遠藤甫人(鳥取県俳句協副会長)、佐藤夫雨子(米子俳句作家協会会長)、由木みのる(俳句誌「城」花鳥抄選者)、中村襄介(ホトギス同人)	大山俳句大賞選考会	
10月	鳥取市・国府町コミセン	鳥取雅友会	雅楽舞楽の宴	77
10月	日南町・日南町美術館	伯耆国たたら顕彰会	古伯耆物のルーツを巡る	
10月	日野町・都合山たたら跡	奥日野ガイド倶楽部	古伯耆物のルーツを巡る	
10月	倉吉市・小鴨公民館	佐分利育代(鳥取大学名誉教授)	シニア健康体操	78
10月	鳥取市・用瀬図書館	谷口輝男(鳥取愛石会)	佐治川石の魅力	79
10月	倉吉市・倉吉シティホテル	ブルー・レイズ、MALTA(サクセス奏者)	ディナーショー	80
10月	鳥取市・あまから亭	石田一高(劇団どんぐり代表)、福本弘文(人形作家)	麒麟獅子マリオネット練習	81
10月	米子市・ふれあいの里	山陰古代史研究会	古代史連続講座	
10月	鳥取市・市文化センター	藪田道男(鳥取ものづくり道場)	木工遊び体験	82
10月	倉吉市・八島農具興業	中部ものづくり道場	鍛冶体験(マイナイフづくり)	
10月	鳥取市・市文化ホール	鳥取県能楽連合会	観世・宝生・喜多流謡曲大会	83
10月	米子市・就将公民館	安部朱美(人形作家)	講演会	
10月	日南町・清水屋、かつみや	古民家ネットワーク、坂上達也(クロマチックハーモニカ奏者)	古民家でくつろいで	84
10月	米子市・児童文化センター	米子バラ会	秋のバラ展	
10月	米子市・米子市美術館	福島多暉夫(写真家)	杵島隆生誕100年記念展	
10月	鳥取市・パレットとっとり	桂小文吾(落語家)	鳥取寄席	85
10月	鳥取市・扇ノ山	いなば国府ガイドクラブ	扇ノ山のブナ林を歩く	
10月	鳥取市・とりぎん文化会館	内田克彦・田中精夫(大河ドラマを推進する会共同代表)、小山富見男(鳥取地域史研究会会長)、徳岡義広(鹿野町民音楽祭事務局長)、木下登士彦(郷土史研究家)、蔵本紀代子(司会)、片山長生(元高校教師)、四井幸子(碧川かた研究家)、鳥取ベンチャーズ、AMYU、アール・ファイブ、伯耆・伝承隊、小鴨まちづくり協議会、ころころ草取り物語一座、日本吟柳会、	生涯現役まつり	86~89
10月	倉吉市・倉吉シティホテル	川西義人(漫画家)、加藤哲英(県美協会会長)、MALTA(サクセス奏者)	漫画&サクススライブ	90
10月	鳥取市・とりぎん文化会館	鳥取県能楽連合会	新能	
11月	境港市・夢みなと公園	港ベンチャーズ	学宴祭	91
11月	日野町・役場前	伯耆国たたら顕彰会	令和のふいご祭	
11月	鳥取市・青谷上寺地遺跡	石井博文(鳥取ものづくり道場)	古代の宝石・ガラス玉づくり	92
11月	米子市・加茂川広場	米子観光まちづくり公社、春蘭会、松下順一(画家)	秋の加茂川まつり	93
11月	倉吉市・倉吉未来中心	大西保江(ケーナ奏者)、倉吉みんわの会、とっどりの民話を語る会	とりアート2020中部	94
11月	鳥取市・国府町	いなば国府ガイドクラブ	国府の宝を探して	
11月	鳥取市・とりぎん文化会館	小山富見男(新県史編さん委員)	新県史が拓くふるさとの未来	
11月	鳥取市・とりぎん文化会館	柴山抱海(放裁の会会長)、岡村洋次(放裁の会事務局長)	「放裁を書く」表彰式	95
11月	鳥取市・市文化センター	吉田茅穂子(日本画家)、平家六栄(紙芝居)、門脇康一(ギター奏者)	30周年記念展	96
11月	倉吉市・倉吉未来中心	倉吉ギターアンサンブル	とりアート2020中部	
11月	琴浦町・中井旅館	桂小文吾(落語家)	夢現の風設立3周年記念	
11月	鳥取市・福祉人材研修センター	石谷泰子(薬膳料理家)	賀露地区男の料理教室	97
11月	米子市・淀江傘伝承館	淀江傘伝承の会	米子白鳳高校郷土芸能学習	98
11月	米子市・ふれあいの里	山陰古代史研究会	古代史連続講座	99
11月	米子市・夜見公民館	伯耆・伝承隊	紙芝居で知る「大山さん」	
11月	江府町・赫山ほか	倭国古代史研究会	赫山高天原現地講座	
11月	鳥取市・ノハス	紅のくれぐれも乙女	まちゼミ	100
11月	鳥取市・絹の館サービス	渡辺光子(絹の館サービス)	まちゼミ	101
11月	鳥取市・県立公文書館	伊藤康(専門員)	昭和のとっとり展	102
11月	大山町・名和地区	生田清(友歩会)	名和長年の足跡を訪ねて	103
11月	鳥取市・国府町コミセン	眞田廣幸(倉吉文化財協会会長)	戦国時代の東伯耆	104
11月	日南町・阿毘縁	奥日野ガイド倶楽部	大人の遠足	
11月	鳥取市・ヤマガタカメラ	山縣勇太郎(カメラのヤマガタ)	まちゼミ	105
11月	鳥取市・市歴史博物館	久松山を考える会	久松山城合戦	106
11月	鳥取市・金居商店	鳥取県愛謡会	まちゼミ	107
11月	鳥取市・栄養倶楽部	赤松玲子(栄養倶楽部鳥取)	まちゼミ	108
11月	湯梨浜町・青少年の家	紙原四郎(切り絵作家)	切り絵教室	
11月	北栄町・環境改善センター	倭国・山陰古代史研究会	集中講座	109
11月	鳥取市・とりぎん文化会館	鳥取ベンチャーズ、箏・手まり会、TERU功山(尺八奏者)	とりアート東部フェスティバル	110
11月	若桜町・若桜鉄道	西村知英子(シンガーソングライター)、鎌谷元(ピアノ演奏)、福本弘文(木工芸作家)	若桜鉄道の旅	111
12月	米子市・コンベンションセンター	石村隆男(コンベンションセンター理事長)、黒田一正(伯耆の古代を考える会)	弓浜半島物語出版	112
12月	米子市・日本海新聞西部本社	遠藤甫人(鳥取県俳句協副会長)	大山俳句大賞表彰式	113
12月	米子市・日本海新聞西部本社	鷲見寛幸(大山町教育長)、根平雄一郎(境港歴史研究会代表)	大山講座	114~115

12月	鳥取市・鹿野公民館	小谷裕美(収納アドバイザー)	年末の大掃除	116
12月	岩美町・いわみんホール	澤田廉三顕彰会、AMYU	小説「愛郷」出版記念講演会	117
12月	倉吉市・小鴨公民館	小鴨シニアクラブ、佐々木道也(作曲家)	はがき出し運動の歌発表会	118
12月	日南町・日南町役場	中永廣樹(日本海情報ビジネス学校長)	生涯学習講座	119
12月	米子市・就将公民館	桂小文吾(落語家)	笑いは人生の宝	
12月	米子市・永江公民館	坂上達也(ハーモニカ奏者)	小さな楽器、大きな感動	
12月	鳥取市・神戸公民館	石田一高(劇団どんぐり代表)、福本弘文(木工芸作家)	冬の祭典	120
12月	鳥取市・殿ダム	黒川哲夫(倉吉イカの会)、いきいき成器の会	因幡万葉風揚げ大会	121
12月	米子市・日本海新聞西部本社	鷺見寛幸(大山町教育長)	大山講座(こども大山クイズ)	122~123
12月	鳥取市・中央図書館	田中精夫(郷土史研究家)	郷土史講演会	
12月	鳥取市・バードハット	ムジークテアターTOTTORI、紅のくれぐれも乙女、若木美世子(ウクレレ)	バードハット・クリスマス	124
12月	鳥取市・鳥取環境大	足利裕人(鳥取環境大特任教授)	サイエンスカフェ	125

2020年 写真ダイジェスト



「コロナに負けるな」はがき出し運動(5月・倉吉市)



ブナの森を歩く(8月・大山町)



たたら製鉄体験(9月・倉吉市)



ランチタイム・コンサート(7月・鳥取市)



マジック体験教室(8月・鳥取市)



古民家コンサート(10月・日野町)



短歌教室(7月・鳥取市)



大工さんに学ぼう(8月・湯梨浜町)



名和・太平記めぐり(11月・大山町)



苗植え(6月・境港市)



竹切り体験(8月・三朝町)



Marionetteで遊ぼう(12月・鳥取市)

2020年1月9日

鳥取市の県立博物館で鳥取県写真家連盟(杉本雅美会長)の合同写真展が開かれています。1月17日まで。

鳥取の写真家といえば、植田正治(1913～2000年)です。地元鳥取を拠点に生み出された作品は、国内外から高く評価されています。被写体をオブジェのように配置した演出写真は、写真発祥の地フランスで Ueda-cho(植田調)と呼ばれるほどです。

その植田正治が中心となって県内の写真グループが集まり、1997年に鳥取県写真家連盟が発足しました。現在会員は19団体、233人。合同写真展や写真セミナーを開き、写真の普及活動などを行っています。

合同写真展は今年で21回目。今回は18団体から187点の作品が集まりました。個性あふれる作品が見られるのも魅力のひとつです。

合同展のパンフレット表紙を飾ったのは鳥取市の三坂宏さんです。山陰海岸・香住の雄大な日の出を和紙にプリントし、まるで日本画のようです。三坂さんは鳥取写真研究会に所属し、日本画のような写真を撮りたいと、日々研さんを積んできたそうで、今回その成果を表現できたと喜んでいました。

事務局長の中山哲史さんは「スマートフォンやSNSの普及によって、写真がより身近なものになりました。もっと写真を趣味にする仲間を増やしていきたい」と意気込んでいます。写真を上手に撮りたい、いろいろな写真を見てみたいーなど、興味のある方は中山さんへご連絡ください(☎090-4571-9579)。



中山哲史さん



鳥取県写真家連盟の合同写真展



三坂宏さんとパンフレットの表紙を飾った作品「夜明けの静寂」

2020年1月11日

令和2年は「子(ねずみ)年」。これにちなんで鳥取市の童謡・唱歌とおもちゃのミュージアム「わらべ館」で、語り部・中嶋須美子さんによるねずみの昔話があり、およそ50人が楽しいひと時を過ごしました。

中嶋さんは大正生まれ、今年8回目の年女です。鳥取など県東部に伝わる昔話の伝承に長く携わり、「鳥取市民活動表彰」を受賞しています。その語り口は鳥取方言をまじえて優しく、多くの人から親しまれています。中嶋さんは「昔こっぼり、ごんぼの葉」という“おまじない”で話を締めるのが特徴です。

この日は「ねずみの楽土」「ねずみの予言」「ねずみの相撲」「ねずみの極楽」の4話を語りました。このうち「ねずみの極楽」は市内東大路に伝わる話で、そば焼き餅を子ねずみたちに分け与えたおじいさんに、親ねずみがお礼に「極楽の暮らし」をお返ししたのに対し、隣の欲張りいさんにはねずみの住み家から出られなくして、一生「もぐら餅」にしてしまうという怖い話です。中嶋さんはヒトとねずみのやり取りを紹介しながら、正直な暮らしの大切さを説いていました。

「わらべ館」では唐辛子ねずみ(京都府や埼玉県)、大国ねずみ(福島県)、米食いねずみ(石川県)など、県内はじめ日本各地のねずみの郷土玩具を集めて「ねずみ賛」を開催しています。



中嶋須美子さん



中嶋さんは子どもたちにお手玉遊びも教えました



日本各地のねずみの郷土玩具展

鳥取県立美術館が2024年度(令和6年度)の開館に向けて動き出しました。計画から20年余り。待望久しかった美術の殿堂が鳥取県のど真ん中、倉吉市に誕生します。倉吉博物館で1月18日まで鳥取県美術家協会(加藤哲英会長)の作品展がありました。

県立美術館は鳥取二十世紀梨記念館や倉吉未来中心のそば、大御堂廃寺跡(国史跡)の隣にできます。コンセプトは「とつとりの未来をつくる美術館」です。殿堂づくりに県は民間の資金やノウハウを活用する「PFI方式」を導入。施設の所有権は県にあるものの、事業者は施設の建設や維持管理、運営を任せ、県は学芸業務を担うというものです。その事業者グループが決まりました。

県教委によると、設計は「建築界のノーベル賞」といわれるプリツカー建築賞に輝く槇文彦事務所が手がけます。計画では3階建て延べ床面積約1万㎡。大屋根のもとに、吹き抜けの「ひろま」を設け、いろいろな体験やイベントができる大空間が用意されることになっています。来館目標は年間18万人。令和3年秋から建設工事が始まります。

さて、県美協展です。今年で24回目になりました。県美協が誕生したのは1996年(平成8年)、夢みなと博覧会の前年です。ちょうど鳥取市桂見の「県立鳥取少年自然の家」跡地に県立美術館が計画されたころです。その計画はやがて凍結されてしまいましたが、県内の美術家たちはあきらめずに、腐らずに、団結して走り続けてきました。

今年の県美協展には会員の作品71点のほかに、北東アジア美術展に出品した19点も並びました。北東アジア美術展は環日本海の地方政府サミット(日本鳥取県・韓国江原道・中国吉林省・ロシア沿海地方・モンゴル中央県が参加)に合わせて開かれているもので、県美協もいち早くこれに参加し、鳥取県の国際交流にひと役買っています。

県美協展の開会式で平井知事は、「待望の県立美術館ができます。芸術を発信するみなさんの力が、ますます必要です」とあいさつし、加藤会長のガイドで一人ひとりの作品を丁寧に見て回りました。加藤会長は「来場者や子どもたちが、いろいろ体験できる広場ができると聞いています。いまからワクワクしています。美術館に魂を入れるのは県民です。県美協はその先頭に立ちます」と、力強く話していました。



平井知事を囲んで鳥取県美術家協会のみなさん



県立美術館のイメージ図(県教委提供)

鳥取市伏野の障がい者福祉センター・厚和寮(生駒哲一寮長)で新年会があり、落語の松風亭眞笑さんとサクソ奏者の澤田勝さんがゲスト出演し、「今年もがんばろう」と盛り上げました。

厚和寮は病気や事故などで体が不自由になった人の更生、リハビリ施設。30～70歳代の約60人が宿泊、通所で利用しています。

新年会は、お神酒と刺し身とケーキで祝い、ゲストの演芸を楽しみました。ゲストはシニアバンクから2人。1人は倉吉市の脇坂幸司さん。いつもは豊田家住宅を拠点に講談と落語を演じています。芸名も2つ。講談の時は松風軒倉山、落語の時は松風亭眞笑。今回は松風亭での出番です。

演題は「桃太郎」。桃から生まれた桃太郎が鬼退治をするおとぎ話ですが、近年はインターネットなどで子どもの方が情報豊富。話して聞かせるお父さんに、いちいち子どもが突っ込みを入れ、鬼退治の真相やてん末を解説してしまう始末。昔話で子どもを寝かしつけるところか、逆にお父さんが寝込んでしまうというオチで、会場からはくすくす笑いが続いていました。利用者にとって、生の落語は新鮮だったようです。

澤田さんはお得意のテナーサクソで、NHK2020応援ソング「パプリカ」はじめ、「糸」「ブルーライトヨコハマ」「ふるさと」などを演奏。アンコールの「北国の春」のときは、みんなで手をたたき、大きな声で合唱していました。



松風亭眞笑さん



澤田勝さん



厚和寮新年会

倉吉市の小鴨シニアクラブ(北村孝雄会長)は小鴨公民館で新年会を開き、記念講演で切り絵作家の紙原四郎さんから元気の秘訣を学びました。90人余りが聴講しました。

小鴨シニアクラブは公民館に「男の喫茶店」を設けてコミュニティー活動をしているほか、地区協議会と一緒に郷土出身の偉人、近代稲作の父・中井太郎の大河ドラマ化を目指しています。

新年会はシニアバンクの登録者から講師を選び、昼食会やお楽しみ抽選会を兼ねて毎年開いており、今年は鳥取市でデザイン会社を主宰し、切り絵や水彩画、カラオケなどを楽しんでいる紙原さんを講師に招きました。演題は「好奇心こそが人生のエネルギー」です。

紙原さんは自らの体験をもとに、新聞のチラシ広告やNHKの「のど自慢」出演の秘話を紹介しました。

それによると、チラシはまとめてポイ捨てされるか、目にとめてもらえるか、寿命はせいぜい5～6秒といいます。その寿命を延ばすため、広告会社は命を削っています。A4サイズのチラシだと製作費はざっと20万円、これが10枚になると200万円。ほかに新聞折り込み料もあるので、ポイ捨てされれば、大変なお金が捨てられていることになります。情報も捨てられ、もったいない話です。身近なことに好奇心を寄せてもらえれば、年をとっても日々の暮らしが元気になると指摘しました。

「のど自慢」は三朝町で出演しました。結果は残念ながら、カネ3つでしたが、その体験をもとに「のど自慢」の見方、楽しみ方を伝えました。

紙原さんは4度目の応募で予選に出場。本番前日に250人で予選会があり、20人の出場者が決まりました。運よく選ばれたものの、それからが大変。出演者は友人、知人に「明日、のど自慢を見てね」と電話をかけまくり、夜9時ごろまでリハーサル。本番の日は朝7時半の集合です。リハーサルから音楽事務所などのスカウトが見守り、出演者はハイテンションの2日間を過ごしたそうです。生番組なので、NHKは「アナ、があかないようにと、気をもみ続けていたといいます。好奇心があれば、非日常の世界も見えてきます。

講演の後、紙原さんはカラオケで、お得意の「無縁坂」「糸」「愛燦燦」の3曲を披露し、参加者とともに「太一車」(田の草取りの歌)を合唱して、今年1年の「おう盛な好奇心」を誓い合いました。



紙原四郎さん



小鴨シニアクラブの新年会はいつも満席

2020年1月19日

「新時代！ つながる ひろがる 市民活動のチカラ」をテーマに鳥取市のイオン鳥取北店で市民活動フェスタがあり、ボランティアや趣味など、さまざまなサークルが買い物客に日ごろの活動ぶりをPRしました。

鳥取市ボランティア・市民活動センターの主催、今年で10回目です。例年は鳥取駅南のさざんか会館が会場でしたが、節目を記念して春の買い物でにぎわうショッピングセンターのモール街で開きました。およそ160の登録団体のうち、31団体がステージやブースで、それぞれの活動を紹介しました。

シニアバンクに登録するギターアンサンブル・アミーゴ▽のぼなの会▽鳥取県フォークダンス連盟▽鳥取流しびな真向会▽鳥取コミュニティシネマの5団体も参加しました。

鳥取県フォークダンス連盟(荻原恵子会長)は「大山賛歌」と「ふるさと」をダンスに創作して、10人が白とピンクの衣装で軽快に舞いました。ギターアンサンブル・アミーゴ(岸清志代表)は9人の編成で、「ピア樽ポルカ」「リズドゥンバーナへの道」など3曲を演奏。「クラシックギターを楽しみたい人は、修立公民館(山の手会館)で土曜日の夜7時から公開練習しているので、のぞいてみてください。一緒にやりましょう」と呼び掛けていました。

鳥取流しびな真向会(西村正枝代表)は健康体操のグループ。1回3分の体操で筋力を高め、心身ともに真っすぐになろうというもので、平成20年から活動を始めました。いま会員は100人余り(平均年齢70歳)。会員がステージで、いつもの基本体操を披露しました。のぼなの会(荻原元春代表)は歌と介護予防体操と子犬セラピーで福祉施設を回っています。メンバーは15人。この日は4人で訪問活動の一部を紹介しました。荻原さんのギターで「上を向いて歩こう」「河内おとこ節」などをパフォーマンスし、会場に元気を届けました。鳥取にこない映画を自主上映している鳥取コミュニティシネマ(清水増夫代表)は、映画のPRと前売り券販売に懸命でした。



のぼなの会のみなさん



鳥取県フォークダンス連盟のみなさん



鳥取流しびな真向会のみなさん



ムジークテアタ—TOTTORI

鳥取市民大学は市文化センターで郷土の歴史講座を開き、「せきをしてもひとり」などの名句を残した郷土出身の俳人・尾崎放哉について学びました。講師は放哉の会の事務局長・岡村洋次さんで、放哉の一生を紹介するとともに、市内にあふれる放哉の句碑めぐりを勧めました。

尾崎放哉(本名・秀雄)は明治18年(1885年)、邑美郡(現・鳥取市)吉方町で生まれました。鳥取中学—一高—東京帝大を経て保険会社に就職しますが、酒で失敗し、京都・一燈園、兵庫・須磨寺、福井・常高寺などを転々とした後、大正15年(1926年)に小豆島・西光寺の南郷庵で病死します。命日は4月7日、41歳でした。

放哉はお寺の堂守をするかたわら、俳句づくりに励みました。その俳句は荻原井泉水の影響を受けて、季語や形式にとらわれないもので、「足のうら洗へば白くなる」「淋しい寝る本がない」「入れものが無い両手で受ける」「肉がやせて来る太い骨である」「春の山のうしろから烟が出だした」などの名句を多く残し、種田山頭火とともに自由律俳句の双璧とされています。

放哉を顕彰する放哉の会(柴山抱海会長)は平成27年の放哉生誕130年を記念して、市内36カ所に119基の句碑を建立しました。選句したのは作家の佐高信さん、揮ごうしたのは日本や鳥取県を代表する書家のみなさん。わらべ館、鳥取城跡、鳥取駅、生家周辺などに林立しています。これらの「放哉碑林」は、元大工町にある「城下町とっとり交流館・高砂屋」を拠点に巡回できる仕組みで、市内観光の目玉になっています。

岡村さんは「まちにあふれる放哉俳句」と題して語りました。それによると、放哉の俳句づくりは中学時代から始まったそうで、その頃の俳号は「梅史」。師匠格の井泉水と出会ったのは一高時代。帝大時代は「芳哉」の俳号で「ホトギス」や「国民新聞」に盛んに投句したといえます。俳号の「芳」は恋人のいとこ・沢芳衛さんからの借用で、郷土文学の研究者・村尾草樹さんの「放哉」に詳しいといえます。

岡村さんは「放哉の句には現代人を引きつける言葉の魅力がある」と分析しています。その証拠に売れっ子作家や外国文学者などによる、放哉をテーマにした新書が次々に出版されています。岡村さんは「書道の『放哉を書く』全国公募展にとどまらず、今も句の放哉を全国発信していきたい」と訴えていました。



岡村洋次さん



ガイドする柴山抱海さん

放哉碑林めぐ



2020年1月21日

日本の美しい田園風景をつくった中井太一郎の大河ドラマ化を目指す倉吉市小鴨地区に紙人形劇団「ころころ草取り物語一座」(中尾美千代代表)ができ、小鴨公民館でお披露目がありました。市内の小学校や幼・保育園などで上演し、郷土の偉人を広く紹介することになっています。

中井太一郎(1830~1913年)は小鴨地区の出身で、明治時代に米の増産に生涯を捧げた人です。定規を使って等間隔の強い稲づくりを推奨し、除草器「太一車」を開発して、田の草取りの重労働から米づくり農家を解放しました。太一郎は全国行脚し、そんな米づくりを普及して回りました。太一郎60~70歳代のころの話です。鳥取県にゆかりある歴史大河ドラマを推進する会は、元気シニア・老農太一郎を候補のひとりにして、顕彰活動を進めています。

その顕彰活動の母体が、地元の小鴨地区振興協議会です。太一車研究委員会(北村隆雄委員長)が核になって、リーフレット・漫画・講談・ミュージカル・特産品などをつくって啓発キャンペーン中です。今度は紙人形劇団「ころころ草取り物語一座」が誕生しました。紙人形と紙芝居と音楽と歌で物語が展開し(約15分)、太一郎の功績がよく分かる仕組みです。

出演・進行しているのは中尾代表など6人。劇で使う紙人形や小道具などはメンバーの手づくりです。広谷啓一公民館長が主役級のカエルになり、ナレーターと音楽は北村仁美さん、脚本は北村委員長が担当しています。農民目線で、方言も交じり、親しみやすい内容に会場は大いに盛り上がりました。

中尾代表は「中井太一郎のことをたくさんの人にわかりやすく伝えたい一心で、手づくりで人形劇を創作しました。これからは学校や保育園などを回って、子どもや若い世代に郷土の偉人、地域の宝を伝えていきたい」と意気込んでいました。



中尾美千代さん



ころころ草取り物語一座のみなさん

鳥取県土地家屋調査士会の東部支部(田中正彦支部長)は鳥取市の鳥取法務局前の桐友ホールで研修会を開き、郷土史家の田中精夫さんから江戸時代に実測で日本地図を作った伊能忠敬の功績を聞くとともに、忠敬から測量法を学んだ鳥取藩が「因伯測量之絵図」などを仕上げ、農政改革に役立てたことを学びました。

伊能忠敬(1745～1818年)は佐原村(現・千葉県香取市)の資産家です。49歳で家督を譲り、江戸で天文学を学びました。地球の大きさに関心を寄せ、それを知るには子午線1度の距離が必要になり、算出のため、江戸から蝦夷地まで測量して歩きました。この体験をもとに全国測量に乗り出します。測量は55歳から71歳まで、10次17年間続きました。歩数はざっと4千万歩に及んだといいます。

測量は実測と方位と角度を調べ、天体観測で誤差を修正する方法で、科学的で精巧なものだったといいます。忠敬の没後、門下生たちの手で日本史上初の日本地図「大日本沿海輿地全図」が作成され、幕府に献上されましたが、その出来栄えは今日の日本地図とほとんど同じで、明治時代の半ばまで使用されたそうです。

田中さんは教員時代、忠敬の足跡をたどる日本一周イベント「伊能ウオーク」を知り、鳥取での忠敬の足跡調査にのめり込みました。「伊能忠敬測量日記」をもとに、忠敬が歩いた道や宿などを訪ね、資料を集め、20年余りかけて令和元年に「忠敬、鳥取を測る」という本を出版しました。

それによると、伊能隊は1806年秋と1813年冬の2回にわたって鳥取藩を測量したそうです。1回目は米子・境港—赤碕—橋津—青谷—鳥取—浦富の海岸ルート、2回目は米子・根雨—大山寺—倉吉・関金—三徳—鹿野—鳥取—智頭の山間地をめぐり、他藩よりも細密な藩地図を作成しています。

その過程で鳥取藩の加藤主馬や竹内利兵衛らは忠敬から測量法を学び、短期間のうちに藩内各地の詳細な測量図(田畑地続帳、因伯測量之絵図など)をつくって耕地整理や農政改革に生かしたといいます。田中さんは「忠敬の偉業に学ぶ鳥取藩の先見性と行動力には驚かされる」と、鳥取藩を高く評価しています。

「忠敬、鳥取を測る」には宿場町の配置や屋号なども書き加えられており、田中さんは「郷土史を知る教材としても使えるので、参考にしてほしい」と勧めていました。



田中精夫さん



伊能図の鳥取藩(「忠敬、鳥取を測る」から)

吟道翔風流日本吟翔会(佐藤翔風会長)は鳥取市の宇倍神社を参拝し、「賽(さいす) 宇倍神社」を奉納吟詠しました。新春奉吟60周年を記念したもので、一門の70人が高吟し、吟道の発展、振興を誓い合いました。

翔風流日本吟翔会は昭和28年の結成です。宗家は佐藤翔風さん。現在2代目です。会員230人、県東部を中心に琴浦・湯梨浜町などに支部が広がっており、鳥取湖陵高校吟詠剣詩舞部など若手の育成や荒木又右衛門の顕彰などに励んでいます。

日本吟翔会は毎年、1月2日午前10時に因幡一ノ宮・宇倍神社を参拝し、新春奉吟を続けています。今年で60年になりました。これを記念して、一門で初代宗家作の漢詩「賽 宇倍神社」を奉納することにしたものです。

「賽 宇倍神社」は景行天皇いらい5朝に仕え、日本初の大員として日本の統一に尽くした祭神・武内宿祢命をたたえる漢詩です。

宇倍祇堂坐浄晨
高吟聖訓祓氛塵
長髯三百六充歳
宿祢雄魂万世神

「天地の神にぞ祈る朝なぎの 海のごとくに波立たぬ世を」(昭和天皇の御製)。佐藤宗家会長の吟詠に続いて、一門そろって厳かに「賽 宇倍神社」を高吟しました。宇倍神社祢宜の金田祐季さんは「人の敬意によって神様のご加護をいただけます。みなさまの会が100年、200年と続きますよう祈っています」と一門の活躍、発展を祈念しました。

奉吟を前に佐藤会長はじめ、創立メンバーの清水翔鳳大師範、春菜翔桂副会長、山本清教相談役は、写真集「吟道60周年のあゆみ」をはさんで金田祢宜と歓談し、昔話に花を咲かせました。



吟道翔風流日本吟翔会のみなさん



写真集を見ながら思い出を語り合う(左端が佐藤会長)

鳥取県の理・美容店や公衆浴場などをつくる県生活衛生営業指導センター(松本正嗣理事長)は、倉吉市のセントパレス倉吉で組活活性化塾を開き、県地域史研究会の小山富見男会長から鳥取県誕生の歴史や鳥取県を舞台にした大河ドラマ推進運動について学びました。

県生衛業は理・美容、クリーニング、旅館ホテル、飲食など7つの業界からなり、およそ1000店が加盟しています。それぞれの業界のリーダーや世話役が組活活性化策を研究しており、今回は豊かな話題づくりをテーマに「鳥取県再置と鳥取県の日」を学ぶことにしました。

小山さんは「鳥取」の地名由来から説き、平安時代の「和名抄」(日本最古の百科事典)に鳥取郷が①河内国大縣郡(大阪府柏原市)②和泉国日根郡(大阪市阪南市)③越中国新川郡(富山県黒部市)④丹後国竹野郡(京都府弥栄町)⑤因幡国邑美郡(鳥取県鳥取市)⑥備前国赤坂郡(岡山県赤坂町)⑦肥後国合志郡(熊本県西合志町)―の7カ所で登場することを紹介しました。鳥取郷は鳥を捕る人たちが暮らしていたところで、白鳥や鶴を捕って朝廷に届けていたといえます。このころの鳥取は奥深くまで海が入り、久松山下や津ノ井、宇倍神社近くまで湿地が広がっていたそうです。

小山さんの調べによると、「鳥取」に関係する地名や「鳥取」姓は、全国に広がっています。このうち、岩手県新里村の「鳥取」さんは、源平の戦で敗れた平家の落ち武者がルーツで、鳥取藩主・池田家と同じ揚羽蝶が家紋だそうです。

さて、鳥取県再置と鳥取県の日(9月12日)です。鳥取藩は明治維新でいち早く新政府軍に加わり、武功を挙げたにもかかわらず、中央集権化の流れのなかで、明治9年に島根県に併合され、消滅してしまいました。32万石の鳥取藩が18万6千石の徳川親藩・松江藩に吸収されたのです。小山さんによると、当時の日本の鉄の生産量シェアは鳥取県23%、島根県49%。たたら製鉄が盛んな山陰は、日本の大工業地帯だったのです。

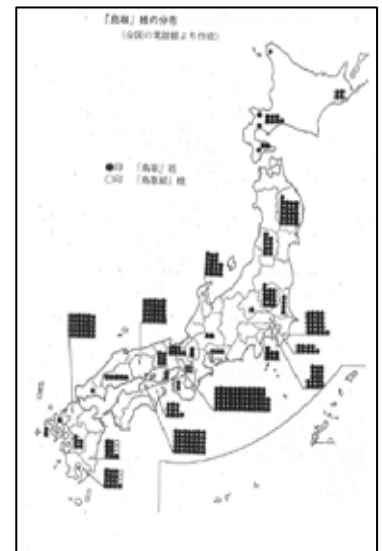
職を失い、怒ったのは鳥取藩士。鳥取は不平士族で世相不安に陥ります。ときあたかも、西南戦争を頂点に西日本各地で士族の反乱が続きました。日野郡長などを務め、島根県議会議長だった岡崎平内などが鳥取県再置に立ち上がります。鳥取県廃止を主導した東京府知事・松田道之(鳥取県出身)も今度は再置で動きました。

そして明治14年9月12日、ついに鳥取県が再置されました。倉吉市出身の大江磐代君(光格天皇の母、明治天皇の曾祖母)の陰の助力も伝えられています。

鳥取県の日にちなんで、「鳥取県を舞台に！大河ドラマを推進する会」は2017年から県民の自薦他薦で郷土の歴史や人材を発掘し、郷土愛育成に努めています。



小山富見男さんと「とっとり」姓の分布



境港市の元教育長で境港歴史研究会代表の根平雄一郎さんは、境水道そばで見つかった古い人骨(夜見ヶ浜人)の行方を追っていますが、その報告会が境公民館の社会教育講座であり、新たな展開が期待されることを示唆しました。人骨が見つければ歴史的発見に決着がつくだけに、参加者は熱心に聞き入りました。

この人骨は51年前の昭和44年、境水道に面した境港市外江の工事現場で発見されました。当時、早稲田大学の直良信夫教授(人類・古生物学)の鑑定で、2~5万年前の45歳前後の女性の左下顎骨で「夜見ヶ浜人」と名付けられました。新聞には歴史的発見として大きく報道されましたが、学界からは、その時代の人骨が現存することはありえないと冷たくあしらわれたそうです。

そもそも人類の始まりはおおよそ600万年前にさかのぼり、250万年前から石器が使われるようになったといえます。以後、1万6千年前までを旧石器時代と呼びますが、日本列島ではその時代の有機質(生物の骨格)の遺物は腐食してほとんど残っていないこともあり、学界では夜見ヶ浜人の存在を受け入れられなかったようです。

そこで根平さんは8年前、「この人骨が本当に旧石器時代のものであれば…」とロマンをかきたてられ、年代測定調査などを思い立ちました。しかし、肝心の人骨が行方不明です。

問題の人骨は直良教授の退官後、早稲田大学に寄贈され、直良コレクションとして保管された後、再鑑定のため東京大学に渡り、さらに直良教授の死後、早稲田大学に返還されたことが判明しました。そこで早稲田大学に人骨の探索を依頼していますが、これまでのところ見つかっていないといえます。幻の状態です。

講演で根平さんは8年間の経過を報告しましたが、そのなかで近々、直良教授と関わりの深かった人物と接触できそうであることを明かしました。「直良教授の学説を否定する人はみな実物を見ていない。ぜひとも実物を手にし、再調査して直良説を立証したい。引き続き、夜見ヶ浜人を追っていきます」と力強く宣言していました。



根平雄一郎さん



夜見ヶ浜人の発見を伝える新聞記事(島根新聞)

岩美町の東地区公民館で人権講演会があり、心と体の健康づくりを進めている「のぼなの会」(荻原元春代表)が、話と歌と体操で「生かされている人生をよりよく生きましょう」と呼びかけました。およそ50人が参加しました。

荻原さんが「高齢者の人権」について話しました。認知症の父親との生活体験談です。一時、行方不明になって父親の病気を知り、長くデイサービスや介護施設に入り、いま病院で集中治療中とのことで、たくさんの人のお世話になってきたといいます。そんな家族の頼りになるのは仲間や地域。支えあいの社会を大切にしましょうと訴えました。

荻原さんによると、全国の認知症患者は400万人、5年後には750万人。パソコンの普及などで若年性が増えており、7人に1人の割合に広がると予測されています。ちなみに鳥取県は人口や年齢構成などで3人に1人という見方もあるそうです。

会場が少し沈んだところで、荻原さんのギターとハーモニカで歌が入ります。「上を向いて歩こう」「なごり雪」など。手拍子が入り、会場は次第に盛り上がります。

引き続いて、のぼなの会の介護予防運動アドバイザーの西田清美さんが、寝起きにできる朝の健康体操を実演、紹介しました。「ヒトの体の70%は水でできています。のどが渇く前にどんどん飲みましょう」「すぐ起き出すと血圧が上がります。ベッドの上で5分間くらい手足を伸ばして、血液を心臓に戻してやりましょう」「毎朝、できることから続けましょう。筋肉貯金が大事です」などとアドバイス。参加者はイスの上で簡単にできる体操が気持ちよさそうでした。

東地区自治会の中島睦郎会長は「自ら健康になれば、家族も地域も明るくなる。健康体操の習慣をつけ、カラオケも楽しみましょう」と、参加者に呼びかけていました。



荻原元春さん



西田清美さん



寝起きに軽く健康体操

郷土の民俗芸能の保存・継承を考えるフォーラム「若者と民俗芸能」が米子市の山陰歴史館であり、元日野産業高校で郷土芸能部を立ち上げ、荒神神楽を盛り上げた小谷博徳さん(日野町議会議長)が体験談を語りました。

フォーラムは平成21年から開かれており、今回は若者をテーマに事例報告やグループ討論会がありました。淀江さんこ節保存会、関金田植え唄おどり伝承保存会、多里かしらうち保存会など11団体が集まりました。

小谷さんは日野産業高校の教員時代の取り組みを報告しました。その内容は、自身の著書「世の中逆さがおもしろい」にまとめられていますが、地元につながる荒神神楽を継承していくため、その担い手として部活をしていない生徒の活用を思い立ちます。とくに不登校など課題を抱える生徒たちを集め、郷土芸能部を立ち上げました。同じ境遇の生徒同士の勧誘で部員は増え、地元神楽団の指導もあり、全国大会の常連校になります。

各地で公演の機会が増えてくると、生徒は観客に感動を与えるだけでなく、観衆から感動をもらうといった「感動のキャッチボール」を実体験します。生徒たちは活動を続けることで地域に愛着がわいてきたようで、小谷さんは「今では卒業生が地元神楽団を支えるまでになっています」と報告しました。

この体験談をもとに、参加者は民俗芸能の魅力を改めて振り返り、その魅力をどう若者に伝え、継承につなげていくかグループで話し合いました。SNS(会員制交流サイト)などでの情報発信はもちろん、体験も必要などさまざまな意見が飛び交いました。小谷さんは「子どもの頃の体験が重要。教育現場と連携しながら、小さいころから民俗芸能を体験したり、その歴史を学んだりするなど、親しむ機会を多く作ることで郷土芸能は継承されていくのではないのでしょうか」とアドバイスしました。



小谷博徳さん



日野高校の荒神神楽「八重垣能」
(日野振興センターホームページから)

2020年2月23日

鳥取地域史研究会(小山富見男会長)の総会が鳥取市の県立博物館であり、県体協名誉会長の油野利博さん(鳥取大学名誉教授)が鳥取の相撲の歴史やゆかりの力士について記念講演しました。

油野さんは大学時代、箱根駅伝などに出場した長距離ランナー。鳥取大で教壇に立つかわら、鳥取市陸上競技協会会長などを務めてきた陸上競技の専門家です。収集家でもあり、陸上競技の書籍にとどまらず、出身の石川県が相撲の盛んな土地柄とあって、力士の錦絵も集め、鳥取県の相撲研究を続けています。

鳥取県も相撲の盛んなところですが、鳥取市には相撲の歴史をつくったとされる野見宿祢をまつる大野見宿祢命神社があり、江戸時代には歴代藩主が力士を積極的に取り立てました。お抱え力士たちは鳥取藩の角輪紋(◇○)を化粧まわしにつけて相撲を取り、鳥取藩の勢いを大いにPRしました。

鳥取藩と同様に多くの藩が、お抱え力士の獲得に熱心だったといえます。主な力士では仙台藩伊達家の谷風梶之助、出雲藩松平家の雷電為右工門、久留米藩有馬家の小野川喜三郎などが活躍しました。

油野さんは日本相撲協会や郷土史などの資料をもとに、鳥取藩で活躍した2人の棧シ(かけはし)初五郎▽4人の荒岩亀之助▽8人の真鶴政吉▽2人の真力鉄蔵—について、それぞれの本名や出身地などを調べ、力士年表にまとめました。力士は出世に連れてしこ名を変えるため、追跡しやすくするために年表にしたそうです。なかなかの労作です。

それによると、2代目棧シ初五郎(久米郡曲村)は4代目佐渡ヶ嶽、初代真鶴政吉(日野郡二部村)は3代目朝日山を継ぎ、初代荒岩亀之助(会見郡安曇村)などとともに寛政時代(1789~1801年)の土俵を沸かせたといえます。

余談ながら、寛政時代の鳥取藩主は池田治道。治道の娘たちが雄藩に次々と嫁いだ頃です。長女の三津姫は長州藩主・毛利斉熙、二女幸姫は佐賀藩主・鍋島斉直、4女弥姫は鹿児島藩主・島津斉興にそれぞれ嫁ぎ、幸姫は直正、弥姫は斉彬の明治維新の立役者を生み、育てたのは有名な話です。土俵での藩政PRがネットワークづくりに奏功したのかもしれませんが。

明治時代以降では勝山芳蔵(鳥取市湖山)が初代尾車文五郎を名乗り、昭和になって横綱琴桜傑将(倉吉市)が12代目佐渡ヶ嶽を継ぎました。



油野利博さん



棧シ初五郎の錦絵



大野見宿祢命神社(鳥取市徳尾)

2020年3月6日

鳥取市西地区(旧青谷・気高・鹿野町)の交流拠点、鹿野往来交流館「童里夢」(長尾裕昭館長)は開館10年を記念して「伊能忠敬の足跡と古道」展を開いています。古地図コレクターの上田勝俊さん(鳥取市)が協力し、歴史ファンでにぎわっています。3月20日まで。

伊能忠敬(1745～1818年)は日本全国を歩き、日本地図を作った江戸時代の人です。その「伊能図」(大日本沿海輿地全図)は、いまの日本地図とほとんど変わらず正確で、明治時代半ばまで使われました。

伊能隊の全国測量は、1800年の蝦夷地測量を皮切りに、10次17年間にわたって続きました。測量は歩いて実測し、方位と角度を調べ、天体観測で誤差を修正するやり方で、その歩数はおよそ4千万歩、地球一周ほどの距離になったそうです。

鳥取藩には2回訪れました。1806年に米子・境港—由良—橋津—鳥取—浦富—浜坂の海沿い、1813年に米子・大山—倉吉—三徳山—鳥取—智頭—津山の山間地を測量しました。測量日記によると、西因幡では青谷、芦崎、長尾鼻、浜村、鹿野などを歩き、芦崎では米屋伝兵衛宅、鹿野では草庭恵助宅に宿泊し、それぞれ天体観測もしています。商業が盛んだった鹿野では2泊しました。

さて、「伊能忠敬の足跡と古道」展は、伊能忠敬研究会員でもある上田さんが集めた古地図や天球図、肖像画など、およそ50点が並びました。目を引いたのは、上田家に代々伝わる未完成の古星図です。初代天文方・渋川春海が作成した「天文成象図」の複写途中のもので、上田さんは「上方往来・河原宿の測量を本家にあたる宗旨庄屋の上田半兵衛が世話をしており、伊能隊の置き土産だったのではないかとみています。上田さんの伊能研究のきっかけになったものといえます。

三徳山—鹿野の古道もパネルで紹介しています。俵原(たわら)から滑石峠を下って、茂宇気神社近くに出てくる約4kmの古道で、往時は鳥取城下などからの三徳山詣でに利用されていたそうです。鹿野・旧河内村には警固屋という地名が伝わるなど、因幡・伯耆の国境の出入り口だったことを物語っています。この古道は佐谷峠を通る県道鳥取鹿野倉吉線の北側にあります。鹿野往来交流館の土橋達也さんは「古道は急坂の連続で険しい獣道ですが、定期的に草刈りなどをして整備したいものです」と話していました。



上田勝俊さん



鹿野・三朝古道のルート

鳥取市のわらべ館でパズル&ゲーム作家・米澤章夫さんの作品を集めた「脳トレクラブ」が開かれています。新型コロナウイルス騒動で体験教室は取りやめになったものの、米澤さんの個別指導でゲームなどに挑戦でき、子どもたちが訪れています。観覧無料。3月29日まで。

米澤さんは尼崎市で学習塾を経営した後、鳥取市にUターンしました。趣味はパズルやゲームづくり。米澤さんは「パズルやゲームは知的好奇心を刺激し、考える力を養うので、小学生の地頭力を鍛え、高齢者の認知症予防にも役立つはず」と、平成29年に脳トレクラブを立ち上げ、パズルやゲームの開発、普及に乗り出しました。

米澤さんはクロスワードやナンプラ、暗号表などをヒントに多種多様なパズルを編み出すとともに、一つの盤面でいろいろなゲームが楽しめるボードゲームも開発。令和元年秋にパズル書3冊(脳トレパズル&ゲーム・脳が甦るパズル・本格パズル)を出版し、ゲーム「同色ゲームの世界」を商品化しました。パズルは小学3年生から高齢者まで、初心者用から上級者用まで600問余り収録しています。ボードゲームも1人～4人で楽しめるよう、11種類のゲームを用意しました。

パズルやゲームは、かつて「暇つぶしの道具」と言われてきました。それが今では論理的思考やコミュニケーション能力を高めるツールとして再認識されるようになっていきます。

米澤さんは「テレビゲームは反射神経を養うものの、ゲーム中毒をつくってしまいます。アナログゲームは多面的に、じっくり考えなければならないので、子どもにもお年寄りにも、会話が生まれ、脳の活性化にも大いに役立ちます」と、アナログゲームのススメを説いていました。

脳トレクラブの展示会場には、米澤さんが出版したパズル集のほか、数々の例題が展示され、ボードゲームも体験できるようになっており、春休み中の大学生や家族連れが次々と立ち寄って、挑戦していました。米澤さんは「公民館などの高齢者教室でパズル&ゲームを普及し、地域活性化のお役に立ちたい」と張り切っています。



ゲームを説明する米澤章夫さん



鳥取洋画家協会(中尾廣太郎会長)の第4回協会展が鳥取市のとりぎん文化会館であり、美術愛好家など多くの方が訪れました。

鳥取洋画家協会は平成28年に若手養成などを目的に65人の会員で発足し、毎年1回、会員の展覧会を開いています。

今回の展覧会では、中尾会長の「ヤコブの梯子」、坂尾哲夫さんの「鳥取駅北口広場にて」、大塩忠雄さんの「雪の大山北壁」、八木俊實さんの「港の情景」、森田しのぶさんの「生命の階層(0203)」など、会員40人の風景画、人物画、抽象画など多彩な力作が展示され、感動的な空間をつくっていました。

中尾会長は今後の鳥取洋画家協会の目指す方向について、「鳥取県東部だけでなく、兵庫県但馬地方など周辺の地域と一緒にになった取り組みや令和6年に開館予定の鳥取県立美術館の応援などもしていきたい」と話していました。



鳥取洋画家協会のみなさん

第4回鳥取洋画家協会展



倉吉市の鳥取短期大学で新入生を対象にした「現代鳥取学」講座があり、鳥取県社会福祉協議会長の藤井喜臣さんが「鳥取県の課題と目指してほしいもの」について話しました。およそ100人が聴講しました。

鳥取短大にはこの春、290人が入学しました。「現代鳥取学」講座は毎年、新入生を対象に実施しており、今年は「鳥取の歴史と現在」「鳥取農業の現状と課題」といった講義がありました。

藤井さんは元鳥取県職員で教育長・副知事などを歴任されました。講義は〇×で答える「鳥取県クイズ」の問答形式で始まり、鳥取県の人口、鳥取県のイメージ、鳥取県の特産品などの問題が15問出題されました。

「鳥取県の人口は57万人台である」（正解は約55万3000人）、「県外の人に聞きました。鳥取県を色で表現すると、最も多かったのはグリーン」（正解は鳥取砂丘を連想してブラウン）—という具合で、楽しみながら学べる講座となりました。

このなかで、藤井さんは鳥取県の課題として人口減少を紹介しました。県政は県内への移住定住策や子育て支援策などに積極的に取り組んでいるものの、若い世代の都市部への人口流出が止まりません。「鳥取県はとても良いところ。このまま県内にいてもらえたらありがたいが、もし一度県外に出られたとしても、ぜひ帰ってきてほしい」と、鳥取県のPRとともに、お願いも忘れませんでした。

また、「鳥取県内ではコンビニや全国チェーン店が拡大しているが、地元のお店を大切にしましょう」「地域や家族のつながりが希薄化しています。一度自分の周りについて考えてみてください」などと呼びかけました。

講義は大教室であり、全員マスク姿のうえに、距離をとって着席し、アルコール消毒や換気も怠りなく、新型コロナウイルス感染防止対策を徹底して行われました。藤井さんは「コロナウイルス問題が落ち着いたら、鳥取県内のいろいろなところに足を運び、鳥取県の魅力を楽しみ、感じ、学んでほしい」と締めくくり、鳥取県観光連盟発行の「トリパス」を紹介しました。



藤井喜臣さん



講義中の様子

鳥取県社会福祉協議会の情報誌などを編集している人たちの研修会が鳥取市の福祉人材研修センターであり、とっとりいきいきシニアバンク「生涯現役」アドバイザーの勝原公一さんから「記事の書き方、取材の仕方」を学びました。

勝原さんは鳥取県の地元紙・日本海新聞の元記者(元西部本社代表)です。県内各地や大阪・東京などで記者活動をし、長く1面コラム「海潮音」などを担当しました。退職後は鳥取県産業振興機構で農商工連携や6次産業化の普及に努め、いまは鳥取県社会福祉協議会の「生涯現役」事業で活躍中です。

県社協の情報誌は、毎月発行の「県社協ニュース」はじめ、季刊誌の「志あわせへ」「HOT eye (ホットアイ)」などがあり、ボランティア・レポーターも多くいらっしゃいます。今回の研修会には鳥取市の清水はるみさんと竹本万寿子さんも参加されました。

勝原さんは多彩な人生経験や新型コロナウイルス禍など最新の社会問題も交えて、わかりやすく話題提供され、小椋佳さんのヒット曲「愛燦燦」もアカペラで披露されるなど楽しい研修が続きました。以下は、その話のあらましです。

話すこと、聞くこと好きですか。それができれば、だれでもレポーターになれます。ヒトが好きなら、なおよしです。しかし、ヒトは残念ながら生老病死、四苦八苦の人生です。世直して知られる高杉晋作は「面白きことのなき世を面白く、すみなすものは心なりけり」という辞世の句を残しました。どう生きるかは心がけ次第です。お天道さまはだれにも等しく当たります。そして、だれもが多くのヒトに生かされています。歌のように「ヒトは、うれしいもの」に違いありません。

♪愛燦燦とこの身に降って 心ひそかなうれし涙を流したりして ヒトはかわいい かわいいものですね ああ過去たちは優しくまつ毛に憩う 人生って不思議なものですね ああ未来たちはヒト待ち顔して微笑む 人生ってうれしいものですね♪

レポートするときは、少しでもよいから、そのヒトの人生に触れてください。その「うれしい世界」を学びたいものです。そのためには事前取材が欠かせません。予習です。そうすると7割方、記事の構想が決まります。お会いすると、必ず驚きや発見があります。伝えたい見出しが決まると、もう記事は仕上がったようなものです。見出しが決まらなければ、いつまでたっても記事は書けません。見出しを考えながら、メモを取りましょう。時間があれば、その記事をひと晩寝かせてみてください。読み直すうちに考えが熟成して、一層よい記事になります。

たくさんさんのヒトにあって、いろいろ学びましょう。



勝原公一さん



鳥取県社会福祉協議会の情報誌

新型コロナウイルスの感染拡大防止で外出自粛が続いていますが、倉吉市の「とっとりいきいきシニアバンク」の登録団体は「巣ごもり」による心や体へのダメージを防ぐため、はがき出し運動に取り組み、市内外から「コロナに負けるな」と大きな反響を呼んでいます。

小鴨シニアクラブ協議会（北村隆雄会長、180人）で、会員は4月下旬から「コロナに負けるな！はがき1枚運動」と印刷されたはがきを1人1枚、健康などの近況報告やふるさと・倉吉の様子などを添えて、ポストに入れていきます。宛先は、それぞれの知人や友人、遠く離れた家族や孫など。63円はがきに7円切手を貼れば、一部を除いて全世界に届けられるとあって、なかにはアメリカやフィリピンなどに送る人も。

この「はがき出し運動」がきっかけになって、市内の子ども園や若人などの間で、自画像やキャラクター、絵手紙などを加えて、「コロナに負けるな」という励ましのはがきづくりが盛んになっています。鳥取市内の老人クラブのなかには、会報で「はがき出し運動」の取り組みを紹介し、参加を呼びかけるところも出てきました。

「はがき出し運動」を思いついた北村会長は、「スマホやメールの時代にあって、我々ははがきがあることを忘れていました。だれに出すか、どう書くか、心と頭を使うことになります。マスクをしてはがきをポストに入れに行くことで、運動にもなります。そして何より、人と人がつながります」

返信が戻りつつあります。「はがき出し運動、感激しました。大賛成です。大いに広げましょう」「人類の歴史に残る時代に生を受けましたが、たくさんの方々に支えられて生きていることを感謝します」「うれしい企画ありがとうございます。コロナ退散、バイバイ祈願。また逢う日まで、お元気で」など。これらの便りは、小鴨公民館に展示し、多くの人に見てもらうことにしています。



はがきをポストに投函する小鴨シニアクラブ協議会のみなさん



倉吉市民が作成したはがき



こども学園のみなさんが作成したはがき

新型コロナウイルスの影響で、観光ガイドのみなさんは長く休業を強いられていますが、米子城やその城下町などを案内している米子観光まちづくり公社(川越博行理事長)は拠点の案内所でマスクや弁当、野菜などの販売で大忙しです。その土曜朝市をのぞきました。

案内所は「米子まちなか観光案内所」(灘町1丁目)。米子港の近く、加茂川・京橋をはさんで内町後藤家のすぐそばにあります。築約250年の古民家を利用して2018年4月にオープンしました。

案内所前の道路は初代米子城主・吉川広家時代の登城路です。米子が鉄道の町になるまでは、周辺一帯は海運で栄え、商家や海鮮問屋などが建ち並ぶ米子きっての繁華街(西本町商店街)でした。近くには9カ寺が並ぶ寺町もあり、城下町探訪でははずせないエリアです。

ただ、案内所があるところは、古い町ゆえにスーパーやレストランなどが少なく、住民の高齢化は進み、独り暮らしのお年寄りが増えています。そんなわけで、案内所には観光商品にとどまらず、住民が求める品ぞろえが欠かせません。布製マスクや疫病退散の「あまびえマスク」なども並んでいます。土・日曜日は近郊の農家がつくった有機野菜の朝市が立ち、テイクアウトの弁当も売られています。

ところで、肝心の観光ガイドはどうなるのでしょうか。川越理事長によると6月27日の米子城・城下町めぐり(鳥取県社会福祉協議会共催)がキックオフ・イベントになる予定です。令和2年度のガイド目標人数は「皆目見当がつかない」そうですが、小グループ向けのディープなガイドに挑戦するといいます。城山での星空観察やコンサート、未公開茶室での茶会など。新商品を開発中です。

米子観光まちづくり公社の今年のテーマは、米子市の人口増、そのための移住定住の促進です。「そのヒントは町づくりの歴史にある」と川越理事長は言います。米子の城下町をつくった米子藩家老の横田内膳は、倉吉や日野、法勝寺などから商人、職人などを集め、身元保障をするお寺も引っ越しをさせて城下町をつくりました。なかには旧尼子の残党などもいたことでしょう。出雲地方には「逃ぎよや逃ぎよやと米子に逃げて、逃げた米子で花が咲く」という俗言も残っています。「米子の城下町には、再利用できる古民家が多く残っています。これにお寺さんや永代供養などをセットにして紹介、あっせんすれば、現代の米子人が誕生することでしょう」と、川越理事長は訴えます。



川越博行さん



観光案内所の朝市



米子まちなか観光案内所

2020年5月20日

鳥取市の高齢者大学「尚徳大学」は、新型コロナウイルスのため開講できずにいましたが、DVD（ビデオディスク）による家庭学習に切り替え、6月からDVDの貸し出しを始めます。その第1作ができました。市民だれもが聴講できる市民大学も、6月からCATV放送でスタートする予定です。

尚徳大学は昭和48年に高齢者教室としてスタートしたのが始まりです。今年で47年になります。休むことなく開講し、シニアの生きがいづくりと学習意欲にこたえてきました。入学できるのは60歳以上の市民。年間受講料は1,500円。今年も530人ほどが登録しました。

学習プログラムは合同学習のほか、社会▽健康▽郷土—など4コース、合わせて52回の講義が予定されていましたが、コロナ禍で4月の開講式ができず、休講状態が続いていました。そこで今年は受講料を無料にし、講師の協力で12講座に減らし、それぞれDVDに収録して、家庭学習をしてもらうことにしました。

このほど、その1作目が仕上がりました。庭園文化研究家・青木清輝さんの「鳥取県の庭園の魅力語る」です（30分）。青木さんは曹洞宗の清元院（琴浦町）と龍徳寺（湯梨浜町）の庭園を題材に、庭巡りの楽しみ方を紹介しました。

それによると、清元院の庭にある長方形の方池は、古代インドがルーツで古いものです。その直線が曲線になって日本庭園の歴史が始まったといえます。水がわく池や泉などは地下と地上の神が出会うところで、神仙思想に基づく蓬莱式庭園づくりに欠かせないものだそうで、龍徳寺の庭が蓬莱式庭園の姿をよく表しているといえます。

青木さんは「日本庭園には蓬莱式はじめ、枯山水や茶庭の3つの形態があります。それぞれの意味を理解すれば、庭園散策がより楽しくなります」と庭巡りを勧めていました。

なお、市民大学は6月20日（土）の「元気に100まで暮らすための運動と食事」（鳥取大医学部講師・澤晶子さん）を皮切りに、5講座をCATV「ぴよんぴよんネット」で放送する予定です。

DVDの貸し出し、お問い合わせは市文化センターへ（☎0857-27-5181）。



青木清輝さん



清元院の方池



龍徳寺の蓬莱式庭園

23歳の若さで亡くなり、幻の歌人と言われた八頭町出身の杉原一司。没後70年の今年、待望の歌集が発行され、全国の短歌愛好者で、その歌づくりの研究が始まりました。5月21日の命日には関係者が墓参し、杉原一司研究の進め方などを語り合いました。

杉原一司(1926～1950年)は旧丹比村南(八頭町)の生まれです。地元の小学校で教員をするかたわら、モダニズム歌人の前川佐美雄(日本芸術院会員)に短歌を学びます。その縁で、前衛短歌の旗手・塚本邦雄らと同人誌「メード」を創刊します。杉原の早世で7号で廃刊になってしまいましたが、現代短歌の端緒になる歌集だったといわれています。

盟友・杉原と塚本は、杉原が歌づくりの手法を示し、塚本が作品にしていく役割だったそうで、杉原は定型にとらわれることなく、句割れや句またがり、カタカナなどを多用したといえます。杉原の死後、塚本は自らの第1歌集「水葬物語」を杉原への追悼歌集として発表していますが、「私の作品のバックボーンを作り上げてくれたのは彼である」と、盟友をたたえています。杉原が幻の歌人と言われたゆえんです。

今年ちょうど、杉原没後70年、塚本生誕100年。記念の年です。杉原の長男・ほさきさんはじめ、いとこの安藤隆一さん(元県立公文書館長)、郷土史家の内田康彦さん(元県国際交流センター常務)、鳥取大学地域学部准教授の岡村知子さんらが、歌誌や資料を集め、杉原一司歌集をつくりました。収録した短歌は108首、妻玲子さんの短歌も36首。これらの資料は県立図書館で6月16日まで展示されています。出版記念フォーラムも予定されていましたが、新型コロナウイルスで中止になりました。

高校教師の小林貴文さん(青谷町)は、月刊歌誌「みずたまり」に2年半にわたって杉原一司の歌評を発表してきました。フォーラムがなくなり、その報告ができないのは残念ですが、「杉原は未完ながら、歌は若々しく、熱い言葉がほとばしっており、とても魅力的」といいます。歌集の発行を機に、全国の若手歌人のなかで杉原の歌を再評価する動きが広がっているそうです。

「塔」の選者で県歌人会顧問の池本一郎さんは「鳥取県に日本の歌壇史に残る人材がいたことを誇りたい。残念ながら、知る人ぞ知るの存在になってしまい、研究が進まず、後が続かなかったが、今回の歌集発行と再評価を通じて、歌づくりに親しむ人をもっと増やしていきたい」と話していました。歌集刊行会は杉原と塚本の間で膨大な書簡のやり取りがあったことを受け、今後は現代短歌の黎明期を探りたいとしています。



在りし日の杉原一司



杉原一司歌集

新型コロナウイルスからの感染予防で、外出自粛の暮らし方が求められていますが、福祉レクネットワーク鳥取代表の玉木純一さん(北栄町)は脳トレパズルをつくり、「パズルで「巣ごもり」、コロナに負けるな」とプレゼントしています。

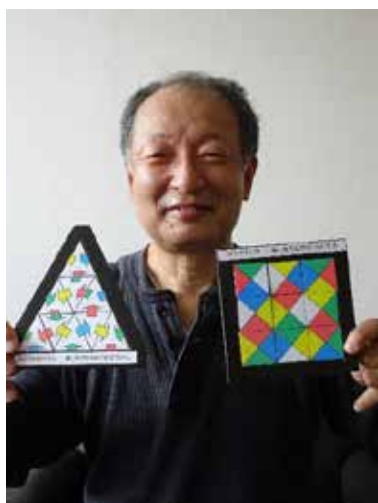
玉木さんは元高校教師、県レクリエーション協会の副会長です。毎年、県内の保育士、介護士、公民館職員などにレクリエーションやコミュニケーションの大切さを伝え、老人クラブなどでは早口言葉や歌などで認知症予防を指導しています。その講演回数は県内外合わせて年間150回にもなるといいます。

それが今年の春はコロナ禍ですべてキャンセル。正枝夫人のマスクづくりのそばで、本などを参考にパズルづくりに励みました。百均ショップで求めた材料を使って、「色並べ」「矢印合わせ」「ダイヤモンド」など5種類のパズルをたくさんつくりました。いずれも年代を問わず楽しめ、数日挑戦してもできないとあって、「家族ぐるみで夢中になれる」と評判です。

玉木さんによると、これらのパズルは講演再開に備えてつくったものだそうで、「コロナで「巣ごもり」を強いられるお年寄りに役立つなら」と、日本海新聞読者にプレゼントすることにしました。

倉吉市の日本海新聞中部本社で先着順で配布しましたが、市内のお年寄りや三朝町の高齢者施設などが次々に訪れ、即日「完配」しました。

玉木さんは「外出を控え、家にいる時間が多く、長くなりますが、パズルで集中力や記憶力を高め、足踏み運動や新聞を声を出して読んだりすれば、認知症予防になるので、がんばりましょう」と、「巣ごもり」生活にエールを送っていました。



玉木純一さん



「コロナに負けるな」と、パズルを手渡す玉木さん(右)



玉木さん手づくりのパズル

2020年5月23日

鳥取市のアマチュア天文家の2人が河原町の山の中に天体観測所を設けました。この日夜には、観測所周辺の住民を招いて星空観望会があり、春の終わりの天空ショーを楽しみました。「星取県」にまた一つ、新しい拠点が誕生しました。

2人は山陰モバイルプラネタリウム代表の多賀利寛さん(元鳥取天文協会会長)と鳥取環境大特任教授の足利裕人さんです。

観測所は山を隔ててさじアストロパークの西隣、鳥取自動車道の用瀬ICから車で約4分のところ、河原町小倉の畑地にできました。1.8m四方の観測ドームと屋根がスライドで動く観測室(7.2㎡)を設けています。名づけて「小倉天体物理観測所」。主に天体の写真撮影などを行います。

多賀さんは東亜天文学会員で鳥取星の会会長。長年の天体観測の功績が認められて、火星と木星の間にある小惑星(18524)が「Tagatoshihiro」と名づけられています。星に個人名がつくのは世界でも珍しく、名実ともに県内天文家の第1人者です。

足利さんは高校教師(物理)を経て、鳥取環境大で理科コースを教え、天文部を指導しています。星の寿命や光の成分を調べるため、多賀さんと共同研究することにしました。

星空観望会には20人ほどの親子が集まり、西の空の宵の明星・金星ウオッチからスタートしました。多賀さんは「昔の人は金星も地球も太陽の周りを回っていることを知らないの、西に出てくる宵の明星と東の明けの明星は別々の星と思っていました」と説明。参加者は三日月状態で見える宵の明星を望遠鏡で確認して歓声をあげていました。

夜8時を過ぎると、満天に星が広がり、北斗七星や春の大三角がくっきり。星座の物語紹介が始まりました。星座は中近東の羊飼いが名づけ、ギリシャ、ローマ、大航海時代を経て88に膨らんだといいます。東の空から青白い織姫星が上がると、足利先生は「赤い星は温度が低くて寿命が短く、青い星は温度が高くて若い星です」と解説していました。

県庁がある鳥取市街地でも、真夜中になれば、天の川が見える環境です。まさに「星取県」。多賀さんは「星取県づくりは星空をガイドできる人づくりに尽きる」と話していました。



多賀利寛さん(右)と足利裕人さん



鳥取市の住宅街で見られる天の川(桜ヶ丘中学校周辺、足利裕人さん撮影)



「あの星かな?」。天文台周辺のみなさんの星空観望会

2020年6月6日

境港市の自然農法園・さかい夢の浜(渡部敏樹代表)はヤングドリーム実習農場を設け、農薬や化学肥料に頼らない自然農法に親しむ人づくりを始めました。海や陸の豊かさを守る運動にも発展させたいとしており、国連提唱のSDGs(持続可能な開発目標)の取り組みとして、その成果が注目されます。

渡部さんは中海の再生を目指すNPO法人でカリウムやミネラル豊富な海藻の肥料化を進めてきました。その実験農場が自作の畑(20㍍)です。25年前から街路樹の葉っぱ、乾燥させた海藻、乳酸発酵させた米ぬか、EM菌(有用微生物群)を使って堆肥づくりやフカフカの土づくりをし、少量多品種の野菜づくりに励んでいます。

果物づくりも多彩で、ミカン、桃、キウイフルーツ、ブルーベリー、柿のほかに、ビニールハウスではパイナップル、マンゴー、ドラゴンフルーツ、モンキーバナナなど。どれもこれも市販のものより糖度は高く、実験農場を訪れる人を感動させています。

さかい夢の浜は市内2カ所に畑を借り(30㍍)、会員48人が家庭菜園づくりを楽しんでいます。栽培指導しているのが渡部さんです。渡部さんはこの春、NPO法人の副理事長を退任したのを機に、「自然農法を基礎から学びたい」という声にこたえて、さかい夢の浜の一角にヤングドリーム実習農場をつくりました。初年度は4世帯12人の親子が参加し、スイカやカボチャ、マクワウリの苗15本を植えました。8月にはソバをまきます。

渡部さんによると、活着すれば、あとは自然の成り行き任せ。「気かけるものの、手をかけない」そうです。農薬や肥料がなくても、毎年決まって出てくる山菜に学べというわけです。畑の生き物にはすべて意味があるとも言います。例えば、アブラムシが寄ってくるのは土中にチツソが多いからで、アブラムシの粘液に菌がついて食物を枯らします。雑草もむやみに引っっこ抜けば、善玉の微生物まで畑から奪ってしまいます。畑の雑草は燃やさないで、畑にすき込んで返すのが原則だそうです。ヤングドリーム実習農場では、虫がそこにいる意味や雑草の役割なども考えることにしています。

さかい夢の浜の畑は、幅2mほどの雑草で囲われています。周りの田畑からの農薬の侵入を防ぐためです。そのグリーンベルトのなかでは、いろんな生き物が暮らし、生存競争を繰り広げていますが、フカフカの農地は健全です。虫たちに荒らされないわけも学びます。



「境港産のパイナップルです」と
渡部敏樹さん



ヤングドリーム実習農場に集まった
みなさん



苗を植えたら、稲わらで囲って

2020年6月6日

太平洋戦争から75年、山陰最大の戦災・境港の玉栄丸爆発事件が本になりました。書いたのは境港歴史研究会代表の根平雄一郎さん。新型コロナウイルス旋風が吹き荒れるなか、出版の資金集めに苦労しましたが、「戦争の恐ろしさを後世に伝え、平和の大切さを広めたい」という思いが通じました。

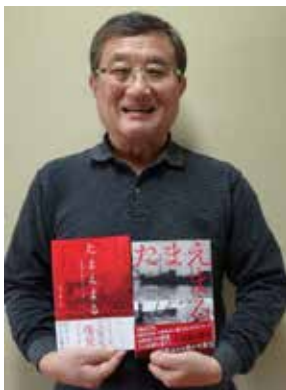
玉栄丸は陸軍の徴用船です。太平洋戦争末期の1945年(昭和20年)4月23日、境町の大正町岸壁で荷揚げ作業中、積んでいた火薬が4度にわたって爆発し、その爆風と火災で120人が死亡、309人が重軽傷を負い、倒壊焼失家屋は431戸、町の3分の1が消滅しました。現場はJR境港駅や水木しげるロード一帯です。

根平さんは40年ほど前、中学教員時代に「鳥取県の戦災を記録する会」に参加し、この爆発事件を調べ、被災者などの証言を集めて回りました。その成果は「玉栄丸追悼50周年誌」(境港市、1995年)などに生かされましたが、その後もいくつかの謎を追い続けました。そして、①爆発原因は兵隊のたばこの火だった②徴用朝鮮人船員もいたので、死者数は120人を上回る③爆発前の玉栄丸の船体写真発見—など新たな事実が分かったことで、75年目の真実として出版することにしました。

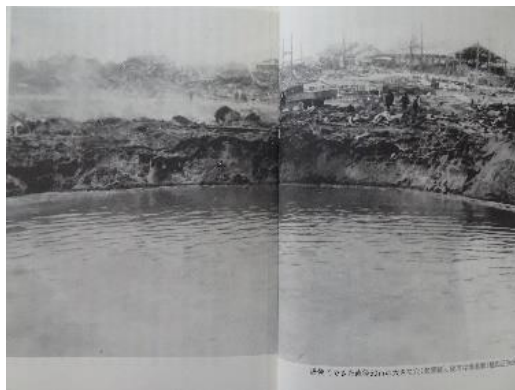
その出版資金(80万円)は告知PRを兼ねてクラウドファンディングで募ることにし、インターネットなどで支援を呼びかけてきました。各地で講演実績がある“売れっ子講師”の根平さんにとって、資金集めは自信があったものの、コロナ禍で講演会はすべてキャンセルになってしまい、頼みの水木ロード商店街も休業状態とあって、期限切れ間近になっても目標金額の半分も集まらず、根平さんは「自費出版を覚悟した」そうです。

“潮目”が変わったのが、爆発事件の消火活動中に亡くなった遺族の出現です。この出会いをきっかけに、出版支援の申し出が県内外から相次ぎ、結果は119人から104万円ほどが寄せられ、「た・ま・え・ま・る～山陰最大の戦災 75年目の真実～」(A5判60頁、税込み価格1,100円)は6月1日、発行されました。初版500冊。

根平さんによると、水木しげるさんは生前、「世の中には見えない世界というのがあ。何でも一人でやってるんじゃない。たいがい後ろからそと背中を押してくれているもんだ。そんな見知らぬ人たちに感謝しなければ、な」と言っていたそうです。根平さんはこれからも「幻の夜見ヶ浜人」や「芋代官」など、境港ゆかりの不思議発見や偉人発掘などで、がんばると闘志満々です。



根平雄一郎さん



爆発でできた大穴と破壊された境港駅周辺



爆発前の玉栄丸

2020年6月11日

鳥取市の智頭街道に工芸作家が集まる「川端巢箱(かわばたすばこ)」があります。開設1周年を記念してCRAFTみんなの猫展があり、たくさんの市民でにぎわいました。

川端巢箱は智頭街道と川端通りの交差点のそば、鳥取銀行の前にあります。かつての薬局を改装して、令和元年春にオープンしました。手づくり工芸の振興とファンづくりを目的にできました。前田富美子さん(パッチワーク)、紙原四郎さん(切り絵)、刈込由紀さん(ラタンバスケット)、柿田隆さん(木工)の4人が日替わりで教室を開いているほか、女子会グループなどに利用されています。

巢箱ができて1年。さらに多くの仲間が飛び立てるようにと、山根教子さん(粘土)、田原正文さん(陶芸)、梅津油彩さん(墨彩画)も加わり、7人で猫展を開くことにしました。杉の木でつくった猫のしっぽ、石粉製の猫の貯金箱、細密な猫の切り絵、猫の耳がついた籐かごなど、猫にまつわる個性豊かな作品が集まりました。

みんなの猫展はコロナウイルスに伴う外出自粛が緩和された後の開催とあって、市民がどっと押し寄せ、1週間の展示即売期間は昼食も取れないほどにぎわったそうです。

世話役の紙原さんは「毎年2回程度、テーマを変えて合同展を開き、手づくり工芸ファンを広げるとともに、ワークショップに参加する人や機会を増やしていきたい」と話していました。



川端巢箱に集まるみなさん



こんな招き猫いかがですか



籐のかごいろいろ使ってよいですよ



この切り絵のポイントは…



人気商品の猫のしっぽやコースター

2020年6月12日

コロナウイルス撃退応援歌「あめがやんだら」が完成し、ユーチューブで動画配信されています。奥日野の音楽家たちが、コロナによる巣ごもりを逆手にとって、人類史に残る事件を切り取り、歌にしました。「あっぱれ！」と好評です。

歌づくりを企画したのは、日野軍★みらい創生デザイン会議(田貝英雄代表)です。With CORONA Stay Home。「家にこもりながらも、みんなとつながろう」。コロナに立ち向かっている医療や介護の従事者、コロナのあおりで休業・休職を迫られている人々、感染予防のため学校に行けず、友達と遊べない子どもたち……コロナ時代を生きるみんなの応援歌をつくることにし、歌詞を公募していました。

選ばれたのは日南町観光協会の山本真成さんの「あめがやんだら」です。いつもの景色や暮らしのなかでコロナと共生し、コロナ後には新しい価値観を見出そうという思いをつづっており、前向きな詞と評価されました。

曲をつけたのは日野町のデザイン会社社長の杉原幹雄さんです。シンセサイザーで8ビートのテンポの良い曲調に仕上げました。雨音のイメージ音を随所に取り入れ、管楽器で盛り上げているのが特徴で、口ずさめるよう工夫したといいます。

歌っているのは日野町の農業女子、岩本爽(さや)さんです。夢は農業をしながら、「モーニング娘」のように歌って踊れる歌手になりたいそうです。レッスンはいつも農作業姿。何度も歌いこんで、ユーチューブにデモ版をアップできるまでになりました。杉原さんは「節回しにきわどいところがあるものの、持ち前の明るさと元気でうまく歌ってくれています」と喜んでます。

日野軍★みらい創生デザイン会議は、奥日野まちづくりの“作戦本部、”といったところです。毎年“日野軍、”のイベントを調整、連携させて、夏の陣、秋の陣を張り、一体になって奥日野の魅力を売り出しています。杉原さんはその副代表です。学生時代から培った歌づくりとデザイン力で、たたら製鉄や日本刀の始祖とされる伯耆安綱などの電子紙芝居をつくり、奥日野を売り出しています。今回は日本、世界、人類がフィールドです。



杉原幹雄さん



岩本爽さん

あめがやんだら

突然 降り出した雨
雨は どんどん強くなる
たまたま 木陰で雨宿り
空を 見上げてつぶやいた
この雨は いつ止むのだろう
今は じっと待つばかり……
止まない雨などないと信じて
その時が 来るまでひと休み

容赦なく 土砂降りの雨
イヤでも こころ滅入るけど
足元で 雨に打たれ咲いている
小さな 花に君を 重ねた
この雨は いつまで降るんだろう
遠い空を 見るばかり……
それでも 重なる雲の切れ間から
わずかに 光 こぼれる兆し

(間奏)

この雨も やがては止むはずさ
服はぬれて しまうけど
雨上がりの景色は思うほど
悪くは ないはずさ きっと……
空に 虹の橋がかかれば
早く 会いに行きたい！ 君に！

2020年6月12日

鳥取市の鳥取城跡そばの樗谿溪谷には、太閤ヶ平や鳥取東照宮、樗谿公園、市歴史博物館やまびこ館などがあり、観光客や市民憩いの名所になっていますが、樗谿溪谷の美観を守る会（福田修三代表）が丹精込めて育てた大宮池の花菖蒲が満開になり、市民でにぎわっています。

樗谿溪谷の美観を守る会ができたのは平成29年秋です。大宮池の水がすべて放流されて渇水状態になったため、市民運動で自然景観を取り戻そうと誕生しました。まず取り組んだのが、絶滅していた鯉の復活です。錦鯉を2度放流し、今では美しい錦鯉が群れをなして泳ぐようになりました。

令和元年の夏には、鳥取県花菖蒲協会（山根博允会長）の協力で大宮池の西岸東屋前の斜面に300株の花菖蒲を植栽しました。その花菖蒲が6月初めから咲き始め、今まさに見ごろを迎えています。きれいな水面に鮮やかな錦鯉や花菖蒲が映え、市民は美しい景観復活を喜んでいます。

樗谿溪谷の美観を守る会の川口敬恵副代表によると、花菖蒲の日々の手入れに加えて、大宮池に大繁殖した外来種オオカナダモの回収、駆除が大変だったそうです。

花菖蒲の花は二日ほどしか咲かず、枯れた花を取ってやらないと次の花がきれいに咲かないので、日々の手入れが欠かせません。また、花菖蒲は日当たりの良いところを好み、1日おきに水やりに通ったといいます。オオカナダモの駆除はシルバー人材センターにも応援を頼み、会員みんなで汗を流しました。美しい景色をゆったりと楽しんでもらえるよう、古くなっていたベンチも取り替えました。

樗谿溪谷には国史跡の太閤ヶ平があり、散歩やウオーキングで月に5千人ほどの市民が訪れています。その遊歩道のそばに大宮池はあります。樗谿溪谷の美観を守る会のみなさんは「市民の健康づくりのお手伝いもしていると思うと、活動の励みになります」と満足そうです。花菖蒲は株分けをして、来年には600株に増やす計画です。



川口敬恵さんと福田修三さん



大宮池と花菖蒲をカメラにパチリ

青谷上寺地遺跡や妻木晩田遺跡などがある鳥取県は「弥生の王国」を誇っていますが、鳥取県には天照大神や神武天皇などもいて、古代史の中心舞台だったと訴える古代史研究グループがあります。その例会が北栄町でありました。

倭国古代史研究会(道祖尾義孝会長、28人)で、2019年1月に発足しました。蒜山高原が高天原だったとする学説を支持しています。高天原の比定地は奈良県の葛城、宮崎県の高千穂、富士山などが知られていますが、いずれも日本書記にかかわった藤原一族の創作としています。蒜山高原にあるすべての神社で、天照大神がまつられているのをよりどころにしています。

道祖尾会長は蒜山高原が高天原だったとすれば、天孫降臨の地は宮崎県ではなく鳥取県中部だったのではないかと考え、8年かけて各地を踏査し、その成果をネットで紹介(真実の古代史)するとともに、仲間と研究を続けています。

成果のひとつが天照大神は徐福だったとする新説です。徐福は秦の始皇帝に命じられ、不老不死の薬を求めて蓬莱の霊山を目指してやってきます。第1次は紀元前219年、第2次は紀元前210年。そのゆかりの地が日本各地にあります。熊野市(三重県)、新宮市(和歌山県)、佐賀市(佐賀県)、伊根町(京都府)、佐久市(長野県)、富士吉田市(山梨県)など。道祖尾会長は「大山こそ蓬莱山。当時、入江だった北栄町の大島と原に徐福一行は上陸し、天照大神を名乗って葦原中津国(鳥取県中部)の王になった」と推定しています。

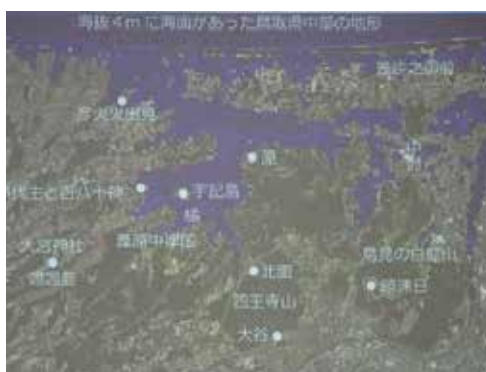
徐福に遅れること16年。殷王朝の末裔、朝鮮の準王一族が山陰に進出し、出雲族になりました。出雲族に葦原中津国を奪われた天孫一族は、福山市周辺に拠点を移し、九州平定などを進め、朝鮮半島から鉄を得て、出雲族を征服していったといえます。その足跡が大山周辺や鳥取県中部各地の地名などになって残っています。また、神武東征も藤原一族の創作で、日向に避難していた百済の民を奈良に移したのを隠すトリックだったといえます。

道祖尾会長によると、奈良時代までは全国に120余りの小国があり、倭国もそのひとつで、鳥取県中部のことだといえます。2世紀後半の「倭国大乱」は、葦原中津国や青谷上寺地遺跡の住民が出雲族と戦った史実だったと見立てています。

葦原中津国の中心地・北栄町大島の後ろには四王寺山(倉吉市大谷)があります。「神武天皇の4兄弟が育ったところ」と道祖尾会長は考えています。ふもとの中尾遺跡からは紀元前100年ごろの住居跡が見つかっています。その近くに伯耆国庁が設けられています。百村江の戦いの後、新羅からの攻撃に備えて移転してきたともいわれています。



道祖尾義孝さん



縄文海進時のころの鳥取県中部の海辺

古代城があったと思われる
四王寺山頂の高見神社跡

社会福祉チャリティー・第56回鳥取県大衆音楽祭(鳥取県社会福祉協議会など後援)が鳥取市の文化ホールであり、平田美貴さん(北栄町)が県知事賞に輝きました。コロナウイルス感染予防のため、大会初の無観客で行われましたが、出場者は押さえていた歌心を思い切り発散させ、心地よさそうでした。

今年の音楽祭はコロナ禍のため、異例づくめでした。全国大会の日本大衆音楽祭の県予選を兼ねているため、なかなか開催可否が決まらず、大会事務局は出場者を絞り込んで準備を進めてきました。結局、大会直前になって全国大会の中止通知があり、やむなく初めての無観客大会になってしまいました。

ホール玄関には入場お断りの張り紙。選ばれて出場したのは約90人。いつもの3割減。「マスクは歌う時しか外さない」徹底ぶりで、500ある座席は出場者が間隔をあけて座り、歌仲間を拍手で応援しました。

審査したのは日本大衆音楽協会副理事長の西谷勝歳さんなど。「歌は自分の健康のため、カラオケはヒトの幸せを願って歌う」という西谷さんは、「コロナ禍のためカラオケルームやスナックなどは休業が続き、歌いたくても歌えない状態だっただけに、ステージに立つみなさんは心地よさそうでした」と講評していました。

ゲストには安来市出身のシンガーソングライター・HANZOさんが招かれ、出場者から集めたチャリティー募金は、西谷会長と事務局長の岡部和子さんが鳥取県共同募金会に届けました。

大会の主な受賞者は次のみなさんです(敬称略)。

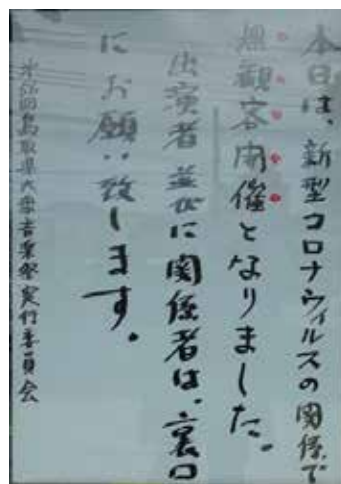
県知事賞＝平田美貴(北栄町)▽鳥取市長賞＝井上朱美(米子市)▽鳥取市教育長賞＝山田美智代(米子市)▽県大衆音楽協会長賞＝前川寿賀子(関金町)▽県教育長賞＝北尾菜々花(鳥取市)▽新日本海新聞社賞＝北尾述子(鳥取市)▽県共同募金会長賞＝岡田環(米子市)▽県社会福祉協議会長賞＝伊井野寿和(鳥取市)▽日本海ケーブルネットワーク賞＝山下俊徳(鳥取市)▽第一興商賞＝浅田忠弘(鳥取市)▽県議会議長賞＝末吉敏彦(米子市)▽日本海テレビ賞＝杉谷和信(米子市)



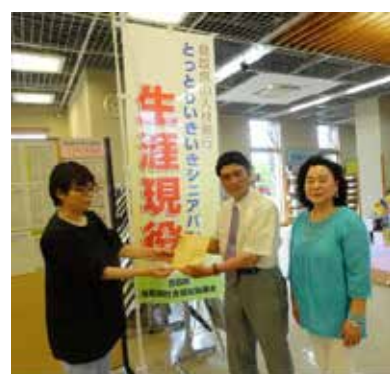
鳥取県知事賞の
平田美貴さん



鳥取県社会福祉協議会
会長の伊井野寿和さん



玄関に張り出された
無観客開催の案内



県共同募金会にチャリティー募
金を届けた西谷さんと岡部さん

コロナウイルスの世界的な感染拡大で、2020年夏の東京五輪は延期になってしまいましたが、鳥取市の県立博物館は「輝いていた1960年代展」を開き、五輪ムードを盛り上げています。鳥取大名誉教授の油野利博さん(鳥取県スポーツ協会名誉会長)が「鳥取県のオリンピック」について話しました。同展は7月5日までです。

油野さんによると、鳥取県ゆかりのオリンピックは51人います(選手、監督、コーチ、審判員、大会役員、パラリンピック含む)。第9回アムステルダム大会(1928年)の陸上競技に南部忠平さん(早稲田大—鳥取女子短大学長)が出場したのが最初でした。メダルを取ったのは、その南部さんがロサンゼルス大会(1932年、陸上競技)で金と銅、森下広一さん(八頭高—旭化成—トヨタ自動車九州陸上競技監督)がバルセロナ大会(1992年、マラソン)で銀。2人だけです。

柔道の阿部信文さん(県立米子中学—東京高等師範)は東京大会(1964年)で模範演技「古式の形」を披露し、世界に柔道を紹介しました。バレーボールの水原理枝子さん(鳥取家政高—ユニチカ)はモスクワ大会(1980年)の選手に選ばれながらも、“東西冷戦、に伴う日本の大会不参加で幻になってしまいました。それぞれのオリンピックに、それぞれのドラマがあります。

油野さんは箱根駅伝の経験者で陸上競技が専門です。そこで鳥取県のオリンピックのうち、県出身の陸上競技選手とその指導者群像を紹介しました。

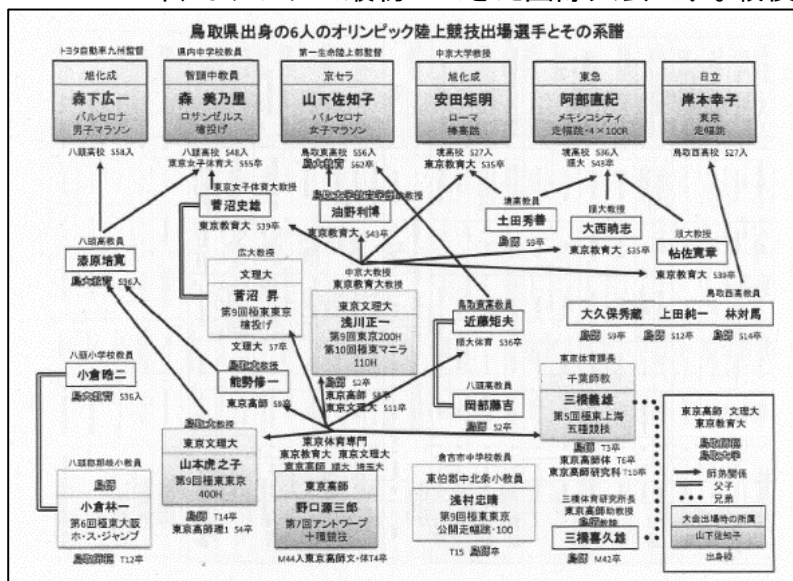
選手は①安田矩明(棒高跳び)②岸本幸子(走り幅跳び)③阿部直紀(走り幅跳び)④森美乃里(やり投げ)⑤山下佐知子(マラソン)⑥森下広一(マラソン)—の6人です。それぞれの系譜は別表の通りですが、鳥取師範や鳥取大の卒業生が選手の育成に大きくかかわっていることがよく分かります。バルセロナ大会(1992年)のマラソンで4位に入った山下佐知子さん(鳥取東高—鳥取大—京セラ—第一生命)は、油野さんの教え子です。

それぞれの選手の大先輩には、日本初の陸上競技指導書を著した野口源三郎さん、学校体操や女子スポーツの普及で活躍した三橋喜久雄・義男さんの兄弟、日本陸連の常務として陸上競技の振興に努めた浅川正一さんなどがいます。

次いでながら、極東大会(1913~1934年)はアジアで最初にできた国際大会です。戦後、アジア競技大会に衣替えしました。



油野利博さん



油野利博さん作成の系譜図

鳥取市の鳥取県民ふれあい会館で会館職員の接遇研修があり、接遇マナーインストラクターの加藤典紅さん(北栄町)が「人間力を高めて、心を込めたおもてなしをしよう」と呼びかけました。

加藤さんのモットーは「意識が変われば、行動が変わる！」です。仕事をする際、どのような思いで行動するかによって、その仕事が雑用になるのか、尊い仕事になるのか、結果は大きく違うと指摘しました。

「自分自身の心を豊かにして、お客様に接すれば、おもてなしの心が相手に伝わり、お客様だけでなく、同じ職場で働く仲間にも仕事の尊さが広がっていく」というわけです。「自らの行動はすべて自らに返ってくる」「笑顔が笑顔をつなげていく」「ポジティブな言葉が幸せをつかむ」など、接客指導やアドバイスが続きました。

講義では笑顔体操や腹式呼吸の練習もありました。腹式呼吸で長く息を吐くことはリラックス効果があり、口を閉じて鼻で息をすることは、ウイルスなどの感染予防対策にもなるそうです。

受講者からは「あいさつの大切さに気づきました。人間力の大切さについても改めて知らされ、勉強になりました。反省することばかりです。前向きな言葉や行動に努めたい」などの声が聞かれました。

講師の加藤さんは「過去と他人は変えられないが、未来と自分を変えられます。そのことに気づいていただけるよう、お話をさせていただきました。笑顔や元気であること、感謝の気持ちの大切さがわかっていただけたら、うれしいです」と話していました。

意識が変われば、行動が変わる！ みなさんも笑顔・感謝・元気の花を咲かせましょう。



加藤典紅さん



会場の様子



意識が変われば、行動が変わる

鳥取県立博物館の企画展「輝いていた1960年代」で、札幌五輪のスキー競技に選手として出場した大杖正彦さんの特別講演「オリンピックがくれたもの」があり、大杖さんは「努力は天才に勝る」と五輪体験を語りました。

大杖さんは姉・美保子さん、弟・二郎さんとともに、アルペンスキーの大杖3姉弟で鳴らし、国内外で活躍しました。とくに1964年の全日本スキー選手権大会は美保子さんが滑降と大回転、正彦さんが回転を制し、1968年も美保子・正彦さん姉弟はそれぞれ滑降で優勝しました。美保子さん(米子西高—日本大)は、この年のグルノーブル五輪に出場し、その4年後の札幌五輪(1972年)には正彦さん(米子工高—慶応大—デサント)が出場しました。正彦さんは札幌五輪の公式ポスターにもなりました。

大杖さんによると、五輪出場前にスイスに3年間、スキー留学したのが大きな財産になったといえます。そのころのアルペンスキーはオーストリア、フランス、イタリアの牙城でした。札幌五輪でのスイスチームは男女6種目のうち、3つの金を獲得し、その技術力やチームワークが高く評価されたといえます。大杖さんはそこで鍛えられ、人脈を広げ、五輪後の全日本チームの指導に生かされたそうです。

大杖さんの五輪の思い出はもう一つ。高校3年の時、東京五輪で聖火ランナーになり、米子市役所—勝田神社間を走ったことです。「すごい人でした」と、今でも鮮明に覚えています。1964年の全日本スキー選手権大会で招待の金メダリストに勝って、一躍「時の人」になり、栄光の正走者に選ばれました。

大杖さんは子どものころや学生時代の思い出話もしました。子どものころはスキー漬けの暮らしで、夏休みには毎日のように大山山頂へジュースを運び上げ、高校時代は週に一度、米子市から大山寺まで(約18km、標高差800m)走って帰宅していたそうで、足腰が鍛えられたといえます。「人に負けたくない一心でした。努力は天才に勝るということを知りました。私はオリンピックでたくさんの人生の宝物をいただきました」と話していました。



大杖正彦さん

札幌五輪のポスター
(モデルは大杖正彦さん)東京オリンピックの聖火ランナーになった
大杖正彦さん(米子市役所、輝いていた
1960年代展から)

米子市の国史跡・米子城とその城下町を歩く「米子城歴史ウオーク」がありました。子どもからお年寄りまで200人余りがマスクして参加し、コロナ自粛からの解放を祝うとともに、「歴史ミュージアム」の米子散歩を楽しみました。米子城魅せる！プロジェクト実行委員会・新日本海新聞社主催、鳥取県社会福祉協議会共催。

ウオークは午前と午後、米子市役所を発着点に米子城と城下町それぞれ2回に分けて行いました。ガイドしたのは米子観光まちづくり公社(川越博行理事長)の永井宏一郎・中原斉・山本千恵子・鷺見武志さんら12人。米子城の遺跡発掘現場では市職員が説明しました。

大会事務局によると、定員200人を先着順で公募したところ、わずか5日間でいっぱいになり、申し込みは300人を超えたといいます。参加者の内訳は市内外からそれぞれ半々、とくに鳥取市からの参加が目立ったといいます。米子城人気もさることながら、「イベントがないので、開いてくれてうれしい」「閉じこもっていたので出かけたかった」などの声が多く寄せられたといいます。

外出自粛から解放されて、参加者は元気いっぱい。それぞれグループに分かれて、マスク姿で足取り軽く出発していきました。米子城は三の丸跡の湊山球場で内堀が見つかり、史跡拡張が勢いついています。その活用イメージ図もでき、米子城整備が動き出す運びです。また、江戸時代からの町割りを今に伝える城下町の方も、昔と今を重ね図した「古今絵図」が仕上がり、城めぐり、まち歩きともに格段に楽しくなりました。

さて、米子城の今回の見どころは、球場レフトスタンド外側で見つかった内堀です。三の丸と武家屋敷を区画する防御用の堀で、長さ33m、深さ4m程度と推定されています。参加者は城郭確定の現場に立ち、本丸、二の丸、三の丸、内膳の丸などの立地場所を確認し、カメラに収めていました。米子城跡の調査はまだまだ続きます。

一方、城下町も見どころいっぱいでした。圧巻は9カ寺がズラリと並ぶ寺町。その中心に日蓮宗の3カ寺が占め、そのまた中心には城下町をつくった横田内膳村詮の墓所・妙興寺があり、遺品も多くあります。隣の妙善寺には米子城を築城した吉川広家と親交があった加藤清正も訪れたといい、戦国末期が色濃く残る寺町です。

米子市やその周辺には、身内がなくなると、家族ぐるみで極楽浄土への往生を願って、お地蔵さんに札打ちして回る風習が残っています。この日も加茂川沿いのお地蔵さんや寺町の寺々では何組かの札打ち家族の姿がありました。400年続く古い町には昔ながらの庶民文化も息づいています。



加藤清正公をまつる妙見堂
(妙善寺)



米子城の外堀だった加茂川



米子城活用イメージ図(三の丸広場)

ダンスに眠っている帯でアート作品をつくろう—鳥取市の米里公民館で帯アートの体験教室があり、参加者は持ち寄った帯でバラや扇などをつくり、楽しみました。

講師はグループさくら(山根政恵代表、5人)のみなさん。粘土細作家の山根教子さんらが4年前に立ち上げました。海外で帯アートに取り組む人がいることを知り、日本人も知らん顔はできないと仲間を誘い、普及に乗り出すことにしました。モットーは「思い入れのある帯に、はさみを入れない」です。グループ名の「さくら」は仲間のお孫さんからとりました。その目線の向こうには和文化の拡大があります。

近年は着物を着る機会が減りました。それに伴い、帯もダンスに眠ったままです。それが帯アートへの活用で、光が当たり始めました。ひと工夫すれば、帯が扇子やバラや鶴亀の置物、壁掛けなどになり、店のディスプレイや部屋のインテリアなどに利用できることが分かりました。

山根代表によると、作品展などをすると、いろいろな世代の帯や「思い出」が集まり、まるで帯が会話しているような気分になるそうです。グループさくらは鳥取らしく、因幡の白うさぎや亀づくりを研究し、挑戦することになっています。

今回の体験教室には住民10人が参加しました。それぞれ思い出が詰まった帯や帯締めを持参し、帯の柄や模様を考えながら、「ああでもない」「こうでもない」と、無心に作品づくりに励みました。

参加者は「初めは難しいと思ったけど、やり始めたら意外とできた。見本はあるけれど、それぞれ全く違った仕上がりになり、それが人と違っておもしろい。世界に一つの作品ができてうれしかった。違った帯でまた挑戦してみたい」と話していました。



山根教子さん(左)と山根政恵さん



参加者たちの作品



熱心に取り組む参加者



帯アート「鶴」

市報「くらよし」に4コマ漫画が登場、7月号から連載が始まりました。倉吉市にUターンした漫画家の作品です。

漫画家は、かわにしよしと(本名・川西義人)さん。1948年生まれ。読売新聞に長く似顔絵や政治漫画を描いてきました。カルチャーセンターの似顔絵講師。70歳にして「いろいろくにのいろいろさん」で絵本作家としてデビューしました。日本漫画家協会会員。

かわにしさんが絵の世界へ進んだのは、小学生時代の担任教師だった板画家・長谷川富三郎さん(故人)のほめ言葉がきっかけです。大山や牛など故郷の景色を描き続けました。美術大を目指して浪人中、アルバイト先で仕事をするうちに、現代童画会展などに入選。歌手のアグネス・チャンの似顔絵が評価され、読売新聞で仕事が始まったといいます。

似顔絵のポイントは目と口、それに顔の輪郭にあるそうで、それぞれの絵に品格がにじみでるといいます。品格が感じられない絵は、作者の力量不足と断じます。「人それぞれにエネルギーがあり、味がある。日本人は総じて優しい」とも。似顔絵は美しく描くのが基本だそうですが、政治家は「目立ってなんぼ」の世界。癖のある人こそ描きやすく、茶化すほど喜ばれるそうです。

かわにしさんのUターンを機に、倉吉市は「ふるさと納税」(1万円以上)の返礼品に似顔絵を加えて寄付を呼び掛けています。併せて市報「くらよし」に4コマ漫画の連載を始めました。かわにしさんも「くらよしかすり」ちゃんの新キャラクターを誕生させ、倉吉市PRのお手伝いに取り出しました。

「まんが王国とっとり」の応援団・まんが似顔絵市民フォーラム(河本義永代表)も、かわにしさんに似顔絵を描いてもらい、それを名刺に刷り込み、県内外で使ってもらおう運動を始めました。似顔絵入りの名刺100枚で6千円。「ふるさと創生」が願ひだけに、55万県民全員が対象です。事務局は倉吉シティホテル内。



かわにしよしとさん

かわにしさんと
「くらよしかすり」ちゃん

三朝温泉

2020年7月6日

大伴家持大賞の出前短歌講座が今年も鳥取市の学校で始まりました。この日は万葉の里・国府中学校であり、生徒たちは今年のテーマ「持」にちなんだ歌づくりに挑戦しました。

大伴家持大賞は全国公募の短歌コンテストです。因幡国司で万葉集を編集したとされる大伴家持にちなんで設けられたもので、今年で26年になります。出前講座は18年前から続いており、五七五七七、31文字の短歌に親しむ子どもづくりと応募促進がねらいです。

今年の出前講座は中ノ郷・宮ノ下・用瀬小学校、国府中学校、鳥取盲学校の5校で開かれており、講師は大伴家持大賞の選者で鳥取県歌人会顧問の池本一郎さんと北尾勲さんの2人です。

このうち、国府中学校(岡田年史校長)では、1年生3クラスで短歌講座がありました。講師は池本さん。池本さんは前年の児童・生徒の部で大賞を受賞した田中優衣菜さん(国府中学校)の「6年間使った赤いランドセル 今年寄付したネパールの子に」や石川啄木の「働けど働けどなおわが暮らし 楽にならざりぢっと手を見る」などを例に、「短歌は思いのままに詠むもの」と歌づくりの楽しさや極意を伝えました。

万葉の里の生徒たちは小学生時代から短歌に親しんでおり、50分の授業時間にもかかわらず、手早く歌をつくり、池本さんに添削してもらいました。こんな秀作も誕生しました。

「宿の人コロナに負けずお持て成し 満足できて帰る人たち」

「欲しかった卒業祝いの顕微鏡 調節ねじを持つ手が震える」

おもてなしを漢字で表現して「持」のテーマをクリアする予想外の言葉遣い。さらに世界の問題を素材にしたスケールの大きな歌に、池本さんは「良い歌だ。このまま応募してください」と絶賛していました。

池本さんは「良い歌に接すると、その日一日、楽しくなります。得した気分になります。人を楽しくしたり、前向きになってもらえるような歌をたくさん作ってください」と励ましていました。

大伴家持大賞の応募は7月31日が締め切りです。お問い合わせは日本海新聞へ(☎0857-21-2885)。



歌を添削する池本一郎さん



短歌出前講座(国府中学校)



北尾勲さん(右端、万葉フェスティバルから)

八頭町の郡家・船岡・八東の3つの図書館は今年も「としょかん川柳コンテスト」を実施中ですが、町中央公民館で川柳教室を開き、町民15人が川柳の基礎を学びました。

としょかん川柳コンテストは今年で3回目です。俳句・短歌・川柳などの短文芸の普及と図書館の利用促進を狙いに開いているもので、小・中学生と一般の2部門あり、毎回200点前後の作品が寄せられています。ただ、一般からの応募が少ないのと標語のような作品が多いため、川柳教室を初めて開き、川柳のイロハを学ぶことにしました。

講師は川柳塔社理事長で全日本川柳協会常任幹事の新家完司さん(本名・勝、琴浦町)。地元では大山滝句座代表、毎日新聞柳壇選者を務めています。川柳塔社は番傘川柳本社とともに日本を代表する川柳同人です。

新家さんは俳句と川柳、川柳と標語それぞれの違い、川柳の歴史と作句のポイントなど例句を示しながら説明しました。

それによると、俳句と川柳は和歌から誕生した連歌がルーツで、同じ5・7・5の17文字(川柳は17音)です。俳句は主に花鳥風月や山川草木などの風景を詠み、川柳は人間の仕草や心を詠みます。日本人にとって7・5調の大和言葉は耳に心地よく、俳句も川柳も中7・下5を守れば、リズムが自然に調うと手ほどきしました。

標語も多くが7・5調です。ただ、標語は社会のルールやお手本などを啓発したものがほとんどで、当たり前のことや良いことしか表記しませんが、川柳は人間の喜怒哀楽「おかしみ」「悲しみ」「やさしさ」などを詠み、他人をくささず、自らを詠うのが基本です。

そのためには、①周囲をよく観察して「発見」する②思ったことを正直に5・7・5にまとめる③忘れないように、すぐにメモを取る④作りごとやうそは読む人の心に響かない—などを心がけて句づくりすれば、元気で楽しい川柳人生が送れるそうです。

新家さんは「作句ノートをつくり、入選句などをまとめていけば、3年ほどで自分の句集が出せます。がんばりましょう」と励ましていました。



新家完司さん



活発な質問で盛り上がる
「としょかん川柳教室」



川柳塔同人誌とガイドブック
の「川柳しませんか」

鳥取市の県立博物館で漆塗り体験講座があり、講師の橋谷田岩男さん(佐治漆研究会)が手ほどきしました。このなかで橋谷田さんは「青谷上寺地遺跡から出土した弥生時代の漆器は楽浪漆器に酷似しており、さらに調査が必要」と指摘し、注目を集めました。

青谷上寺地遺跡から出土した漆器は、そろばん玉に似た容器とフタ、曲げ物の台座の一部、合わせて3点です。いずれも黒漆地に赤漆の渦巻き模様がスタンプ紋のように入っており、フタには5弁の花びら模様があります。2～3世紀の作品と推定されています。橋谷田さんによると、渦巻き模様の漆器は朝鮮半島・楽浪郡から出土したものによく似ているといいます。

楽浪郡は中国・漢の時代に設けられたもので、紀元前108年～313年まであったといわれています。漢の支配地でした。いまの北朝鮮の首都・平壤あたり。その墳墓群から金銀器、青銅器、漆器、玉器などが見つかっています。

青谷上寺地遺跡整備室の北浦弘人室長は「青谷では玉づくりのほかに高度な花卉高坏などをつくって、北九州や朝鮮半島南部の鉄などと交換、交易しており、その過程で楽浪漆器が入ってきたのかもしれない。ただ、青谷の漆器には花卉模様が入っており、地元産かもしれない」と、判断を留保しています。いずれにしても、弥生の博物館といわれる青谷上寺地遺跡は「宝の山」です。漆器を含めて、ここで出土した1353点が2019年に国の重要文化財に指定されています。

橋谷田さんによると、日本の漆器の歴史は古く、いまから1万年ほど前の縄文時代にさかのぼるそうで、函館市垣ノ島遺跡や福井県鳥浜貝塚などから出土した赤糸やくしが最古のものといえます。鳥取市布勢でも赤漆土器などが見つかっています。

県内の漆の産地は佐治谷でした。江戸時代から昭和40年ごろまで続き、漆器産業を育てました。県統計によると、昭和10年の漆器製造販売額は約14万円、いまのお金に換算すると2億8千万円ほど。漆工は125人、鳥取市に65人いたそうです。残念ながら、いま日本に流通する漆の98%は中国産です。

橋谷田さんは2016年から佐治漆の復活を目指して活動を始めました。目標はウルシ木1万本の植栽。シカ害に悩まされながらも、苗木を植え続けています。賛同する仲間も当初の6人から20人に増えたそうです。

さて、漆塗り体験講座です。12人の親子が参加しました。橋谷田さんから漆器の歴史や佐治漆の話を聞いた後、箸づくりに挑戦しました。漆かぶれに注意しながら、箸にウルシオールを塗り重ねていきました。漆の膜が長く使える丈夫な箸をつくるといいます。



鳥取に伝わる漆作品を解説する橋谷田岩男さん



漆塗り体験教室



漆器の容器(青谷上寺地遺跡から出土)



漆器の蓋(青谷上寺地遺跡から出土)

智頭町ゆかりの日本初のマラソン大会優勝者・綾木長之助展が鳥取市の仁風閣で開かれています。これを記念して鳥取地域史研究会長の小山富見男さんが「明治42年の韋駄天(いだてん)長之助」について講演し、郷土の偉人を紹介しました。

綾木長之助(旧姓金子、1883～1969年)は岡山県西粟倉村坂根の出身です。若いころは地元の郵便局で逋送人となり、志戸坂峠がある大原—智頭間(往復延べ9里)を走って郵便を運んでいました。鳥取40連隊に入隊したころは、砂丘での演習の行き帰りに仁風閣があるお堀端を先頭切って走り、だれもが認める健脚だったそうです。これにちなんで仁風閣は長之助展を開きました。

略歴によると、長之助は除隊後、1909年の日本初のマラソン大会・神戸—大阪間20哩(マイル)長距離走に在郷軍人として出場し、2位に5分近い大差をつけて優勝しました。3年後のストックホルム五輪への出場が期待されましたが、長之助は智頭町八河谷の綾木家に婿養子で入り、走ることをやめて農林業に専念しました。

ストックホルム五輪は日本にとって初参加の五輪です。マラソンにはNHK大河ドラマ「いだてん」のモデルになった金栗四三(1891～1983年)が出場しました。98人がエントリーし、完走したのは35人、死者1人という過酷なレースでした。金栗もコースを間違えて行方不明になり、ゴールしたのはなんと1967年でした。54年8カ月6日ぶりのゴールで大きな話題になりました。

さて、日本初のマラソン大会、長之助の走りっぷりはどうだったのでしょうか。小山さんは主催者・大阪毎日新聞の記事や長之助の回顧録をもとにレースを再現し、実況放送さながらに講演しました。ちなみにエントリーしたのは408人、書類審査、予選競走会を経て20人が出場しました。

それによると、長之助は勢いよく飛び出しましたが、すぐに抜かれて7位に後退します。草履の緒が切れたものの、知人の激励で盛り返して2位に浮上。西宮で1位になると、ますます元気になり、地元選手への大声援を味方にして決勝点の西成大橋に飛び込んだそうです。

長之助に贈られた賞金は300円。いまのお金に換算すると100万円くらい。優勝旗2本のほか、副賞は韋駄天の絵、清酒、椿油、洋皿など、どっさり52点。さらに市中パレード、ホテルでの大祝宴が待っていたそうです。日本初のマラソン大会は新聞社の販売促進策としてスタートしたといえます。

小山さんは「長之助が五輪を走っておれば、好成績が残せたかもしれませんが、綾木家の財産を増やしました。金栗は五輪の失敗を反省して箱根駅伝をつくったりしました。ともに、それぞれの韋駄天人生をよく生きたと思います」と話していました。



小山富見男さん



綾木長之助さん



左から4人目が綾木長之助(智頭町歴史民俗資料館蔵)

鳥取市の鳥取ルーテル幼稚園(三谷泰代園長)は、お泊り保育を行い、アマチュア天文家の多賀利寛さんを招いて星空観察会を開きました。梅雨空で月や星は見えなかったものの、ちびっ子たちは夏の夜空の話を聞きました。

鳥取ルーテル幼稚園の星空観察会は夏休みの恒例行事です。いつもは佐治アストロパークのコテージに泊まり込んで、星空を見上げますが、今年はコロナの感染予防のため、園舎に泊まって実施しました。

参加したのは年長組の18人。鳥取砂丘で風紋ができる仕組みを学んだり、砂絵づくりに挑戦した後、翌朝食べるパン生地をこねたりして夜を待ちました。カレーライスの夕食が終わって午後7時、多賀さんの星空観察会が始まりました。

相変わらず、空は分厚い雲。アニメ映画で星座の物語、ギリシャ神話などを予習しながら月が出るのを待ちましたが、好天に恵まれず断念。多賀さんはポータブルのプラネタリウム解説に切り替え、夏の夜空を説明しました。子どもたちはホールに敷かれたござに寝転んで、天空の変化を不思議そうに見入っていました。

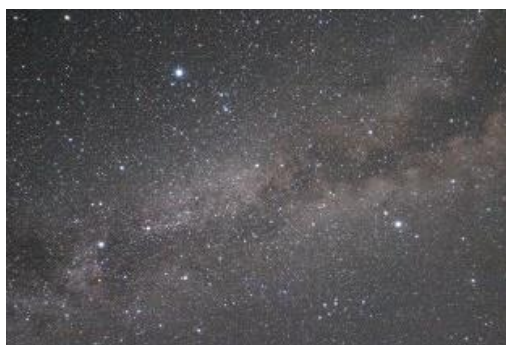
多賀さんの説明によると、目に見える星の数はおよそ6千個、星座の数は88あり、天の川にはたくさんの星が集まっています。その天の川をはさんで、夏の空にはベガ(織姫星)、アルタイ(彦星)などがつくる大三角が見られます。今年は8月25日が陰暦の7月7日、七夕です。織姫星・彦星がよく見える夜ですが、2つは15光年離れており、それぞれの「愛をささやく」光は30年前のものだそうです。

多賀さんは流れ星についても説明しました。そのスピードは速く、0.5~2秒ほどで消えてしまいます。それが消えてしまうまでに「カネ・カネ・カネ」の呪文を唱えることができれば、宝くじが当たるなど願い事がかなうと話していました。ホントかな？

子どもたちはこの夜、星空を見上げることはできなかったものの、これからの「星取県」探検の入り口に立ちました。



多賀利寛さん



夏の大三角(左上の明るい星が織姫星、右下が彦星、左下がデネブ。中央を横切るのが天の川。2018年、若桜町・響の森で)



プラネタリウムを見終わって、くつろぐ子供たち

鳥取市の県民ふれあい会館で今年初めてのランチタイム・コンサートがあり、サクソ奏者の澤田勝さんが楽しい歌謡ショーを繰り広げました。

県民ふれあい会館は県民の生涯学習の拠点です。歌や踊りや茶道、いけばな、健康づくりなど多彩な教室が開かれており、サークル活動などでにぎわっています。2年前からは希望者がお昼時に、玄関ホールでコンサートやパフォーマンスを演じ、練習の成果を発表しています。

しかし、コロナ禍の今年は別。毎月のようにあったランチタイム・イベントは、練習不十分で発表者がなく、開催できずにいました。澤田さんのサクソ歌謡ショーが初ステージです。

澤田さんはポップス・バンド「アールファイブ」のリーダー。サクソ歴50年の腕と技を生かして1人でも出かけ、毎月2回程度、介護施設や敬老会などで演奏しています。ただ、今年はコロナの影響で出演依頼がなく、澤田さんにとっても半年ぶりのステージになりました。

澤田さんが演奏したのは、お昼時の30分間。「糸」「ブルーライトヨコハマ」「ムーンリバー」などアンコールも含めて9曲。カラオケをバックにテナーサクソの甘く切ない音色を届けました。マスク姿のお客さんはソーシャル・ディスタンスの客席で、手拍子足拍子。くつろぎのひと時を過ごしました。会館の教室に通うご婦人は「澤田さんの演奏がやっと聞けました。やはりお上手ですね」と満足そうでした。

県民ふれあい会館によると、ランチタイム・イベントはジャンルを問わず、だれでも出演できるそうで、希望者を募っています。お問い合わせは☎0857-21-2266へ。



澤田 勝さん



県民ふれあい会館のランチタイム・コンサート

コロナウイルス感染拡大防止のため、自宅学習を続けている鳥取市の高齢者大学「尚徳大学」は、鳥取民藝美術館常務理事・木谷清人さんが語る「吉田璋也の文化遺産保護運動」をDVDにし、貸し出しを始めました。DVD制作は庭園文化研究家・青木清輝さんの「鳥取県の庭園の魅力語る」に次いで2作目です。

今年の尚徳大学はDVDに講義をおさめ、受講者に貸し出す形で行われています。いつもの講義は90分程度ですが、在宅受講を考慮してDVDは30分程度に短縮しています。

吉田璋也(1898～1972年)は鳥取市の名誉市民です。医師のかたわら衣食住のデザイナーはじめ、民藝運動、文化財保護活動など幅広く活躍しました。今回の講義は文化財保護活動家としてのお話です。

吉田は昭和29年、教育者で美術・考古学にも詳しい川上貞夫(1897～1977年)らと鳥取文化財協会を設立し、文化財の保存運動をおこしました。その活動は鳥取砂丘の天然記念物指定、箕浦家武家門・鳥取城跡・仁風閣の史跡・文化財としての保存、湖山池の自然や遺跡と景観の保護など多岐にわたります。これらの運動がなければ、鳥取砂丘は緑地化され、すべて農地や宅地になっていたかもしれません。

なにしろ鳥取砂丘は、県によって植林をされることが決まっていた。吉田らは砂丘の価値に気づき、「ちょっと待った」と保護活動を始めます。バーナード・リーチや山下清らの著名な芸術家を鳥取に招き、鳥取砂丘の絵を描いてもらい、展示会を開いて砂丘の美しさや価値を市民に伝えました。そして鳥取砂丘は昭和30年2月に天然記念物に指定され、昭和38年7月に山陰海岸国立公園に昇格したのです。

木谷さんによると、吉田は夢を持った人だったといいます。途方もないような夢を次々に実現していきました。それを可能にしたのは仁徳、人望だったといいます。

木谷さんは「指スヤ都 見シヤ茲ヲ」という民藝運動を始めた柳宗悦の言葉を紹介しました。「都を目指してばかりいないで地元こそ良いものがある、そこを見つめなおしましょう」と。そして先人が守ってきた遺産を誇りに思い、大切にするのも市民の責任と訴えました。



木谷清人さん



山陰海岸国立公園 鳥取砂丘

鳥取砂丘(天然記念物指定)	
昭和25年 8月	県は浜坂・湖山・福部の砂丘1,250haを植林決定
昭和28年 3月	海岸砂丘地帯農業探興臨時措置法施行
昭和28年 6月	バーナード・リーチ 鳥取砂丘の素描
昭和28年 8月	市は文化財申請しない方針を決定。全面緑化を打ち出す
昭和29年 2月	鳥取市長・市教委・浜坂地区、約9haを植林しないと合意
昭和29年 3月	厚生省は国立公園指定不可連絡。100ha以上が必要とする。
昭和30年 2月	約30ha天然記念物指定告示
昭和30年 6月	「山陰海岸国立公園」指定
昭和31年 8月	山下清 砂丘の素描
昭和34年 4月	鳥取文化財協会が有鳥武部碑建立
昭和37年 7月	113haに天然記念物拡大を告示(S. 53, 7 148.2haに拡大)
昭和38年 7月	「山陰海岸国立公園」に昇格告示

鳥取砂丘が国立公園になるまで

2020年7月31日

岩美町の片山長生さん(元高校教師)は、地元出身の外交官兄弟、澤田節蔵・廉三とその妻・美喜の物語をNHKの歴史大河ドラマに取り上げてもらうため、原作となる小説「愛郷」を出版しました。史実に基づく実名小説で、日本の現代史がよくわかると話題になっています。

小説「愛郷」は戦後日本の国際社会への復帰に尽力した初代国連大使・澤田廉三の一代記です。廉三は昭和天皇の皇太子時代、ヨーロッパ歴訪に通訳として同行するなど、外務次官まで登り詰めました。兄の節蔵も外交官で、戦前日本の国際連盟脱退に抵抗したことで有名です。戦後は文化放送会長や東京外国語大学初代学長などを歴任しました。廉三の妻・美喜は三菱財閥の孫娘で、戦後は混血孤児のため「エリザベス・サンダース・ホーム」をつくり、2千人近い孤児を育てました。

この3人の「人類愛」「祖国愛」「母子愛」を広く紹介するため、片山さんらは「三愛のクニへ」研究会をつくり、大河ドラマ化実現を働きかけています。書いたのは片山さんです。3人の評伝に加えて、廉三の手紙類などで裏付けを取り、会話をつくり、仕上げたといいます。とくに天皇との会話には腐心したそうです。

さて、「愛郷」は明治時代半ばから昭和31年の日本の国連加盟のころまで、およそ70年間は舞台です。戦争が続く激動の時代でした。それぞれの章ごとに年表や写真を添えて、わかりやすい歴史小説づくりに努めています。A5判、395頁の力作です。

「ヒューマン・ドキュメンタリー・ドラマ」を目指した物語とあって、全編「愛」であふれています。「母子愛」「父子愛」「隣人愛」「郷土愛」「師弟愛」…。廉三の初恋の相手も登場します。教育者・片山さんの人づくり論や人生語録が、要所要所を飾っています。

この本の真骨頂は、日本の現代史に切り込み、戦争の正体を明らかにしようとしたところでしょう。「外交の延長線に戦争がある」とすれば、外交官兄弟の物語は好むと好まざるとにかかわらず、戦争の真相や結末を語らなくてはならないのかもしれないかもしれません。日本はなぜ泥沼の日中戦争にのめり込んだのか。負けるとわかっていた太平洋戦争へ突き進んだのか。その末路が敗戦です。300万人を超す人がなくなりました。人類初の被爆国になり、満蒙開拓・シベリア抑留の悲劇なども生みました。満州事変では米英と手打ちする局面があったこと、軍部はアヘンなどの利権に染まり、無責任だったこと…などの外交裏面史が語られています。とかく真相話は教科書には載りません。歴史ファン必読の書です。



片山長生さんと「愛郷」



愛郷～外交官 澤田廉三の生涯～



「三愛のクニへ」のポスター

大山町の大山寺参道入り口にある鳥取県立大山自然歴史館で、夏の企画展「大山の森と樹木」が開かれています。これにちなんで、館長の矢田貝繁明さんがガイドする大山の森観察会があり、夏休み中の親子など約20人が森の恵みを学びました。

大山(1729m)は1936年(昭和11年)に日本海側で最初の国立公園になりました。景観が優れた独立峰で、長く神の山として入山規制されてきたこともあって、生物や昆虫や野鳥の宝庫です。ダイセンの名を冠する珍しい動植物も多く、山頂近くには特別天然記念物のダイセンキャラボクの群落があります。

大山の自慢は西日本最大級のブナ林です。大山寺周辺から標高1400mにかけて広がっています。ブナは葉っぱが多く、水をたっぷり含んでいるのが特徴です。周囲2mのブナで、年間8tくらいの保水力があるといわれています。そんなブナが大山には無数にあります。ただ、根が浅いので強風に弱く、根倒しになることがしばしばですが、キノコや昆虫などに分解され、土に戻ります。この繰り返しでブナ林を再生し、大山の豊かな自然を伝えてきました。

ブナ林にとどまらず、「大山の森と樹木」展は大山の四季を彩る落葉樹、広葉樹、カラマツ林、ヒメコマツ林や桜、キャラボクなどをパネルで紹介しています。大山の登山や散策に役立ててもらおうというのが願いです。そのフィールドワークが矢田貝館長と巡る観察会です。僧兵コースの一部、大山寺参道—夏山登山道—利生水—南光河原—大山寺のおよそ2kmを3時間かけてゆっくり回りました。回る先々には多彩な木々や草花があふれ、矢田貝館長の名調子が続きました。

夏山登山道で幹や枝が折れにくいチャボガヤを見つけると、矢田貝館長は「昔は牛の鼻輪にしたり、加工してアユつりのタモなどに使いました」と実演付きで説明していました。また、博労座そばの赤茶けたコナラを指さしながら、「カシノナガキクイムシという小さな甲虫が木の中に入り、それについている菌が木の水脈をふさいでナラ類を枯らしています。県東部で始まり、いま大山周辺がピークです。心配しています」と「ナラ枯れ」の現状を紹介しました。道路沿いのあちこちの木には、小さなカップをいくつも連ねた「カシナガトラップ」がくりつけられ、捕獲作戦が進行中です。

大山の森観察会に参加したみなさんは、森はきれいな空気をつくり、水源かん養や土石の流出などを防ぎ、人々の憩いの場になっていることを学びました。大山自然歴史館では「暑い夏を避けて、涼しい大山を歩いてみませんか。いろんな発見があります」と大山散歩を呼びかけています。



矢田貝繁明さん



ブナの森を歩く



大山の魅力をガイドする矢田貝さん

鳥取市の道の駅・西いなば気楽里で竹の風車手づくり教室があり、大勢のご婦人や家族連れでにぎわいました。

教室を開いたのは竹の風車同好会(岸田輝男代表)。3月の春休みに開く予定でしたが、コロナ禍のため、夏休みに延期しての開催です。道の駅のおすすめ商品を買えば、無料で教室に参加できる仕組みで、先着50人が挑戦しました。

指導したのは元教員で生涯学習コーディネーターの西上洋治さんです。西上さんは父親譲りの作り方で、真竹や黒豆や色紙などを使って、風車づくりを紹介しました。ポイントは4本の竹ひごで編む玉づくりですが、右編み、左編みで風車の回転が逆方向になるから不思議です。この2つの風車の先に色紙を張り付け、黒豆などを使って真竹にセットすれば、出来上がりです。竹ひごの編み方は西上さんのホームページ「三国山の風の館」に載っているので、ご覧ください。

参加者は色紙の張り付けや細長い真竹へのセットなどに取り組みました。それぞれ30分ほどで仕上げると、さっそく風通しの良いところで風車を回しました。仲よしグループのお母さんたちは、「玄関に飾ろうか、よく回るのでクーラーがある居間にしようかしら」などと大はしゃぎでした。西上さんによると、近年は指先を使う機会が減っているせいか、玉づくりの過程で指をこむら返りさせる子どもや学生が多いそうです。

岸田代表は「昔は竹で風車やスキー、そうけ(ざる)などを手づくりしていたものです。今は代用品があり、買ってすましているので、竹林は荒れる一方で、やっかい者になってしまいました。竹製品をもっと使えば、竹林の手入れも進みます」と、竹の活用を訴えていました。



風車を仕上げる西上さん



「良いのができました」



こんな風車をつくりました



竹の風車同好会のみなさん

世界で猛威を振るい続けている新型コロナウイルス。その疫病退散と犠牲者の鎮魂を願って、鳥取市の久松山を考える会(亀屋至郎会長)はこの夏、鳥取城跡を「大文字」と「アマビエ」で電飾しました。

鳥取城跡の電飾は東日本大震災(2011年、3月)以来毎年、正月と盆に行っており、これまでに「大」「寿」「夢」「幸」「絆」「和」「笑」などの文字で市民を励ましてきました。元号が変わったときには「令和」を掲げて、お祝いしました。

この夏は地元の久松小学校の児童からの提案で、疫病封じに効き目があるとされる「アマビエ」をつくることにしました。古文書によると、「アマビエ」は肥後国(熊本県)に伝わる海の妖怪で、長い髪に覆われ、鋭いくちばしをもつ半人半魚のような姿です。「当年から6カ年は諸国で豊作が続くが、同時に疫病が流行するから、私の姿を描き写し、その絵を人々に見せよ」と言い残して、海の中に消えていったそうです。

久松山を考える会にとって、絵の制作は初めてです。児童たちも協力して、タテ6m、横3m、LED600球で「アマビエ」をつくりました。「大文字」は25m四方で、LEDは約2000球使いました。会員たちはこの丸3階櫓の石垣に「アマビエ」、久松山頂の天上の丸石垣に「大文字」をそれぞれ設置しました。

点灯式で亀屋会長はホラ貝を吹き鳴らし、久松小5年の河野美凧さんや森原圭音さんと「ふるさと」「見上げてごらん夜の星を」などを合唱し、一日も早い疫病退散を願掛けしました。

久松山を考える会は鳥取城跡の電飾はじめ、久松連山(久松山・雁金山・本陣山)を舞台に鳥取城攻防懐古登山マラソン大会などを開き、史跡のPRと活用に励んでいます。今年は鳥取城攻めの際、秀吉が飲んだとされる本陣山の湧水「関伽(阿伽)水」の場所が見つかり、表示板を設置しました。亀屋会長は「関伽水とは御利益のある、ありがたい水のこと。今後のイベントやお茶会などで、「名水・太閤の水」としてふるまいたい」と話していました。



電飾の点灯式に参加しました



アマビエの電飾を背にホラ貝を吹く亀屋さん



アマビエの電飾



大文字(若桜街道商店街から)

大山町の仁王堂公園で2020仁王堂星取祭がありました。コロナウイルスの感染拡大防止策をしっかりとって、およそ50人が創作落語や星空観察などを楽しみました。

仁王堂公園は山陰道・大山インターから大山に向かって約3km、小高い丘の上にあります。高さ約10mの巨大なカラス天狗が目印です。

星取祭は公園活用プロジェクト(世話人・杉谷愛象さん)が毎年開いているもので、4年目になります。今年は米子市の桂小文吾一座の寄席、地元音楽グループのステージ、地元教育長・鷺見寛幸さんの星空遊覧がありました。

寄席は公園入口の休憩舎が会場です。舞台と客席の間を透明なシートで仕切り、客席もゆったりとっての開催です。出演したのは米子市児童文化センターの落語クラブで学ぶ中学2年生のわらべやだい吾さん、立川談志の孫弟子で小文吾一門に移籍した桂吾空さん、そして6代目小文吾さんです。鳴り物で伯耆江美寿会の上田美風さんが友情出演しました。

小文吾さんは20年前につくった落語「カラス天狗」を現代風に変えて披露しました。「笑いは免疫力を高めます。大いに笑ってコロナを寄せ付けないようにしましょう」と切り出し、酔っぱらいの男が念力・法力・神通力を備えたカラス天狗になりたいと願う物語を演じました。「コロナコロナはトヨタの車、中国生まれのウイルスよ」などと都都逸も入り、客席は盛り上がりました。舞台はいつもの男踊りで締めました。

芝生広場では鷺見さんが夏の星空を解説しました。真南の大山の上にひととき輝く木星、その左下に土星が雲間から現れ、参加者は代わるがわる望遠鏡をのぞき込み、「土星は麦わら帽子みたい」と喜んでいました。公園の真上には織姫などの「夏の大三角」や天の川が見られました。鷺見さんは「仁王堂公園は視界が広く、星空観察に最適なところですよ」とPRしていました。



桂小文吾さん



舞台と客席をシートで仕切った星取寄席



仁王堂公園のカラス天狗

山陰放送の「宮川大助・花子のハテはてな？」の番組収録が米子市の湊山公園と米子城跡であり、鳥取昆虫同好会長の田村昭夫さんが地方に住みます芸人の奥村隼也さんとともに昆虫採集に励み、チョウにまつわる話などを紹介しました。

田村さんは小学生のころから昆虫採集を続けています。60年ほどになります。自宅にはチョウの標本500箱以上、1万点以上あり、それを保管するために、家に鉄筋を入れたそうです。

田村さんによると、昆虫採集を始めたころは、ただ収集することに没頭していたそうですが、その生態を知ることによって大陸移動などの歴史が分かることに気づき、学びも広がっていったそうです。標本の蓄積で歴史や時間が見えてくるというわけです。

今では鳥取県で当たり前に見られるツマグロヒョウモンというチョウがいます。アフリカ北東部からインド、インドシナ半島、オーストラリア、中国、朝鮮半島、日本まで広く分布していますが、関東北部では2002年までは見られませんでした。鳥取県に定着したのは1980年代以降です。地球温暖化もありますが、春の花のパンジーが通年栽培されるようになったのとの関係があるそうです。パンジーが餌になり、ツマグロヒョウモンの定着につながったと見ています。チョウが自然環境の変化を教えてくれた一例です。

さて、収録日の米子市は35度ほどの炎天下でした。チョウが見えると追いかける「田村少年、にとっては、へっちゃらです。長袖、長ズボン姿で米子城跡に登り、2時間ほどチョウを追いかけてきました。その「チョウ果、はナミアゲハ、アオスジアゲハ、ツマグロヒョウモン、ヒメアカタテハ、サトキマダラヒカゲ、ルリシジミなど。

田村さんは「昆虫は待ってくれないので、採集はスピード勝負。次の日も昆虫採集に出かけます」と元気でした。



撮影風景



田村昭夫さん



この日採集できそうな蝶を集めた標本箱(田村さん作成)

南部町教育委員会の夏休みこども短歌教室が天満庁舎横の公民館であり、鳥取県歌人会会長の倉益敬さんから、楽しみながら短歌を作る「カンタンタンカ」の極意を学びました。作った歌は県内各地の短歌大会に応募します。

短歌教室は夏休みの恒例事業で、今年は2日間あり、町内の小学生7人が参加しました。事務局によると、新型コロナウイルス感染予防のため町内の行事が軒並み中止になっているせいか、例年より多い参加者になったといえます。

倉益さんは、子どもたちに夏の思い出や印象などを用紙に書き込んでもらいました。短歌であることや文字数(31文字)などを気にしすぎず、伸びのびと思ったことを書くよう指導しました。

それでも、なかなか思いつかない子どももいて、子どもたち同士でああでもない、こうでもない。「今年の夏休みは何もなかった」などのぼやき声が聞こえてきます。コロナの影響で夏休みも楽しさ半減、宿題に追われている様子です。「思い出でなくても、いつもの暮らしを文章にすると短歌が浮かぶよ」と、名人のような言葉で友達にアドバイスする子どももいました。

子どもたちは1時間ほどかけて書き上げ、倉益さんが子どもたちに質問し、話をしながら添削をしていきます。子どもたちの自由な発想といろいろな思い出話を聞きながら、倉益さんも楽しそうです。こうして2時間ほどで全員が3首前後の短歌をつくることができました。

倉益さんによると、子どもたちの詠む短歌は大人とは違い、発想が豊かで柔軟、素直で面白いそうです。この短歌教室から毎年のように県内各地の短歌大会で入賞作品が誕生しているといいます。

子どもたちは、2日間で一人6首ほど短歌をつくりました。そのなかから、倉益さんが選定し、第58回米子市合同短歌祭、第49回鳥取県民短歌大会、第9回山上憶良短歌賞などに応募する予定です。今年も入選の吉報が楽しみです。



生徒と倉益さん



教室風景



夏の思い出を話し合うこどもたち

2020年8月17日

鳥取市の愛真幼稚園でマジックショーがあり、地元マジシャンの山下眞一郎さんがハト出しや花出しなどを披露し、子どもたちは大喜びでした。

愛真幼稚園は毎年、預かり保育の期間を利用して、園外で夏休みの思い出づくりをしています。今年は新型コロナウイルスの影響で子どもたちを連れて出かけることが難しいため、園内でマジックショーを楽しむことにしました。

山下さんもコロナウイルスのため、マジック披露の場がなくなり、今年初の舞台になりました。マジックは事前準備が肝心です。開演の1時間ほど前に会場に入り、洋服にハトや小道具を仕込んでいきます。山下さんの気がかりは、子どもたちたちが楽しく反応してくれるか、持ち時間の30分を飽きないで集中してくれるかです。

マジックショーが始まると子供たちはにっこにこで、山下さんの手元をじっと見つめます。いきなり白いハトが出てきて、会場を飛び回ると、子どもたちはもう大騒ぎ。山下さんのマジックに目はくぎ付けです。山下さんはスカーフやスティックから次々に花を取り出し、カードを使って子どもたちと掛け合います。子どもたちは山下さんの質問に「赤ー！」「5本ー！」などと元気のよい大きな声で答えます。水が新聞紙に注ぎ込まれ、出てきた水が赤色に変わっていると、「何で？」「どうして」と盛り上がりました。

子どもたちの反応や時間を心配していた山下さんでしたが、ショーは30分では足りないほど。子どもたちは名残惜しいようでしたが、最後に正座をして山下さんにお礼を言い、ショーは終わりました。子どもたちにとって、今年は外出がなかなかできない窮屈な夏になっていますが、今回のマジックショーは格別な夏の思い出になったようでした。

山下さんによると、いつもはおじいさんやおばあさんを相手にマジックショーをすることが多いそうですが、子どもたちは反応が良くて、やっていて面白く、タネを一生懸命さがそうとする、その掛け合いが楽しいのだそうです。



山下眞一郎さん



マジックを真剣にみる子どもたち



背広から鳩がでてきて子どもたちも大盛り上がり

2020年8月20日

「わたしと小鳥と鈴と みんなちがってみんないい」—南部町の緑水湖畔にある祐生出合いの館で、地元書家・森田尾山さんの書展「金子みすゞに憑(つ)かれて」が開かれています。8月24日まで。

金子みすゞ(1903～1930年)は、昭和の初めに活躍した童謡詩人です。10代半ばから詩をつくり、512編の詩を残して、26歳で命を絶ちました。代表作は「私と小鳥と鈴と」「大漁」「こだまでしょうか」など。自然とともに生き、小さな命への優しいまなざしが、みすゞの詩の原点といわれています。

森田さんは15年ほどかけて、みすゞの詩を書き溜めてきました。約70点。そのうち40点を今回発表しました。

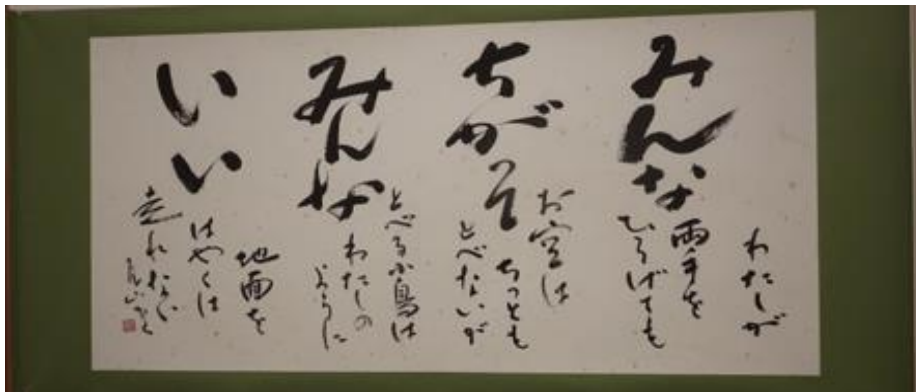
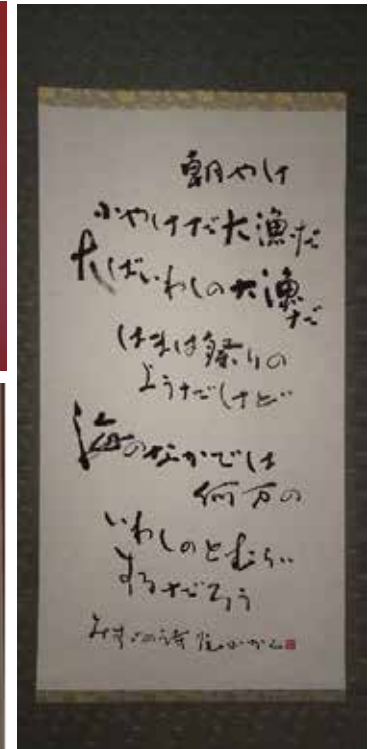
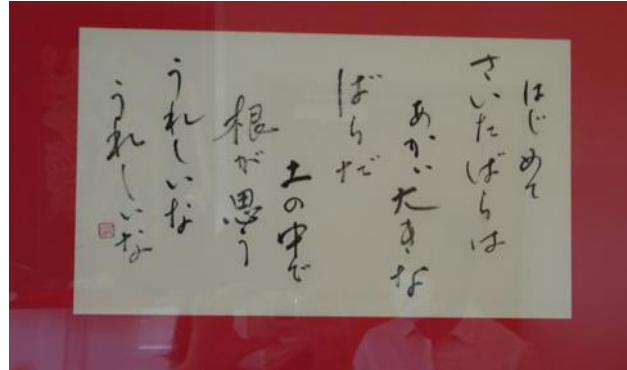
森田さんがみすゞにひかれたのは「ばらの根」という詩です。その一部です。「はじめてさいたばらは、あかい大きなばらだ。土のなかで根が思う『うれしいな、うれしいな』」

花を見れば、咲いている花にだけに目を奪われがちです。しかし、この詩では見えないバラの根っこにも目を向けています。みすゞの見えないものを感じ取り、ものを見る深さに感動したそうです。

森田さんは言います。「それは他の詩でも同じこと。相手の思いを探り、相手の深い思いに気づくことができる詩ばかりです」。すっかり憑かれています。

森田さんはその詩を書で表現しようと、詩を解釈し、詩に合わせて作品の大きさ、字の書きぶりや体裁、墨の濃さも変えました。無から有を生む作業で、とても大変だったそうです。

森田さんは「続けることが大切。1つ終わると新たな発見があり、やりたいことも出てくる。失敗を恐れず、挑戦してみなければ、次が浮かばない」と。森田さんの挑戦はこれからも続きます。



森田尾山さんと金子みすゞ展の一部

湯梨浜町の公民館で8～9月の2カ月間、子どもたちの木工教室「大工さんに学ぼう！」が開かれています。10会場で延べ180人がイス・本棚・道具箱をつくります。上浅津農事集会所であった木工教室に伺いました。

鳥取県内の大工、左官、板金、建具など家づくりに携わる職人さんでつくる県建築技能近代化協会(池田勝美会長、約1200人)が、県産材でつくった木工体験キットを湯梨浜町教育委員会に贈ったのがきっかけで教室開催の運びになりました。子どもたちに「木」の良さや家づくりの仕事を知ってもらおうというのが狙いです。

この日、参加したのは小学1年生～中学1年生の14人です。中部建築工務士会の北村浩さんら4人と「大工の卵」の12人が、マンツーマンでくぎの打ち方を指導しました。同町南谷の中本凜夏・鈴花ちゃんは姉妹で参加し、そろって道具箱をつくりました。てきぱきと仕事をした鈴花ちゃんは、「楽しかった。また、カナヅチを持ちたい。道具箱にはおもちゃを入れます」と満足そうでした。

子どもたちはものづくりのほかに、「大工の卵」のお兄さんたちと一緒に高さ3mのジャングルジムも組み立てました。三徳山や清水寺の舞台のように、くぎを使わず、くさびを打ち込んで、やぐらを組んでいくことも学びました。

池田会長は「全国で若い大工が減っています。大工技術が継承されなければ、災害があっても家の修理ができなくなり、山の木が使われず、山が荒れていきます。持続可能な社会にするためにも、一人でも多くの大工をつくらなければなりません」と危機感に燃えていました。



ジャングルジムづくり(写真中央は、くさびの打ち方を指導する池田会長)



懸命にくぎを打ちます



良いのができました

新型コロナウイルスで延期していた米子市・車尾公民館の生涯学習ふれあい学級が開講し、地元作家の廣澤虔一郎さん(同人誌・米子文学代表)が「車尾の歴史」について話しました。このなかで廣澤さんは「吉川広家が古代の郷名・半生を米生に書き改めたのが米子命名の始まりではないか」と持論を紹介しました。

平安時代の百科事典・和名抄によると、古代の伯耆は河村・久米・八橋・汗入・会見・日野の6郡あり、会見郡には日下・細見・美濃・蚊屋・千太・会見・半生・安曇・巨勢・星川・天万・鴨部の12郷ありました。鳥取県史には、それぞれの郷があった会見郡郷推定図を載せています。境は「夜見の嶋」と呼ばれ、平安時代に弓浜半島でつながったそうです。

このうち、会見郷や半生郷が今の米子市の中心地として発展していきます。角川日本地名大辞典によると、半生(はにゅう)郷の由来は米子市美吉の飯生(いいけ)村が遺称地で、瓦や土器になる粘土が出土していたからではないかと指摘しています。しかし、半生は米生(よねう)の誤記で、米の生産が盛んだったことが由来とする意見もあります。

粘土か米か。廣澤さんは「確かな根拠はないが、米子湊山に築城し、月山富田城から本拠地を米子城に移した吉川広家が、半生をわざと米生と書かせたのではないか」と推理しています。「正しく美しい文字が書ける筆順字典」(吉田琴泉編著)によれば、「半」を崩し文字の草書体で書けば、楷書と一部筆順が違うため、「米」にも読めるのです。湊山への築城の際には、大山寺の名僧・豪円和尚の祈禱もあったと伝えられており、「好字」への変換があったとしても不思議ではありません。

廣澤さんは車尾の大庄屋で日野川の治水や新田開発に尽くし、池泉観賞蓬莱式庭園で有名な深田氏の歴史も紹介しました。

それによると、深田氏は鎌倉時代に近江から奥日野の印賀に移り、やがて米子市上新印で豪農になったといいます。深田家には後醍醐天皇が隠岐島に流される際、立ち寄られたという逸話が伝わっています。その時の天皇を乗せた小車(尾車)にちなんで、車尾という地名が付いたともいわれています。が、できすぎた話です。天皇は安来港から隠岐島に渡っておられるので、安来港までは天万―荒島を結ぶ古道が使われたようです。天皇が深田家に立ち寄られ、くつろがれたのは、上新印の館と庭園だったのではないかといいます。

このほか廣澤さんは、車尾が弓浜部や弓浜半島の水源「米川」の起点になっていることや、日本有数のうまい水「米子の水」を届ける市水道局の水がめになっていることなど、ジゲの自慢話も紹介しました。



廣澤虔一郎七さん



会見郡郷推定図

日野・法勝寺川の中土手にある
米川頭首工完成記念碑

子どもたちに里山や自然の大切さを伝えている三朝町のNPO法人・里山地域研究会(田栗泰典理事長)は町内の竹林で竹を切り、その竹筒でご飯を炊き、カレーライスにして食べる「みささ青空体験塾」を開きました。子どもたちと保護者、スタッフ合わせて60人余りが参加しました。

里山地域研究会が運営する「みささ青空体験塾」(吉田定夫塾長、44人)は2012年から毎月、田植え・稲刈り・川遊び・バーベキュー・そり遊び・そば打ちなどを楽しんでいます。今年はコロナの影響で、5月から活動を再開しました。この夏休みは、キャンプ気分を体験しようと、竹筒でご飯を炊くことにしました。

子どもたちは長靴にマスク姿で、同町若宮の裏山の竹林に入り、竹の伐採を体験しました。「竹を倒す側に3分の1ほどの切れ込みを入れ、のこぎりはその裏側、2cmほど高いところから入れましょう。竹が割れたり、裂けたりしなくなります」と、吉田塾長のアドバイスを聞いて竹を切り倒しました。

会場を桜つつみ公園に移し、竹コップづくりの後、太い竹筒20本ほどを使って、ご飯を炊きます。それぞれの竹筒には3合の米と水。飯ごうなら20分ほどで炊き上がる場所ですが、竹なので50分。吉田塾長は火の焚き付け方について、新聞紙—段ボール—小枝—マキの順に燃やし、火を絶やさぬよう管理することの大切さを説きました。

竹筒の底が焦げ、火が移り始めると、出来上がりです。かまどの火を抜いて蒸らすころには、里山地域研究会の女性陣が特製カレーを持ち込んでスタンバイ。子どもたちは竹で作った竹皿にご飯を盛ってもらい、カレールウをかけてもらって、仲良くいただきました。竹筒カレーライス、野性的でおいしかったです。

里山地域研究会のメンバーは「準備は大変ですが、子どもたちの笑顔や喜んでくれている姿を見ると、こちらが元気になります。我々の活動は、子どもたちがエネルギーです」と話していました。



竹林に入り、竹を切りました



竹筒でごはんづくり



長い竹皿で、みんな仲良くカレーライスを食べました

鳥取市尚徳大学の講座収録が市文化センターであり、小山富見男さん(鳥取地域史研究会長)が「天変地異と防災の日」について話しました。このなかで小山さんは「災害は忘れる間もなくやってくる」と、防災の心構えを説きました。

鳥取の主な大地震は、1943年(昭和18年)9月10日の鳥取震災▽2000年(平成12年)の鳥取県西部地震▽2016年(平成28年)10月21日の鳥取県中部地震—などです。このうち、死者が出たのは鳥取震災です。震源は鳥取市野坂川の中流域で、ごく浅いところでの発生とあって、市内中心部の家屋はほとんどが倒壊しました。死者1,083人、全壊家屋は7,485戸にのぼりました。

小山さんによると、気象庁は大きな災害が起こると、その名称を定めます。目的は災害復旧の円滑化と、その経験や教訓を後世に伝えるためです。物理学者の寺田寅彦は「災害は忘れたところにやってくる」と言いましたが、それは記憶ではなくて、「教訓を忘れたところにやってくる」というのが本意だったようです。

地震列島・日本では、いつ、どこで地震が起こるかわかりません。1923年(大正12年)の関東大震災は未曾有の被害をもたらしました。この教訓を忘れないため、神奈川県には139もの慰霊碑などが残されています。小山さんは「鳥取震災の教訓を忘れないよう、鳥取でも後世に伝えるものをもっと残し、保存すべきではないか」と訴えます。

慰霊碑といえば、鳥取市の久松連峰の雁金山に平和祈念塔があります。1959年(昭和34年)に建てられました。7年前の鳥取大火がきっかけです。鳥取大火は鳥取城の攻防戦や鳥取震災などで犠牲になった霊が成仏できずにいるから発生したのではないかという意見があり、災禍の絶滅を念じて平和祈念塔が建てられたといえます。小山さんは「新型コロナウイルスの感染が鳥取県で広がらないのは、この塔のおかげかも」と考えています。

小山さんは「心の準備ができない災害には、日ごろからの備えが必要。災害のニュースは我が身に置き換えて考えましょう。一人ひとりの知識が身を守ります。防災、減災は①想定にとらわれない②逃げられるところまで逃げる③真っ先に逃げることを恥じない—が3原則です。そんな行動が多くの人を救います」と、心構えを伝えました。



鳥取震災 日赤病院病棟倒壊状況
(鳥取県立公文書館提供)



鳥取震災 千代川右岸亀裂状況
(鳥取県立公文書館提供)



小山富見男さん

米子市の和田公民館で歴史講座があり、鳥取県高齢者大学ことぶき学園の卒業生ふたりが講演し、「古事記にあるように山陰は日本発祥の地。ゆかりの地を訪ねましょう」と訴えました。

米子市の榎野省吾さんと境港市の島谷修さんの2人で、ともにまち歩きガイドで活躍中です。趣味は同じ「歴史と旅」とあって、8年ほど前から一緒に古事記や後醍醐天皇、尼子一族、芋代官などのゆかりの地を訪ね、写真に収めています。

このうち古事記は日本最古の歴史書です。その3分の1は山陰を舞台にした神話でできています。ふたりは、それらの神々を①伊邪那岐・伊邪那美の神②天照大御神・須佐之男命③大国主神④事代主神—の4編にまとめ、各地で紹介しています。

この日の講座は1時間半ありました。国土を造ったとされる「伊邪那岐・伊邪那美」の巻です。榎野さんは日本で最初の夫婦のまぐわいを丁寧に語り、小鳥のセキレイの交わりが、そのモデルになったと紹介しました。そうしてできたのが、淡路島・四国・隠岐島・九州・壱岐島・対島・佐渡島・本州の大八島。続いて瀬戸内の吉備児島・小豆島・大島などが次々に誕生していったそうです。

山陰ゆかりの地では、伊邪那美の埋葬地が岩坂陵墓(松江市)、比婆山(安来市)、母塚山(南部町)、御墓山(日南町)などに伝わっています。伊邪那岐が黄泉の国の軍勢に追われ、脱出した黄泉比良坂は松江市の揖屋神社近くにあり、「桃を投げて逃げ切った」といいます。けがれた伊邪那岐は禊(みそぎ)をし、左目を洗って天照大御神、右目を洗って月読命、鼻から須佐之男命が誕生しますが、その禊をしたところが島根半島の千酌海岸です。天照大神が隠れた天の岩戸は、蒜山高原の茅部神社近くにあるそうです。

ことぶき劇団のふたりは、「私たちのふるさとは日本発祥の地。もっと誇りを持ちましょう。そのためには、現地を訪ねてみましょう。いつでもご案内します」と、古事記の故地めぐりを勧めていました。



榎野省吾さん



島谷修さん

天の岩戸のふもとにある巨石



大山町の中山公民館で樹脂粘土の体験講座「花の壁掛けを作ろう」があり、粘土細作家の亀田洋子さんが指導しました。10人が参加しました。

樹脂粘土はきめの細かいクラフト用の粘土です。自然乾燥させると、陶器のように硬くなりますが、なめらかな材質なので、指でこねたり身近な道具で成型すると、思い通りの形が作れるため、だれでも作品づくりにチャレンジできます。

講座で作ったのはバラの花の壁掛けです。参加者は初めのうちは、なめらかな樹脂粘土の扱いに苦戦しましたが、亀田さんの手助けもあって、全員が作品を完成させました。

「バラの花びらを作るところが一番難しかった。少しの力の入れ具合で出来栄が全く違うので、とても苦労しました」「粘土のためか、同じ見本で作っても、それぞれの仕上がりが違い、個性があるので面白い」などの感想が聞かれました。

亀田さんは「粘土は練り直して、やり直しができるので、自分好みのものが作れます。いろいろな道具や作り方のバリエーションもあるので、楽しいし、飽きないですよ」と話し、花や果物をモチーフにしたアクセサリーづくりなども勧めていました。

講座のなかで亀田さんは一人ひとりのテーブルを回り、「難しいと思うから難しい。とりあえずやってみるのがいい。何事もチャレンジ」とアドバイスしているのが印象的でした。



亀田さん(左)と参加者のみなさん



粘土体験講座



バラの壁掛け完成！

2020年8月29日

とっとり伝統芸能まつり(鳥取県主催)が鳥取市のとりぎん文化会館であり、打吹童子ばやしなど6団体が、無観客のなかで精いっぱいの芸を披露しました。「全国どこからでも観覧でき、楽しめるように」と、まつりはインターネットで生中継されました。

とっとり伝統芸能まつりは11回目です。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、初の無観客開催、インターネットによる全国配信になりました。「鳥取の伝統芸能を全国に届け、鳥取県出身のみなさんに懐かしんでいただきたい」との願いです。コロナ禍を逆手に取った試みです。

出演したのは、①下蚊屋荒神神楽保存会明神社(江府町)②打吹童子ばやし(倉吉市)③浦富麒麟獅子舞保存会(岩美町)④さいとりさし踊り保存会(三朝町)⑤しゃんしゃん傘踊り・桜道里(鳥取市)⑥河崎花がさおどり保存会(米子市)の6団体。裏方含めて約100人の参加です。いずれの出演団体も久々のイベント、ステージとあって、熱が入りました。

このうち、小学生の和太鼓集団・打吹童子ばやしは発足28年目です。倉吉打吹まつりに欠かせぬ存在です。村田速実さんが指導し、団員は現在25人。オリジナル曲14曲のうちの3曲で鼓魂(こだま)組曲をつくり、およそ9分30秒、一糸乱れぬ、迫力のある演奏を披露しました。演奏後、6年生の西谷梨世・石川琳子さんは「今年は息を合わせて演奏することが少なく、寂しい思いをしていました。やっと演奏できました」と、すっきりした表情でした。

三朝町のさいとりさし(県無形民俗文化財)も熱演でした。「天下御免」の鑑札を持つさいとりさし(刺鳥差)が鳥をとる様子を狂言風に踊って見せるもので、山内謙一さんら5人が演じました。見せ場は三徳山の住職とのこっけいな掛け合いです。この場面を演じていた先人が亡くなったものの、若い山内有二さんが跡を継ぎ、三朝温泉の「あったか座」で演じています。後継者が見つかって、ひと安心です。

山内代表は「三朝温泉はコロナで春に休業したものの、お客さんが戻らず、苦戦が続いています。私たちも出番なしです。本日は久しぶりに演じることができて、元気になりました。三朝温泉においての際は、あったか座にお立ち寄りいただき、お声をかけてください」と話していました。



打吹童子ばやし



2頭で舞った浦富の麒麟獅子舞



三朝町のさいとりさし



下蚊屋荒神神楽の八重垣能

戦国時代、鳥取市の鹿野城主だった亀井茲矩を顕彰する「亀井さん検定」ができ、その入門編、鹿野城下町をめぐるクイズラリーが9月12日からスタートします。今後、初級・中級・上級の検定が実施される運びです。

亀井武蔵守茲矩(かめいむさしのかみこれのり、1557～1612年)は、琉球守とも呼ばれた戦国武将です。山陰の覇者・尼子家を復活させるため、羽柴(豊臣)勢に加わって戦い、鹿野城主になりました。亀井家は江戸時代の初め、島根県津和野町にお国替えになります。鹿野にいたのはわずか37年間。しかも400年以上前の話です。しかし今もなお、西因幡(旧気高・青谷・鹿野町)の人びとは、親しみを込めて「亀井さん」と呼んでいます。

「亀井さん」は小藩主ながら、豊かなクニづくりに励みました。領内潟湖の干拓や千代川左岸の水田開発、夏泊の海女漁やショウガ、菅笠生産の導入など産業おこしに熱心でした。今日の「敬老の日」を先取りするイベントなどを手がけ、因幡の白うさぎ神話を伝える白兔神社も創建しました。海外貿易にも熱心で、南海に漕ぎ出す進取の武将でした。その名残がお城の名として伝わっています。

今も地域に受け継がれている「亀井さんイズム」。これをさらに発展させようと、令和元年に西因幡の歴史ファンや観光関係者などが集まって、亀井さん検定実行委員会(廣田敬祐委員長、10人)が発足しました。

委員会によると、「亀井さん」ゆかりの問題を100問ほど作り、入門編、初級・中級・上級検定を行い、「亀井さん」と西因幡を売り出すことにしています。道の駅・西いなば気楽里の徳岡義広駅長は「検定を通じて、歴史にとどまらず、亀井さんや領民たちはどのようなものを食べていたのかなどを調べ、地域を再発見していきたい」と期待しています。



亀井茲矩公のキャラクター・これのり君



鹿野城下町

鳥取市の青谷町高齢者教室が町総合支所で開講しました。新型コロナウイルスの影響で5カ月遅れのスタートです。残暑厳しい9月の開講をウクレレ演奏で祝いました。

ウクレレを演奏したのは、ハッピー・ウクレレ・ハーモニー(小幡潔代表)のみなさんです。いつもは鳥取市・若桜街道にあるベーカリーマーケット「こむ・わかさ」で歌声喫茶を運営していますが、今年はコロナ禍のため、開店できずにいます。ステージに立つのも、今年初めてといたします。こちらでも活動再開です。

とはいえ、まだまだ油断大敵です。開講式に出席できたのは受講生70人のうちの30人ほど。全員マスク着用。ハッピー・ウクレレ・ハーモニーの6人もマスク姿です。得意の歌なし、演奏ばかりのステージです。

演奏したのは「カイマナヒラ」「コーヒールンバ」「上を向いて歩こう」「荒城の月」「さくらさくら」「高原列車は行く」「コンドルは飛んでいく」など14曲。1時間余りにわたって、国際色豊かなコンサートが続きまして。

受講生は音楽に合わせて肩をゆすったり、手をたたいたり、マスクの下でハミングしたり。久々の集いを楽しみました。盛り上がったのは朝ドラ「エール」の主人公・古関祐而さん作曲の「高原列車は行く」。司会の石谷安世さんのリードで、受講生は曲に合わせて大きく手をたたいたり、体をゆすって、ウクレレ健康体操を体験しました。

小幡代表は「練習時間が取れず、見苦しいところもあったが、喜んでいただけて何より。歌声喫茶も早く再開できるよう、工夫してみます」と、反応の大きさに喜んでいました。



ハッピー・ウクレレ・ハーモニーのみなさん



マラカスを振る小幡潔代表



青谷町高齢者教室はウクレレ演奏で
スタート(青谷町総合支所)

鳥取市の若葉台地区自主防災会連絡協議会(山田義則会長)は認知症高齢者などの捜索模擬訓練を行い、住民86人が参加しました。年々、行方不明者探しが増えており、住民の捜索協力が広がるよう初めて訓練しました。

鳥取県の調べによると、令和元年の県内の行方不明者は83人で、うち認知症高齢者は40人だったといえます。年々、増えているそうです。鳥取市によると、身近な人が行方不明になったら、まず警察に連絡し、2次被害を防ぐためにも①捜索する人の把握②捜索者の水分、携帯、小銭を欠かさぬように—ということでした。

訓練は自主防犯パトカーが青色灯を点滅させながら若葉台地区を巡回放送し、始まりました。「白色のシャツに黒色のズボン姿で、身長170cm前後の70歳くらいの男性を見かけたら、〇〇まで連絡するとともに、積極的に声掛けをしてください」。道が分からなくなった認知症高齢者役も町内を歩きました。

その認知症高齢者役に訓練参加者は代わる代わる「どこにいきよーんさるだ?」「どこだいな、あっちかえ?」「何丁目ですか?」などと問いかけ、声を掛けました。

訓練の後、鳥取市の認知症地域支援推進員の講習がありました。それによると、声をかけるときはゆっくりと近づき、相手の視野に入ってから声をかけ、怒ったり、否定したりせず、相手のペースに合わせてゆっくりと返事を待ち、急に腕をつかんだり、身体に触れたりしないように—ということでした。また、通報した後も警察が来るまで一緒に待ち、無理に座らせようとせず、程よい距離で見守る。一番不安なのは行方不明者本人なので笑顔で対応しようとして指導していました。

訓練に参加した認知症高齢者役の方は「後ろから話しかけられるのは怖いし、急に腕に触られたりすると、どこかに連れていかれそうで怖かった」、声掛けをした方は「なんと声を掛けたらよいか迷った。背後からではなく、正面に回り、目をみて話をするように気を付けた」「近所の人にふだん接するように話しかけたので、難しくはなかった」などと感想を話し合っていました。山田さんは「初めて捜索訓練に取り組んだが、参加者が多く、住民も関心があることがわかったので、次につなげていきたい」と話していました。



推進員による講習



声掛け訓練中

鳥取市青谷町の勝部岩力踊り保存会(長谷川正昭会長)は、「HOW TO 勝部岩力踊り」のDVDをつくり、県立福祉人材研修センターのビデオライブラリーに寄贈しました。

勝部岩力踊りは江戸時代の初め、池田光政が鳥取城や城下町の建設、改修を進めた際、勝部地区の農民が木材や石材を運ぶ作業に駆り出されましたが、そのときに歌われた歌や踊りが始まりといえます。いまは青谷町澄水集落で盆踊りとなって伝わっています。ざっと400年の歴史を誇ります。

勝部岩力踊りは踊りと歌と太鼓でできています。踊りは手踊りで、やぐらを囲み、歌と太鼓に合わせて踊ります。盆踊りになっているものの、鎮魂の意味はないので祈る動作はありません。歌は威勢よく「ドッコイ、サッサ」の掛け声が入り、小刻みなバチの響きが特徴です。勝部谷特有の板状の安山岩を切り出す音を表したものとわれています。

長谷川会長によると、35年前の「わかとり国体」(昭和60年)で作られた「青谷ようこそ音頭」が継承されず、廃れてしまったといえます。一度失ったものを復活させるのは難しい話です。勝部岩力踊りもその二の舞にならぬようにと、DVDを作って郷土の伝統芸能を残すことにしました。

DVDには「勝部岩力踊りの歴史」「住民が夏祭りで踊っている様子」「踊り方の手引き」などを収録しました。歌い手、踊り手、太鼓目線で手引きが作られており、このDVDがあれば勝部岩力踊りがマスターできる仕組みになっています。長谷川会長は「岩力踊りが今も続いているのは、踊りに魅力があるからだと思います。後世に伝え、残していくためには、その魅力を発信することが大切」と語っています。

勝部岩力踊りに興味を持たれた方、同じように伝統文化の継承に尽力されている方は、このDVDをご覧ください。県立福祉人材研修センターの「ビデオライブラリー」は、DVD250枚、VHS319本を無料で貸し出しています。



勝部岩力踊りのDVDと長谷川さん



勝部岩力踊り

2020年9月16日

鳥取市の米里地区公民館でヨーガの体験会があり、ヨーガ講師の谷口知佐子さんが「心と体の調和」について指導しました。公民館の仲間づくり事業のひとつで、11人が参加しました。

谷口さんは12年前に鳥取市にUターン以来、日本ヨーガ禅道友会(本部・京都市)の認定講師として活動しています。現在、5カ所でヨーガ教室を開催中。「体操のヨーガでなく、ヨーガの体操を」がモットーです。

谷口さんによると、ヨーガの体操は筋肉の伸長と弛緩を繰り返し、心と体を整えるのが目的なので、難しい型や競い合い、無理は無用だそうです。①ゆっくり②呼吸に合わせて③自分の体を意識して④緊張の後の弛緩を大切に味わう—が体操の4原則で、この体操と呼吸と瞑想で“心身一如、”を目指します。弛緩を味わうひとは、ちょうど料理の味見に似ているといいます。このとき、「すっきり、おだやか、ほっこり」が感じられたら、目標達成です。

さて、実践です。「肩が回らなくてつらい」「ヒザや腰がピリピリして痛い」「お医者さんから病気ではない、加齢だと言われた」など、体の悩みを抱えたお母さんたちが、持参のマットに寝転び、ヨーガ体操を体験しました。大の字になって手足を思い切り伸ばしたり、すぼめたり。おなかを風船のように膨らませたり、縮めたり。手や足の指も一本一本、伸ばしたり、曲げたり。

谷口さんが「鳥取県は100歳以上の高齢者数(人口10万人当たり)が全国3位だそうです。2位になる目標ができました。私たちも、その仲間になりましょう。そのためには、一人でトイレに行けるようにしなければなりません。足だけでなく、足の指もマッサージしてやりましょう」とアドバイスすると、参加者は大きな返事で盛り上がりました。



谷口知佐子さん



ヨーガ体験会

鳥取市の県民ふれあい会館でランチタイムコンサートがあり、岸本みゆうさん(岩美町)が指導するオカリナグループ「あか音(ね)ぐも」が癒やしの音楽を届けました。

岸本さんはオカリナ奏者で、鳥取市や倉吉市などでオカリナ教室を主宰し、100人ほどに教えています。あか音ぐももその一つで、とりぎん文化会館で月2回、手ほどきしています。この日はメンバー8人のうち4人が出演し、コロナ禍で遠ざかっていたステージを楽しみました。

演奏したのは13曲。「サモア島の歌」「おお牧場はみどり」「サリーガーデンズ」など世界各地の心地よい音楽はじめ、「人生のメリーゴーランド」「君をのせて」のジブリ・メロディーを紹介しました。岸本さんはアルトとソプラノのオカリナを使って、映画音楽の「Summer」(菊次郎の夏)や「My heart will Go On」(タイタニック)のほか、鳥取ゆかりの「赤とんぼ」を披露しました。会場の県民ふれあい会館玄関ホールには、オカリナの演奏仲間などが集まり、立ち見が出るほどでした。

岸本さんによると、オカリナは南米で生まれ、イタリアで楽器になり、その澄んだ音色で癒やしの楽器と呼ばれています。「聴くだけでなく、吹くだけで、気持ちが落ち着く、魅力のある楽器です。ピアノのように、すべての指を使いますが、すぐ吹けるようになるので、お勧めです」と話していました。挑戦したい人は岸本さんへ(090-8361-2701)。



岸本みゆうさん



「あか音ぐも」のみなさん



立ち見もでたランチタイムコンサート

近代稲作の父・中井太一郎の顕彰運動を続けている倉吉市の小鴨地区振興協議会は、その運動内容をまとめた冊子「太一車」を発行し、販売を始めました。冊子は太一郎の功績が分かるとともに、地域おこし運動のアイデアにあふれ、評判になっています。

中井太一郎(1830～1913年)は小鴨地区の出身で、江戸時代の末期から明治時代にかけて、米づくりに一生を捧げた人です。強い稲づくりと米の増産のため、正条植えを普及し、日本に美しい田園風景をもたらしました。また、米づくりの難敵、雑草取りを克服するため、回転式中耕除草器「太一車」を開発(明治25年特許登録)、米づくり農家を重労働から解放しました。

中井太一郎のすごいところは、60歳から亡くなるまで(83歳)、全国行脚してこれらの成果を農家に指導して回ったことです。著書には米づくりの技法などをまとめた「大日本稲作要法」があります。このときの仲間・帝国農家結合が母体になって、いまのJAの前身組織ができました。まさに生涯現役です。

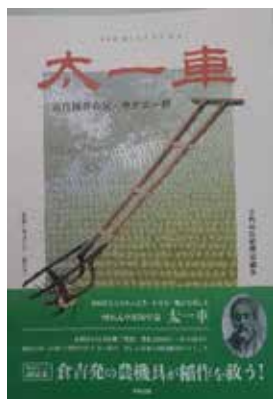
小鴨地区振興協議会は2010年から地域挙げて、郷土の誇りである中井太一郎の顕彰運動に乗り出し、マンガや紙芝居、創作劇などで紹介するとともに、「鳥取県を舞台に！ 歴史大河ドラマを推進する会」に立候補。2019年に2度目の応募でドラマ候補として選ばれ、全国民に知ってほしい、自慢したい県人のひとりになりました。ドラマ化実現に向けて、新たな活動が始まっています。

このほか、中井太一郎ゆかりの地域おこしの成果は、地場産の米で作った五平餅「太一のき餅」が誕生したほか、市公民館祭などでは田の草取りの歌「太一車」(英訳付)を作って発表し、これをベースに「ころころ草取り物語ペープサート一座」もできました。地域の若手は「タイチグルマーズ」というバレーボールチームを作って、地域おこし運動にひと役買っています。また、「太一車」は食用増産に励むアフリカや中南米などで利用されており、JICA(国際協力機構)との交流も続いています。

冊子「太一車」をまとめた太一車研究委員会(北村隆雄委員長)は、「地域の先人を顕彰するうちに、地域が元気になりました。私たちの取り組みが、県民の参考になればと思い、活動記録をまとめました」と話しています。「太一車」はA5判108頁、700円(税別)です。



北村隆雄委員長(右)と
「太一車」を持つ廣谷啓一さん



太一車



「太一車」出版報告会

鳥取市の玄関、鳥取駅前で9月の2日間、青い鳥コンサート2020(実行委員会主催)がありました。夏の恒例イベントですが、今年はコロナ禍のため、秋に延ばしての開催です。シニアバンクに登録する2つの音楽グループもエントリーしましたが、最終日が雨で中止になり、初日の1組だけが出演しました。

青い鳥コンサートは音楽流れるうるおいのあるまちづくりを目指して、1992年に誕生しました。地元新聞社が音頭を取り、鳥取市に本社がある銀行が協賛して、駅前の風紋広場を会場に6～8月の土曜夜市に開かれ、しゃんしゃん祭とともに鳥取の夏の風物詩になっています。

いま運営は市民主体になり、イベント日程も短くなりましたが、「青い鳥の灯を消すな」と、音楽グループみなさんの「手弁当」での挑戦が続いています。実行委員会の藤原博史委員長は「資金や人手で苦労していますが、2年後には30周年になります。お客さんも出演者も、マスク外して笑顔で交流できる音楽祭になるよう、がんばります」と、力強く話していました。

さて、今年は26団体がエントリーしました。初日はバードハット、最終日は風紋広場が会場です。シニアバンクからは、紅のくれぐれも乙女(阪本いづみ代表)とザ・ブルーバース(尾崎裕崇代表)の2組。ただ、最終日は強い雨で中止になり、残念ながらブルーバースの「おじさんGS曲」は聞けずじまいでした。

初日は出演者のほとんどがコロナ禍で久々のステージとあって、緊張しながらも、発表できる舞台を喜んでいました。また、チアダンスやパフォーマンスのグループも出演し、会場はカメラやVTR撮りでにぎわいました。主催者によると、観客は約1千人といえます。

紅のくれぐれも乙女は「私の彼は左利き」「上を向いて歩こう」など4曲をかわいらしく歌い上げました。メンバーは5人、うち60歳代が3人です。「グループ名が気になりますね」と向けると、「「紅の乙女」にしよとしたところ、冷やかされたので、負けじと、念押しのつもりで付けたネーミング」だそうです。乙女は強くなるのです。がんばれ！



歌って踊って、紅のくれぐれも乙女



チアダンスで盛り上がる青い鳥コンサート(バードハット)



会場はカメラの放列で大にぎわい

琴浦町の花見瀉墓地にある赤碕塔が陰陽師・安倍晴明の供養塔だったことが分かり、命日のこの日、供養祭がありました。新たな晴明ゆかりの地の誕生で、厄払いや占いの聖地として注目されそうです。

花見瀉墓地は赤碕港の近く、日本海に沿って広がり、2万余りの墓があります。自然発生墓地では日本最大級とされ、観光地にもなっています。その一角に高さ約3mの石造の宝塔が2つあり、そのうちの1つが赤碕塔として鳥取県の保護文化財になっています。

地元の郷土史家・小谷恵造(よしぞう)さんは一昨年、これらの宝塔2基は平安時代の陰陽師の供養のためにつくられたことを古書研究から突き止め、発表しました。船上山や大山で修行する修験者たちが建てたそうで、赤碕塔が安倍晴明(921～1005年)、もう一つが芦屋道満(生没年不詳)のものといえます。

その根拠になったのが江戸時代に発行された観光案内の「伯陽六社道の記」や「伯路紀」(いずれも県立図書館蔵)。そこに「晴明だうまんの封じをけるよしにて石をたためる数尺の墳(つか)二つあり」とあり、明治時代の赤碕郷土誌にも同様の記事が載っていることもわかりました。

これらの宝塔は、これまで鎌倉時代に建てられた古いものというだけで、だれが何のために建てたのか不明のままです。保護文化財に指定されていない道満の宝塔は、崩れるままになっています。

ところで、陰陽師は中国伝来の陰陽道に通じた人です。天文学や占いで国家や人の行動の吉凶禍福を判定する術で、奈良時代から多くの陰陽師が国家の運営や地相などを占い、疫病神退治などを行ったといえます。その第一人者が晴明で、ライバルが道満でした。今日でも晴明ブームが映画や漫画、スケートなどで続いています。

小谷さんは地元の岩田弘さんや谷雄一さんと、晴明命日の日に陰陽師2人の供養祭を思い立ち、町民に呼びかけたところ、およそ30人が集まりました。専称寺の根井(ねのい)一彦住職の読経とともに、「陰陽師の力を借りて、この世に流行する悪疫コロナを退治してほしい」とお願いし、手を合わせました。

小谷さんは「赤碕塔の真相を明らかにできた。歴史認識を江戸時代に戻せてよかった」と喜んでいました。供養祭は毎年開くそうで、修験の山・船上山の再評価やご利益のある地域おこしに期待が集まります。



安倍晴明の供養祭に集まったみなさん



安倍晴明供養祭(花見瀉墓地)



お墓が広がる花見瀉墓地

米子市立図書館は郷土作家・松本薫さんの講演会「小説とふるさと～日野3部作を終えて～」を開きました。開館30周年の記念事業のひとつで、40人が聴講しました。松本さんは「これからは地方が考え、地方から変わっていく時代」と訴えました。

松本さんは米子市淀江町生まれ。27歳で U ターンし、高校教師を務めるかたわら、「梨の花は春の雪」を皮切りに、ふるさとの小説を書いてきました。およそ10年かけて日野郡3町（日南・日野・江府町）の “ご当地小説、も仕上げ、「日野3部作」と話題になりました。

3部作は日野町「TATARA」（2010年、伯耆国たたら顕彰会発行）、江府町「天の虫—十七夜物語」（2015年、江府町観光協会発行）、日南町「日南 X」（2019年、日南町観光協会発行）です。

「TATARA」は奥日野のたたら製鉄と鉄山師・近藤家の物語です。中国地方は良質の砂鉄と豊富な山林資源でたたら製鉄が盛んでした。江戸時代の生産量は全国の8割を占め、奥日野は奥出雲とともにその中心でした。小説は奥日野の鉄が日露戦争を支えた話など、スケール大きく展開します。

「天の虫」は戦国時代の話です。尼子と毛利の “国盗り物語、のなかで、負けるとわかっていた江尾城主・蜂塚右衛門尉は尼子に加勢して討ち死にし、落城します。その領主をしのんで盆踊りが生まれ、「江尾十七夜」が今日まで450年も続いています。小説はそのいわれを恋物語と併せて説きます。

「日南 X」は推理作家・松本清張の父親が日南町出身で、清張もこの町をこよなく愛していたことにちなんで、ミステリー仕上げです。地元にも伝わる神話をトリックに使い、生山大火やシベリア抑留で伏せられた国会議員の過去の闇を暴いていきます。

3部作とも主人公は、町外からやってきた若い女性です。松本さんはふるさとにUターンした原体験を生かし、だれにも気兼ねすることのない “よそ者、の目線で日野郡の歴史や文化や人々を追い、小説にしたといいます。そして取材、執筆するうちに、「日野郡は愛着のある大切な場所になっていった」そうです。

松本さんは「TATARA」を通じて、「文化は山から下ってきた」と確信したといいます。明治時代半ばの日野郡は3万5千人が暮らし、そのうち2万人がたたら製鉄で生計を立てていたといいます。いま郡人口は 1 万人。豊かだった奥日野も、富国強兵や戦争を続ける中央集権国家体制のなかで衰退していきました。「これからは地方で考えて、我々はこうありたいと変わっていく時代。みんなで自慢できるふるさとを作りましょう」と締めくくりました。



松本薫さん



日野3部作



松本薫さんのサイン会

山陰海岸が世界ジオパークに認定されて10年。これを記念して鳥取ユネスコ協会は鳥取市文化センターで日本画家・吉田茅穂子さんのジオスポット絵画展を開き、改めて山陰海岸の素晴らしさをPRしています。9月30日まで。

山陰海岸ジオパークは京都府(京丹後市)～兵庫県(豊岡市・香美町・新温泉町)～鳥取県(岩美町・鳥取市)の山陰海岸国立公園を中心にした東西約120kmに及ぶ広大なエリアです。日本列島が大陸の一部だったころや日本海ができていく地形や地質を伝えており、2010年に世界ジオパークに認定されました。

吉田さんは鳥取県美術家協会や日本国際美術家協会の会員であると同時に、鳥取砂丘の再生運動やユネスコ運動などを進める社会活動家です。山陰海岸のジオパーク化を後押ししようと思い立ち、エリア内のジオスポット35カ所の風景を色紙に描き、2015年に「山陰海岸ジオパーク日本画集」を出版しました。

今回の展覧会は、その原画展です。吉田さんによると、それぞれのスポットに3回は通い、千貫松島・浦富海岸(岩美町)、窓島・孔雀洞門・鷹の巣島・鎧の袖(香美町)などでは、岩肌を確認するため舟で近づき、陰影を避けて夏の真昼間にスケッチしたそうです。

このほか、名所の鳥取砂丘・湖山池(鳥取市)、玄武洞・はさかり岩(豊岡市)、立岩・屏風岩(京丹後市)なども、絵とともにスケッチの時の思い出話や感想を添えて展示し、多くの鑑賞者から共感を集めていました。

吉田さんは「画業50年。自然のなかに身を置いて、宿る命や神秘的なものに向き合ってきました。まだまだ精進です」と、抱負を語っていました。



吉田茅穂子さん



にぎわう山陰海岸ジオパーク絵画展



はさかり岩(豊岡市)



千貫松島(岩美町)



鷹の巣島(香美町)

かつて関金や三朝など鳥取県中部にあった「たたら製鉄」を復活させて、体験型観光地づくりを目指す「ミニたたらワークショップ」が倉吉市の農機具メーカーで行われています。この日はたたら操業とペーパーナイフづくりがありました。

ミニたたらワークショップは中部ものづくり道場(岡本尚機代表)の主催で、今年で4年目の挑戦です。八島農具興業(八島弘明社長)が協力しています。

北栄町の浜辺で砂鉄を集め、関金町で炭をつくり、八島農具興業の工場で砂鉄と炭を交互に入れて燃やすたたら操業を行い、そのできた鉄でマイナイフをつくるというもので、およそ5カ月間、4回の工程に分けて体験実習します。今年は延べ40人余りが参加しました。小学生もいます。

岡本代表によると、鋼ができたのは過去3回のうち1回しかなく、たたら操業の難しさを思い知らされているといいます。鉄づくりは、まさに神がかり。湿度などが微妙に影響するので、昔から金屋子神のご加護が必要でした。炉の温度(1,400度前後)や炉内の粘土、砂鉄や炭の入れ具合など、さまざまな変化で鋳(けら)の出来栄も違ってくるといいます。

この日は参加者が砂鉄と炭を交互にミニ炉に投入し、それぞれ20kgを燃やして4~5kgの鋳を取り出すことにしています。およそ1時間半にわたって炉内投入の体験が続きました。

5寸くぎを熱してたたき、ペーパーナイフづくりもありました。「くぎは軟鉄。たたいてやれば、強くなる。人間も温泉に入ると回復するように、くぎも赤く焼いてやると再生します。とても人間的です」など、岡本さんの解説を聞きながら、参加者はペーパーナイフづくりを体験しました。母親と参加していた名越翼君(4年生)は「よく切れるペーパーナイフができました」とうれしそうでした。

八島農具興業の事務所では、日本刀・伯耆国広賀(江戸時代初期)などが展示され、八島さんが倉吉の刀工や千歯の歴史などについて解説しました。ミニたたらワークショップは2021年の1月末まで続きます。



岡本尚機さん



八島弘明さん



くぎをつぶしてペーパーナイフづくり



たたら操業を体験(八島農具興業で)

2020年10月3日

細身で反りのある日本刀の歴史を作った古伯耆物、その系譜を紹介する展覧会が日南町美術館であり、これに合わせて10月の2日間、日本刀のギャラリートークや伯耆国の鉄の講演、たたら跡の見学会などが集中して開かれ、奥日野は歴史や日本刀ファンでにぎわいました。

伯耆は古くから鉄のクニです。鳥取県公文書館の岡村吉彦さん(前県史編さん室長)が「古代中世の伯耆国と鉄」について講演し、古代の文献記録を紹介しました。

それによると、平安時代の行政文書「延喜式」に伯耆が納める税として鉄や鍬があり、鍬は山陰道のなかで伯耆国だけに課せられていたといえます。ほかの文書では、伯耆・備中・備後に鉄の割り当てがあり、伯耆国のノルマは他国の倍以上だったそうです。また、伯耆国にある各地の荘園からも年貢として鉄や鉄製品の割り当てがあり、久永(くえ)御厨や矢送(やおくり)荘には鉄1万延(1延は約2kg)のノルマが課せられていたそうです。岡村さんは「伯耆には鉄を大量生産できる技術があり、運搬する馬がいたのでは」と見えています。

こうした産鉄技術を背景に、伯耆古鍛冶の始祖・安綱が誕生しました。反りのある太刀の創始者で、国宝の「童子切」などをつくりました。息子とされる真守はじめ、有綱、安家、安綱などの一門がつくる太刀は、古くて尊い「古伯耆物」と呼ばれ、各地で宝物になりました。それらを集めて昨年、奈良・春日大社で「最古の日本刀の世界 安綱・古伯耆展」が開かれ、にぎわったばかりです。

日南町美術館には大神山神社所蔵の「太刀 銘 安綱」(米子市指定有形文化財)や「太刀 無銘 伝古伯耆物」(鳥取県指定保護文化財)など11振りが展示され、刀剣研師の森井偲訓さん(日本刀文化振興協会理事)が刀の見方や太刀と刀の違い、日本一の玉鋼とされる印賀鋼(日南町産)について解説しました。

この展覧会に合わせて、伯耆国たたら顕彰会(田貝英雄会長)と奥日野ガイド倶楽部(佐々木彬夫代表)は、「古伯耆物のルーツを巡る たたら遺跡探訪ツアー」を行いました。22人が参加し、日野町根雨のたたら楽校—日南町美術館—県史跡「都合山たたら跡」(日野町上菅)を訪ねました。楽校でたたら製鉄の歴史や仕組みを学び、その最終商品でもある美術品の刀を見学し、産鉄の現場跡に立つ、まさに鉄文化をフルに体験するコースです。都合山たたらへは炭焼き小屋などがある山道を歩き、都合山の山内跡では産鉄のバーチャル画像を楽しみました。ガイドした佐々木代表は「1日がかかりでしたが、たたら製鉄の全体がよく分かるツアーだったと、みなさんに喜んでいただきました」と高評価に満足そうでした。



古伯耆物を説明する森井さん



史跡になった都合山たたら跡を訪ねる

海に湯がわく米子の皆生一。皆生温泉ができて今年で100年。これを記念して米子市観光センターで、「安部朱美創作人形・淀江傘コラボ展 温もりの日々」が開かれています。皆生温泉旅館組合（柴野清組合長）がコロナに負けず、次の100年に踏み出すために開いたものです。同展は11月29日まで。

安部朱美さんは米子市在住の創作人形作家です。昭和を題材にした家族や子供たちを表情豊かに表現するのが得意で、全国に多くのファンがいます。今回は来年200年を迎える米子市無形文化財・淀江傘との連携開催です。

会場には昭和の暮らしをテーマにした人形300体と淀江傘50本が並び、和傘がより人形の懐かしさを引き立てて、情緒豊かな風景が広がっています。

安部さんは同展のために「皆生を守る薬師さま 薬師さまを守る皆生の人々」という新作を製作し、展示しました。お薬師さまは難破船から皆生の海岸に流れつたとされる薬師如来です。皆生温泉は海が荒れるたびに、泉源が被害を受けてきましたが、お薬師さんをまつことで平安を守ってきたと伝えられています。

安部さんの作品づくりのスタイルは、風景を浮かべ、背景にあるストーリーを考えながら作り上げていくそうで、今回も皆生温泉の歴史を取材し、ストーリーを思い浮かべながら人形たちを作っていたといいます。

日野川からの大量の土砂が海を埋め、浅瀬となったところで温泉が湧き出したのが皆生温泉の始まりと言われています。海辺には公衆浴場や旅館が開業したものの、海が荒れるたびに被害を受け、経営はうまくいきませんでした。そんななかで有本松太郎さんが温泉開発とまちづくりに乗り出しました。大正9年（1920年）でした。有本さんは陸地にも泉源を確保し、土地を買収し、米子駅からの交通も開発し、皆生温泉のまちづくりを進めていきました。

安部さんは言います。「お薬師さんは皆生温泉がうまくいかなかったときも、にぎわったときも、その歴史を見守ってきました。皆生の人たちも、いろいろなことを乗り越えて100年を迎えたのだと思います。今回の作品は先人への感謝の思いを込めて創りました」と。皆生温泉の歴史を感じながら、人形たちと会話したいものです。

淀江傘は1821年に倉吉から淀江に来た倉吉屋周蔵が傘屋を開いたのが始まりといわれます。大正時代には71軒の製造業者があり、年間17万本作ったと伝えられています。昭和59年には洋傘に押されて姿を消しましたが、「淀江傘伝承の会」のみなさんの手作りで見事復活し、大山献灯会などのイベントや子どもたちのものづくりなどで活躍しています。



安部朱美さん

「皆生を守る薬師さま
薬師さまを守る皆生の人々」

淀江傘とのコラボ

鳥取市の因幡万葉歴史館は雅楽舞楽の宴を開き、千年余り続く雅な古典芸能の魅力を伝えるとともに、舞いで新型コロナの邪気を払いました。

万葉歴史館は因幡国司で活躍した大伴家持を顕彰する施設です。家持は因幡で万葉集最後の歌(4516首目、新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事)を詠んでおり、これにちなんで毎年、旧正月にお茶会、秋には家持大賞(短歌)の表彰や万葉集の朗唱など万葉フェスティバルを開いています。昨年は新元号「令和」が万葉集から誕生したこともあって、万葉の里はイベントも続き、大にぎわいでした。しかし、今年はコロナ禍で、そのにぎわいがウソのようです。

鳥取雅友会(森川道弘代表)の雅楽舞楽の宴も実施が危ぶまれていましたが、「できることをできるように」ということで、会場を歴史館前の国府町コミュニティセンターに移し、入場制限し、トークと舞楽で古典芸能を紹介しました。約50人が聴講、鑑賞しました。

鳥取雅友会副代表の三谷広さんによると、雅楽は平安時代、日本古来の音楽と中国などから伝わった音楽が融合して誕生したもので、世界最古のオーケストラといわれ、ユネスコの無形文化遺産になっています。舞楽の衣装で赤色は中国大陸系、青や緑色は朝鮮系だそうで、それぞれの楽曲には、さまざまな国の古の文化が詰まっているといいます。

紹介された舞楽は環城楽(げんじょうらく)。蛇を見つけて喜ぶ姿を舞いにしたもので、森川代表が赤装束に赤面をつけて、CDに合わせて優雅に舞いました。この舞いで2本の指で剣印をつくり、蛇の首を何度も切り落とすしぐさが注目を集めました。三谷さんが「足の運びで大地の邪気、剣印でコロナの邪気を払いました」と説明すると、観客は大きくなずいていました。



環城楽の舞い



特設ステージで「雅楽舞楽の宴」



森川代表(左)と三谷さん

はがき出し運動などでコロナ禍に挑戦する倉吉市の小鴨シニアクラブ協議会(北村隆雄会長)は、小鴨公民館に舞踏教育家の佐分利育代さんを招いて「シニア世代の健康維持とストレッチ」の方法を学びました。約40人が参加しました。

佐分利さんは鳥取大学で40年間、体育学や舞踏教育学を研究、指導し、2015年に退官しました。佐分利さんはダンスを踊るように、体操するのがモットーです。小学2年生の時からダンス教室に通いはじめ、今も週に2回、仲間とダンスを楽しんでいます。

小鴨シニアクラブはコロナ禍にあっても、人と人の交流が疎遠にならぬよう、はがき出し運動を繰り広げ、絆の大切さを訴え続けていますが、はがき出し運動に伴って、会員から肩こり解消やストレッチ指導の要望が高まり、佐分利さんに指導を仰ぐことにしました。

佐分利さんによると、体操は輪になって、みんなの表情を見ながら踊るのがベストだそうです。この日はソーシャルディスタンスということで、横並びになり、イスに座ってできるストレッチや体操を学びました。ときにはイスの周りを歩いたり足踏みしたり、腕を広げたり回したり…。参加者は「大山賛歌」や「明日があるさ」などの曲に合わせて、思い思いに体を動かし、ダンスを踊るように体操を楽しみました。

北村会長は「久々に体を動かして良かった。同じ歌でもリズムを変えて体操すると、面白いとわかった。農作業の合間やドライブの途中でも簡単にできるので、みんなで続けていきたい」と、参加者の反応に喜んでいました。佐分利さんは「ダンスに正解はないし、テストもないので、形はめっちゃくちゃで大丈夫！ 思うままに体を動かしてほしい」と話していました。



佐分利育代さん



みんなで楽しくストレッチ



身体全体を使って体操

鳥取市の用瀬図書館は今年初めての「本と人、人と人」が会う講座を開き、鳥取愛石会の谷口輝男さん(元佐治村助役)から日本三大銘石・佐治川石の魅力など佐治のいいところ、すごいところを聞きました。

佐治川石は鳥取市佐治町(旧佐治村)で採れるもので、全体に青黒く、緑がかっているのが特徴です。表面が凸凹していて変化に富み、庭石や水石として利用され、北海道・石狩川の神居古潭石(かむいこたんせき)や滋賀県・琵琶湖下流の瀬田川石とともに、愛石家に人気です。

佐治川石は3億～1億6千万年前、海底火山から噴き出した溶岩などが高い圧力を受けてできたものとされ、九州北部から中国地方東部に広がる三郡変成帯にあり、若桜町からも佐治川石と似た三倉石が出ています。

谷口さんによると、佐治川石がブームになったのは日本経済の高度成長期、昭和30年ごろといえます。地元は佐治川石の保存に乗り出したものの、機械を使った採石や盗石が続き、昭和40年に鳥取県は佐治川石の採取を禁止しました。現在、佐治川周辺は県の自然環境保全地域に指定され、佐治川石の採集はできませんが、大水が出た後は佐治川の下流、千代川の用瀬町や河原町などで愛石家が川に入っているそうです。

佐治町総合支所の中庭には佐治川石でできた庭園「黎明の庭」があります。平成4年に佐治村制80周年を記念してできたものです。当時の大阪芸大学長の中根金作さんが作庭したもので、中根さんは安来市・足立美術館の日本庭園なども手がけています。

谷口さんによると、黎明の庭に使われている佐治川石は大小合わせて27個です。町内27集落を表し、それぞれが発展し、明日が開けるようにとの願いを込めて配置されているそうです。築後28年経ち、コケがしっかりと根付き、雨の後はしっかりとした緑の空間が広がっています。見ごたえがあります。

谷口さんは佐治川石はじめ、佐治が誇る5し(和紙・梨・星・話・石)についても紹介しました。近年は佐治漆も加わり、6しを目指しているそうです。併せて、佐治には熊野神社遺跡▽神楽獅子舞▽佐治川ダム▽石碑遺跡▽飛行機墜落現場の穴—などのお宝もあるそうです。このうち、町内すべての神社(15社)では麒麟獅子舞ではなく、なぜか神楽獅子舞が伝わり、熊野3山を模した熊野神社遺跡とともに、謎の解明が待たれると報告していました。



谷口輝男さん



黎明の庭



佐治川石

2020年10月11日

鳥取県中部の音楽バンド・ブルーレイズ(丸田克孝代表)のライブが倉吉市の倉吉シティホテルであり、世界のサクソ奏者・MALTAさんがゲスト出演。丸田3兄弟のライブが実現し、会場は盛り上がりました。

ブルーレイズのバンド歴は20年ほど。丸田代表を除いてメンバー交代を重ね、いまは8人の編成です。倉吉市と米子市から各3人、三朝町と北栄町からそれぞれ1人ずつの参加。いつもはダンスパーティーや福祉施設などを訪問し、年に一度のライブは14回目になりました。

今回はコロナ禍のため、入場制限しての開催です。倉吉市の石田耕太郎市長や大山ブランド会の杉原弘一郎会長など130人が駆け付けました。目玉はゲストのMALTAさん。

MALTA(本名・丸田良昭)さんは倉吉市出身。東京芸術大—アメリカ・バークリー音楽大を経て、ジャズのサクソ奏者となり、国内外で活躍してきました。倉吉市の観光大使、倉吉打吹天女音楽祭の音楽監督を務めるかたわら、ことしからは活動拠点を米子市に設けて、大山ブランド会の大使に就任するなど山陰活性化に全力投球中です。シニアバンク「生涯現役」にも登録されています。

実はMALTAさんはブルーレイズのリーダー・克孝さん、サクソの和久本達人さんと3人兄弟の真ん中です。3人の共演は30年ぶりだそうで、MALTAさんはステージあいさつで、「音楽でみなさんにつながる幸せを感じ、そのうえに3人兄弟で出演できるなんて光栄です」と感激していました。

さて、ライブです。ブルーレイズは「みだれ髪」「星降る街角」「お祭りマンボ」など10曲を演奏し、会場は盛り上がります。続いて登場したMALTAさんは「リンゴ追分」や「聖者の行進」などでジャズの幅広さを紹介し、自作の大山ブランド会の応援歌「アイラブ大山」で締めくくりました。



MALTAさん



丸田3兄弟(左から克孝さん、MALTAさん、達人さん)



ブルーレイズ

2020年10月13日

「幸せを呼ぶ聖獣・麒麟、その獅子舞い文化を広めよう」と、鳥取市の人形作家が麒麟獅子のマリオネットをつくり、市内の一膳飯屋・あまから亭で披露しました。公開練習を重ねて上演の運びですが、日本遺産の麒麟獅子がいつでも、どこでも気軽に見られるようになると期待されています。

マリオネットをつくったのは、劇団どんぐり代表の石田一高さんと中学校で木工品づくりを指導している福本弘文さんの2人です。コロナ禍で劇団の公演が減り、時間ができた2人はこの夏、懸案の麒麟獅子づくりに取り組みました。1人で演じられる麒麟獅子舞をつくり、多くの人に麒麟獅子を知ってもらい、見てもらうためです。

因幡や但馬に伝わる麒麟獅子は昨年、待望の日本遺産になりました。ただ、神事とあって、見ることができるのは神社の例祭や伝統芸能祭くらいです。舞い手、おはやしなどが必要で、1人で演じられるものではないだけに、鑑賞の機会はなかなかありません。麒麟獅子舞の継承、発展の課題になっています。

福本さんによると、東井神社(用瀬町)に伝わる獅子頭の立体図面を参考に、鳥取県伝統工芸士の中山勘治さんの指導で、石田さんとともに猩々(しょうじょう)も含めて麒麟獅子のセットを製作したといいます。

披露された舞いは約5分間です。猩々の前払いのあと、頭をゆっくり回したり、地をはうようなしぐさをする麒麟獅子特有の舞いが続きました。福本さんによると、因幡・但馬のあちこちで舞われる麒麟獅子舞ですが、どれ一つとして同じものがないそうです。

石田さんはマリオネット歴30年余り。これまでに20体を超す人形を操ってきましたが、新たに麒麟獅子が加わりました。石田さんの麒麟獅子は18本の線り糸で舞い、動きます。この日は麒麟獅子舞とともに、尺八奏者・TERU功山さんに似た人形による「リング追分」の演奏、ダンゴ虫たちのノリノリのロックダンスを披露しました。

石田さんと福本さんはそれぞれ、これらのマリオネットを持ち運んで、県内外を回ることにしています。



マリオネットの麒麟獅子(操るのは石田さん)



麒麟獅子の指人形と福本さん



みんなでマリオ

鳥取市の文化センターにあるファブラボとっとりで木工遊び体験があり、市内の小学生がペン立てをつくり、古代のコマ遊びを楽しみました。鳥取ものづくり道場の藪田道男さん(梨の木工房代表)が指導しました。

ファブラボは Fabrication(ものづくり)と Fabulous(すばらしい)の造語です。地域の子もたちのものづくり教育を進めるとともに、その指導者を養成する拠点で、世界50カ国にあります。日本にもおよそ20都市に設けられ、鳥取市には2014年にできました。卓上レーザー加工機や3Dプリンター、刺しゅうミシンなどいろいろな加工機器を備えています。

木工遊び体験には小学1～4年生の6人が参加しました。藪田さんはこの夏、イラストレーターの雲坂紘巳さんと一緒につくった冊子「もりのものがたり」を使って、木によって硬さやにおいが違うことなどを説明し、スギで車の型をしたペン立て、ヒノキで手回しコマづくりを指導しました。

ファブラボには機器や道具がそろっているだけに、工作に気軽に挑戦できます。糸のこで車軸の長さをそろえたり、鉛筆削りでコマの細かいしんを削ったり…。藪田さんの指導であつという間に、きれいに仕上がりました。工作の後は思い思いに絵づけをして、ペンを立てたり、コマを回して遊びました。

藪田さんは古代コマも紹介しました。山陰自動車道の建設に伴って、気高町の絵下・郡家遺跡などから出土した砲弾型のコマで、ムチなどでたたいて回したそうです。1200年ほど前の地層から出てきたものらしく、奈良・平安時代のものといえます。藪田さんはろくろを回してスギで「たたきコマ」をつくり、みんなでニット製の布でたたいて遊びました。参加者の笹尾康太君(1年生)は「どれも簡単に作れて楽しかった」と喜んでいました。



古代コマを紹介する藪田道男さん



たたいて回す古代コマ



マシーンをを使って車軸づくり

鳥取市民文化祭の参加事業、宝生流・観世流・喜多流の合同謡曲仕舞大会が市文化センターであり、久々の薪能に向けて精進してきた成果を発表しました。

薪能は10月31日午後、とりぎん文化会館の中庭で開かれます。8月に開催予定でしたが、コロナ禍のため延期していました。鳥取市で薪能が開かれるのは2002年の「鳥取砂丘いさり火能」以来です。鳥取県文化振興財団と鳥取県能楽連合会が古典芸能の継承、発展を願って開くもので、能楽師・林宗一郎さんが演出します。県能楽連合会の宝生・観世・喜多の3流も連吟、舞ばやしを発表します。

今年の合同謡曲仕舞大会は薪能を控え、精進の成果を発表する舞台になりました。3流合わせて38人が出演し、次々と連吟や舞ばやしを演じました。出演者は舞台が終わると、客席から仲間の所作を確認し合っていました。

このうち、観世流のみなさんは薪能で「高砂」「実盛」「須磨源治」「巻絹」の舞ばやしを予定しており、一段と力が入っていました。県能楽連合会長の近藤光さんは「みなさんの精進、お見事です」と、穏やかな表情でした。



喜多流のみなさん



喜多流双葉会の仕舞「田村」



鳥取観世会のみなさん



宝生流のみなさん



連吟する喜多流のみなさん

2020年10月24日

日野郡の江府・日野・日南3町の官民が一緒になって地域を売り出す「日野軍・秋の陣」が11月末まで開かれています。紅葉が進む日野路。令和のふいご祭、オシドリ観察、奥日野五山めぐり、新米・新そば祭、なぞ解きトラベルなどのイベントが続いています。この日夜には古民家コンサートがありました。

古民家コンサートは日野町舟場の古民家沙々木が会場。築190年、元庄屋さんの住まいです（国登録有形文化財）。ここでのコンサートは15回目。今回は親子のクロマティックハーモニカ奏者の坂上達也・和圭子さんがゲストです。

坂上さんによると、半音が出せるクロマティックハーモニカはフルートと同じ3オクターブの音域で、ほとんどの楽曲が吹けるそうですが、体を使わないと音が出ないので、肺機能の強化に良いそうです。近年は認知症予防の楽器としても見直されているといいます。

演奏したのは全部で11曲。聴かせどころは「いのちの歌」と「糸」の合奏。達也さんはアンコールで、コロナと戦うすべての人々の幸せを願って「見上げてごらん夜の星を」を吹き、大きな感動を届けました。囲炉裏のある会場はススキや綿毛、糸車などで装飾され、古民家ムードいっぱい。和佳子さんが「里の秋」「川の流れるように」などをしっとりと演奏すると、観客は懐かしい気分になっていました。

この古民家沙々木とともに、日南町菅沢の古民家かつみや、ときわすれ清水屋の3軒が奥日野・古民家ネットワーク（佐々木彬夫代表）をつくっています。いずれも宿泊や田舎体験ができる古民家です。今年の「秋の陣」には「古民家でくつろいで」企画で参戦し、日本ミツバチのみつ湯や抹茶、ハーブティー、お菓子でおもてなしをしています。

ときわすれ清水屋はそば処でもあります。臼びき十割そばを打ちたてで食べられるとあって、お昼時は県内外からそばファンが押し寄せています。お店周辺の紅葉も進み、まさに「時忘れ」できる隠れ場所といったところです。

その清水屋から車ですぐのところに、古民家かつみやがあります。こちらも国の登録有形文化財。大正時代の初めに改修された運送業の事務所兼住宅だそうです。高飛び込みの宮本基一郎・幸太郎兄弟ゆかりの家で、2階にはメダルやトロフィーなどがびっしり並んでいるほか、珍しい農具や民具も展示され、民俗資料館の趣です。

かつみやの裏山のヒノキ林は、遊歩道が整備され、里山遊びが楽しめるほか、近くにはヒメボタルの生息地・聖滝もあり、自炊体験、もちつき体験などで年中、子どもたちの歓声が絶えないそうです。

奥日野の古民家は、それぞれの持ち味を生かして、日野郡の活性化にがんばっています。



ときわすれ清水屋のそばと横田静佳さん

古民家かつみやの
宮本克範・美和子夫妻囲炉裏のそばでコンサート
(日野町・古民家沙々木)

2020年10月25日

鳥取落語会が鳥取市のパレットとっとり市民交流ホールでありました。米子市の落語家・6代目桂小文吾さんが弟子の桂吾空さん(鳥取市)や桂一門とともに開いたもので、これを皮切りに鳥取落語会を定期開催したいと張り切っています。

桂小文吾さんは京都市出身。落語や役者活動後、皆生温泉で働き、そのまま定住。25年前に落語家に復帰し、米子市児童文化センターで子どもたちに落語を教えるとともに、米子市や伯耆町などの高齢者とともに福祉劇団「笑劇座」をつくり、指導しています。上方落語協会会友。

桂吾空さんは鳥取市出身。東京で大学生活を送り、立川談志の孫弟子から小文吾師匠のもとに移籍しました。現在、中海テレビに出演中で、「鳥取といえば、桂吾空と言われるようにがんばる」がモットーです。その第1歩として小文吾師匠や桂一門の協力で鳥取落語会を開きました。

協力したのが桂小文枝師匠(旧・きん枝)一門の桂ちきんさん、桂小きんさん。ちきんさんは三朝温泉で1カ月ほど、すみすみ芸人を務め、誘客にひと役買った経歴の持ち主。小きんさんは小文枝師匠の孫で、吾空さんと同じ年です。2人は吾空さんの晴れの門出を得意の持ちネタで祝いました。

吾空さんはうどんの食べ方が面白い「ときうどん」、小文吾師匠はおはこの「鯉ぬすと」をそれぞれ披露し、満員の客席に笑いを届けました。中入りではお楽しみ抽選会もあり、鳥取の寄席は大盛り上がりでした。



桂小文吾さん



桂吾空さん



たくさん笑いでにぎわった鳥取落語会

2020年10月31日

「鳥取ゆかりの人物を歴史大河ドラマに押し上げよう」と、とっとりいきいきシニアバンクの生涯現役まつり(鳥取県、鳥取県社会福祉協議会主催)が鳥取市のとりぎん文化会館でありました。「鳥取県を舞台に！ 歴史大河ドラマを推進する会」との共催で、新たなドラマ候補に西因幡で理想のクニづくりを進めた亀井茲矩の物語を選びました。生涯現役まつりをレポートします。

シニアはじける音楽祭

生涯現役まつりは音楽祭で幕を開けました。出演したのは鳥取ベンチャーズ(宮部兼壽代表)とサックス奏者の澤田勝さんです。

鳥取ベンチャーズは今年、バンド結成10周年。毎年、用瀬流しびなの館でリサイタルを開いているほか、テケテケサウンドで市内の桜まつりや納涼祭、マラソン大会などを盛り上げています。今回も「ダイヤモンドヘッド」や「太陽の彼方に」などで「ノリノリ、気分を届けました。

澤田さんはポップス歌謡バンド「アールファイブ」のリーダー。むせび泣くようなテナーサックスがお得意です。今回も小谷真理子さんの歌声とともに、万葉集の最後を飾る大伴家持の祝い唄「新(あら)たしき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事(よごと)」や「ふるさと」などを演奏しました。



澤田勝さん



鳥取ベンチャーズ



Amy



にぎわう生涯現役まつり

鳥取発の歴史大河ドラマは、いま

鳥取発の歴史大河ドラマ候補はこれまでに4つ決まっています。①岩美町出身の外交官兄弟、澤田節蔵・廉三、その妻美喜の物語「三愛のクニへ」②女性参政権運動の魁になった「赤とんぼの母」碧川かた③日本の美しい田園風景をつくった老農・中井太一郎④比叡山や大山寺などを再興した傑僧・豪円和尚。いずれも県民投票で選ばれ、それぞれ放送実現を目指して、さまざまな活動が続いています。その活動報告がありました。

「三愛のクニへ」を報告したのは元高校教師の片山長生さんです。片山さんは評伝や手紙などをもとに、廉三を主人公にした小説「愛郷」を出版しました。明治後半から戦後のおよそ70年間の舞台。日本が戦争を繰り返した時代です。ほとんどフィクションの実名小説で、現代史がよくわかり、戦争の正体に迫ると好評です。片山さんは「鳥取県人会のみなさんによく読まれています。若い人や外務官僚にもぜひ読んでほしい」と期待しています。

「赤とんぼの母」は元看護師の四井幸子さんが報告しました。女性解放に尽くした碧川かたの活躍の足跡を子どもたちにも知ってもらうため、紙芝居を作成中で、県内すべての図書館に届けるそうです。また、かたの息子で童謡「赤とんぼ」の作詞者・三木露風と唱歌「ふるさと」の作曲者・岡野貞一（鳥取市出身）が一緒につくった唯一の作品「霜の朝」の楽譜が、南部町出身の音楽家・足羽章さんの遺品の中から見つかったことも紹介しました。

この片山さんや四井さんの報告に合わせて、岩美町の音楽グループ・Amyu（河下哲志代表）が演奏と朗読でからみました。廉三がよく歌ったというフランスのシャンソン「サクラボの実るころ」や「赤とんぼ」「霜の朝」などを浜辺由佳里さんが熱唱し、ショーアップしました。

中井太一郎の報告も熱が入っていました。ドラマ候補になったことで、紙芝居や活動集の出版などが続き、太一郎の出身地・倉吉市小鴨地域は元気づいています。太一車にちなんで誕生した紙人形劇「ころころ草取り物語一座」（中尾美千代代表）の上演もあり、「太一郎は農家を救い、女性を農業の重労働から解放した」と訴え、会場から大きな拍手を集めました。

伯耆・伝承隊（吉島潤承副隊長）は傑僧・豪円和尚の電子紙芝居を日本語と英語で紹介しました。インバウンド・サービスのひとつとして、シニアバンクが豪円和尚の紙芝居を英語と中国語と韓国語に翻訳したものです。コロナ禍で境港へのクルーズ船が途絶えたままとあって、公開できずにいました。生涯現役まつりが初舞台になりました。吉島さんと英語教師のマーチン・バーナードさんが、練習の成果を發揮して、うまく掛け合いました。生涯現役は鳥取県の国際化にひと役買っています。



片山長生さん



四井幸子さん



ころころ草取り物語一座



電子紙芝居「傑僧豪円」を演ずる伯耆・伝承隊

新たな候補作の選考会

いよいよ新たな候補作選びです。今年エントリーしたのは①西因幡で理想のクニづくりを進めた亀井茲矩の物語②悲運の初代鳥取城主・武田高信③鳥取藩の礎を築いた揚羽4代の物語—の3つです。いずれも戦国もの。これにちなんで、吟道翔風流日本吟翔会(佐藤翔風代表)のみなさんが、亀井茲矩・山中鹿介・吉川経家に寄せて戦国の武将を詠いました。佐藤代表のナレーションです。

「鹿野には茲矩が統治した鹿野城があります。山中鹿介は茲矩の義父で、尼子家再興の旗のもと七難八苦の生涯を遂げ、鹿野の地に眠っています」

「羽柴秀吉は3万の大軍を率いて鳥取に攻め入りました。対する鳥取勢は多勢に無勢。衆寡敵せず、ろう城の末、城主吉川経家は自らの命と引きかえに多くの家臣を助け、自刃して果てました。35歳の生涯でありました」

会場には朗々とした詩吟が流れ、気分は戦国時代に染まっていきます。そんななかで3題の発表が始まりました。発表者は①道の駅西いなば気楽里(きらり)の駅長・徳岡義広さん②東郷地区ふるさと歴史委員会の木下登士彦さん③元小学校長で郷土史家の田中精夫さん—。それぞれの発表を聞いて、来場者の投票で候補作を決めますが、会場は入場お断りの満席状態になっていました。

亀井茲矩物語の大河ドラマ候補への挑戦は3回目です。あの歴史小説の大家・司馬遼太郎さんが「街道をゆく」で、亀井公の善政をほめているというのに、なかなか選ばれません。提案者も3人目です。今回は元市職員で鹿野ふるさとミュージカル世話役の徳岡さんが提案しました。

徳岡さんは鹿野祭りから話を起こしました。祭りが似合う城下町や町並みづくり、空き家を利用した食事どころなどの整備が進んでいることや、創作ミュージカル、亀井さん検定などが次々に誕生している、いまの鹿野町を紹介しました。

亀井家が鹿野を治めたのは、わずか37年間です。島根県・津和野に移ってから400年余りも経っています。それにもかかわらず、鹿野の人たちはいまでも「亀井さん」と呼んで親しんでいます。なぜでしょう。

徳岡さんは自作の亀井茲矩の履歴書で説明しました。1557年、出雲の湯の庄(玉湯町)生まれ。年齢463歳。いまだに生きています。鹿野での主な仕事は日光池や湖山池の干拓、日野銀山の開発、村々の切らざる木の指定、大井手用水開設、御朱印貿易、ショウガや茶や薬草栽培、青島や長尾鼻での馬の放牧・飼育、海女漁の導入、お城を開放して敬老会、鹿野祭り…。「茲矩の茲に心をつけると、慈しみになる。名前のごとく、民を愛し、幸せを願ったお殿様でした」と解説しました。

木下さんは県都鳥取の始まりは、久松山の初代城主になった武田高信だったことを明らかにしました。それによると、毛利勢に律義に従った高信は、布勢天神山城を攻略し、およそ10年間、鳥取城で因幡を支配しましたが、毛利・織田の覇権争いの中で、戦国大名にはなれませんでした。しかも武田一族は因幡民談記など江戸時代の書物によって、因幡の悪人にされたままといいます。

木下さんは地元の東郷谷にひっそりとまつられている高信の奥方の墓の研究から、少ない記録を頼りに武田一族の名誉回復に乗り出しています。

田中さんは歴史大河ドラマを推進する会の共同代表のひとりです。毎回、ドラマ候補を発掘、提案しています。今回は鳥取藩や岡山藩を治めた、西日本の大大名・池田家の話を「揚羽4代」とし

て発表しました。その治世の陰には池田恒興と養徳院、輝政と天球院、利隆・忠雄と督姫、光政・光仲と茶々姫のように、女性たちの支えがあったことを紹介しました。

そして投票です。投票総数78票。亀井茲矩物語30票、初代鳥取城主・武田高信27票、揚羽4代21票。わずかの差で5つ目のドラマ候補が決まりました。

鳥取地域史研究会代表の小山富見男さんは「亀井さんは鹿野のみなさんのなかに、いまも生きていることがよくわかりました。武田高信のことはほとんどの人が知らないので、画期的な発表になりました。さらに生涯学習を続け、郷土史を検証していきましょう」と講評していました。



徳岡義広さん



鹿野まつり



田中精夫さん



木下登士彦さん

2020年10月29日

「まんが王国とっとり」の応援団・まんが似顔絵市民フォーラム(河本義永代表)は倉吉市の倉吉シティホテルで「まんが似顔絵トーク&MALTA ライブ」を開き、まんが似顔絵入りの名刺づくりをPRしました。

まんが似顔絵市民フォーラムは2018年に立ち上がったもので、作画担当は倉吉市出身のかわにしよしと(本名・川西義人)さんです。読売新聞に長く風刺漫画や政治漫画を描いてきた漫画家で、これまでに描いたまんが似顔絵は、市民フォーラム仲介分だけでおよそ500人にのぼります。

市民フォーラムは、そのまんが似顔絵を名刺に入れる運動を進めています。「世の中は人と人の出会いから。県民みんなが名刺を持って県内外へ発信すれば、交流人口は広がり、観光客誘致につながる。漫画家の育成にもなる」というわけです。ですから、まんが似顔絵づくりの目標は全県民55万人です。似顔絵づくりは5,000円。1,000円追加すれば、名刺も100枚作れます。

そのかわにしよしとさんが倉吉市にUターンしてきました。これを機に倉吉市は市報「くらよし」で4コマ漫画をはじめ、ふるさと納税の返礼品に「似顔絵まんが」も加えました(1万円以上)。これに刺激された南部町と米子市も、ふるさと納税の返礼品に鳥取県美術家協会長の加藤哲英さんの似顔絵肖像画を加えて、ふるさと納税をPRしています。

これらの活動に弾みをつけるため、「コロナに克つ まんが似顔絵トーク&MALTA ライブ」が開かれました。集まったのは約120人。倉吉市長の石田耕太郎さん、倉吉商工会議所会頭の倉都祥行さんらがお祝いに駆け付け、鳥取県知事の平井伸治さんも祝電を寄せ、氣勢をあげました。出席者の7割はまんが似顔絵名刺の所有者。会場のあちこちで、和やかで笑顔の絶えない名刺交換が続きました。

かわにしよしとさんはトークのなかで政治漫画の裏話を披露しました。それによると、組閣翌日の新聞に入閣者の横顔が似顔絵とともに掲載されますが、政治部記者の情報をもとに、あらかじめ40～50人分の似顔絵を準備しておくそうで、サプライズ人事にはいつも泣かされたといいます。

MALTAさんは倉吉西中ブラスバンド部で、かわにしよしとさんの後輩、顔なじみです。この日できたばかりの似顔絵を披露し、「よろしんじゃないですか、気に入っています」と満足そう。「リンゴ追分」「アイラブ大山」「コーヒールンバ」など6曲をパワフルに演奏し、会場を盛り上げました。



MALTAさん



似顔絵を描く、かわにしよしとさん(左)と加藤哲英さん



まんが似顔絵トークで MALTA さんも熱演

音楽が流れるにぎやかな地域づくりを目指して、境港市の夢みなと公園で学宴祭がありました。米子市などの若い音楽グループでつくる実行委員会が昨年が続いて開いたもので、出演料などを社会福祉事業に贈るといいます。シニアバンクに登録する港ベンチャーズも「若い人を応援しなければ」と出演しました。

学宴祭のテーマは「だれかのために音楽で募るチャリティー野外音楽祭」です。昨年は日吉津村の海浜公園で開きました。今年は2回目。コロナ感染予防のために、夏から秋に日程変更しての開催です。

米子市の会社員で実行委員長の原大介（はらだいすけ、46歳）さんによると、きっかけは2011年の東日本大震災です。自分たちの音楽グループも何か支援ができないかと考え、仲間呼びかけて出演料を募るチャリティー音楽祭をライブハウスで開いてきたといいます。昨年からは子どもたちにも楽しんでもらおうと、野外に進出。観客は500人ほど集まり、義援金は岡山県高梁市の児童養護施設に贈ったそうです。

第2回の今年はコロナ禍のなかで協賛金集めに苦労したものの、およそ30人のスタッフが手弁当で準備を進め、開催にこぎつけました。集まった音楽グループやダンスチームは21団体。子どもたちが遊べる輪投げやボールすくいなどの屋台も4つ並びました。

境港と言えば、港ベンチャーズ（遠藤辰雄代表）。毎年、近隣のベンチャーズファンを集めて、夢みなとタワーでフェスティバルを開く人気グループです。昨年が続いて元気に出演しました。「チャリティー音楽祭良いじゃないですか。若い人がやることは、どんどん応援しなくちゃあ」と遠藤代表は笑います。さかいみなとウィンドアンサンブルやゴスペルオーブのみなさんなども出演しました。

港ベンチャーズは歌入りを含めて7曲演奏しました。夕暮れの大山や美保湾をバックに、「ランナウェイ」や「運命」などを気持ちよく届けました。原実行委員長は「今年はおよそ800人の人出です。カネがなくても、やればできました。自信になりました。イベントが終わると、抜け殻になって泣くんでしょうね。来年の学宴祭はどこでしょうか、仲間と相談します」と話していました。



港ベンチャーズ



にぎわう夢みなと公園の野外ステージ



学宴祭実行委員長の原大介さん

鳥取市の青谷上寺地遺跡展示館で古代の宝石・ガラス玉づくりの体験会がありました。10人余りの女性が参加し、マーブル玉や泡玉をつくって、ストラップやアクセサリーにしました。同展示館では、さまざまなものづくり体験会を開いています。

青谷上寺地遺跡は人の脳や人骨、ト骨、鉄器、木工品、玉類などが多彩に出土し、「弥生の地下博物館」と言われています。ここで出土した人骨を使って、日本人の起源を探る遺伝子調査が進んでいるほか、高度な技術で作られた高坏なども多く出土しており、ものづくりが盛んな古代の交易・交流拠点だったとされています。

鳥取県の「弥生の王国」ホームページによると、2016年の調査で青谷上寺地遺跡から緑色凝灰岩製の管玉(くだたま)や水晶製の算盤玉(そろばんだま)とともに、ガラス玉の勾玉(まがたま)、管玉、小玉、作りかけのものがみつかっています。これらの玉類は有力者の墓から見つかるのが普通ですが、集落跡から出土するのは珍しいそうです。

また、弥生時代の日本列島にはガラスそのものを作る技術はなく、中国大陸や朝鮮半島などを経てもたらされたガラスを溶かして玉などに加工していたといいます。素材を高温で溶かし、鑄型に流し込む加工法は青銅器づくりにも通じる技術で、青谷上寺地遺跡にはガラス玉や青銅器をつくる工房があったと推定しています。

これにちなんでのガラス玉づくり体験会です。先生は市内の手づくりガラス工房Glass works negy代表の石井博文さん(鳥取ものづくり道場)。鳥取ブルーガラスを使ったピアスやイヤリングを販売しているほか、ガラス細工やステンドグラスづくりなどを指導しています。

この日は800度のガスバーナーでガラス棒を溶かして丸め、そこに別のガラスを溶かして模様をつけるマーブル玉、さらに重曹の粉をまぶす泡玉づくりを指導しました。それぞれ製作時間は冷やす時間も含めて1時間ほど。参加者は色とりどりのきれいなガラス玉にチェーンを通してペンダントなどに仕上げていきました。河原町から参加した主婦は「私だけのお宝がつかれるので楽しいですよ。次の機会も参加します」と話していました。



ガラス玉づくり



石井博文さん



オンリーワンのお宝がつかれます

米子市の中心市街地を流れる旧加茂川が、54年ぶりにかつての加茂川に名前を復活しました。これを記念して「秋の加茂川まつり」があり、大勢の市民でにぎわいました。古さを表す「旧」が取れたことで、米子城の城下町は川辺や海辺を活かした新しいまちづくりに弾みをつけそうです。

加茂川は安来市の鷲頭山が源流です。米子市の新山、奈喜良、日原、宗像を経て、長砂で2つに分かれ、それぞれ中海に注いでいます。全長およそ10km。新しい加茂川は昭和の初めに洪水対策でつくられた川です。

もともとの加茂川は米子市街地を流れ、米子城の外堀や商都米子の動脈として利用されました。橋のもとには、多くのお地蔵さまがまつられ、大山の地蔵信仰を伝える日本遺産のひとつになっています。ただ、川幅が狭いため、米子のまちはたびたび浸水し、1964年(昭和39年)には集中豪雨で約7千戸が浸水する大被害に見舞われました。これがきっかけになって昭和41年から河川整備が始まり、新旧加茂川が固定化しました。

それから半世紀。市民は毎年、8月23日の地蔵盆に合わせて加茂川まつりを行ってきました。この夏はコロナの影響で中止になりましたが、37回の歴史を誇る伝統行事です。また、川辺のお地蔵さま周辺では日ごろから米子地方独特の「札打ち」参りも続いており、市民にとって親しみのある加茂川です。そこで米子市商店街連合会など市民10団体は名称復活の要望を重ね、ついに8月5日に官報で「旧」の冠が取れ、復活が認められました。

これを祝っての「秋の加茂川まつり」です。加茂川広場には屋台が並び、子ども万灯が上がり、春蘭会(山岡福美子代表)の「米子が大好き」という加茂川音頭踊りがあり、渡部紘三さん(加茂川まつり実行委員会総括)や鹿島恒勇さん(加茂川を美しくする運動協議会長)や船越清輔さん(加茂川・寺町周辺のまちづくりを進める会長)らによる「加茂川を語る会」がありました。夏まつり中止を取り戻すようににぎわいました。

加茂川ではカヤック体験、河口の米子港では中海体験クルーズ、川辺の護岸ではお茶席、夜には淀江傘のライトアップもあり、海からながめる米子城や大山、川からながめる町並みなどが好評を集め、市民は水辺空間が楽しめる米子城下町の魅力を再認識していました。

その城下町は久々の人出で、夢蔵ギャラリーでは山岳絵画で有名な松下順一さんのぬりえ体験も大にぎわいでした。米子市長の伊木隆司さんも「いいかも加茂川というより、いいね加茂川です」と手ごたえを感じた様子でした。



春蘭会のみなさん
加茂川のお茶席とカヤック



「海からながめた米子城山、遠くに大山」(松下順一さん作)

鳥取県民みんなで作る芸術文化の祭典「とりアート2020」が倉吉市の倉吉未来中心で始まり
ました。今年で18回目。令和3年3月までコロナの感染予防、拡散防止を図りながら、東部・西部
会場でも開かれます。シニアバンク登録のみなさんも、たくさん出演しています。

開幕日のこの日は鳥取県民話サークル連合会(八島史郎会長)の「聞いてみよう! いなば・ほ
うきの民話」がありました。出演したのは倉吉みんなの会、とっどりの民話を語る会、佐治民話会、
ほうき民話の会—の4団体。それぞれ2人ずつ、8人がお得意の民話を方言豊かに、身振り手振
りを交えて面白く語りました。

このうち、倉吉みんなの会の河野美千子さんは湯梨浜町泊の「甲亀山のいわれ」を説き、サル
と亀の争いが山名の由来になったことを紹介しました。とっどりの民話を語る会の木下伸子さん
も、千代川やブトの由来話「洗足山の鬼」を紹介しました。大きな笑いを誘ったのは、「打吹天女」
を語った土井吉人さん(90歳、倉吉みんなの会)。羽衣を盗まれ、裸になった天女をベテラン芸で
楽しく演じ、会場は盛り上がりました。

ステージでは「ケーナとオカリナの音色を楽しもう」という発表会もありました。音楽講師・大西保
江さん(鳥取市)が指導するオカリナ教室の有志が「カントリーロード」や「パプリカ」など9曲を演奏
しました。

ケーナは南米アンデス生まれの竹の楽器です。「首振り3年」と言われる日本の尺八と同様、唇
で吹奏する難しい楽器ですが、癒やしの音色が人気です。土でできた陶器のオカリナも癒やしの
楽器のひとつです。大西さんは「同じ癒しの音色でも、開管楽器のケーナと閉管楽器のオカリナ、
それぞれに違いがあり、味わいがあります」と説明していました。

中部会場では倉吉ギターアンサンブル(松田晴義代表)の「風に吹かれて」の演奏もありまし
た。



土井吉人さん(倉吉みんなの会)



河野美千子さん(倉吉みんなの会)



ラス・アラスの演奏(右が大西保江さん)

2020年11月7日

鳥取市出身の俳人・尾崎放哉の句を題材にした全国公募書道展「放哉を書く」が鳥取市のとりぎん文化会館を主会場に開かれ、全国から多くの放哉ファンが訪れました。表彰式は高校生の書道パフォーマンスなどで盛り上がりました。

書道展「放哉を書く」は、尾崎放哉を顕彰する放哉の会（柴山抱海会長）が開いているもので、今年で13回目です。今年はコロナウイルスの影響で、応募はいつもの年の4割減、一般・高校・色紙合わせて246点でした。

事務局長の岡村洋次さんによると、全国で多くの展覧会が中止になり、社中や書道教室、高校書道部などの活動が休止したりしたことが原因のようです。そのなかで、高校生の作品に秀作が目立ったといいます。

最高賞の放哉大賞・鳥取県知事賞は、一般が小畑梨奈さん（倉吉市）の「昼だけある茶屋で客がうたってる」、高校が小屋本菜々さん（鳥取城北高）の「島の女のはだしにはだしでよりそふ」、色紙は藤井琴亭さん（琴浦町）の「ふるさと大きな星が出とる」が新日本海新聞社社主賞に選ばれました。

このうち、小屋本さんの作品は放哉が終焉の地・小豆島で詠んだ句です。なじみのない土地で、浜仕事をする女たちと親しくなろうとする放哉の心情を3行の書で表したものです。「放哉俳句の面白さが躍動感を持って伝わってきます。書体を少し傾けたのが憎いですね」と岡村さん。近年、放哉俳句の発掘、発見が進み、書道ファンも競って「新句」に挑戦しているそうです。

表彰式では高校書道部の書道パフォーマンスがありました。八頭高は「いれものがない両手でうける」、鳥取城北高は「咳をしても一人」、鳥取東高は「傘さしかけて心よりそへる」。それぞれ放哉俳句を元気よく大書し、コロナに負けない強い気持ちの大切さを伝えて式典を盛り上げました。

放哉の会は平成27年の放哉生誕130年を記念して、わらべ館や鳥取駅周辺、久松山下など鳥取市内のあちこちに119基の放哉句碑を整備し、全国の放哉ファンに句碑巡りを呼び掛けるなど、俳句や書が盛んな文化都市・鳥取市をPRしています。



放哉大賞(一般)



放哉大賞(高校)



柴山抱海さん

県外の出展者をガイドする
岡村洋次さん(左)

鳥取東高の作品

鳥取市を中心に活動する芸術文化の異業種集団「かよう会」が結成30年になり、市文化センターでサヨナラ・イベントとして記念展を開きました。紙芝居やギター演奏で盛り上がりました。市民は新たな集団の誕生を期待しています。

かよう会は1991年の結成です。絵や書や詩や音楽など芸術文化の力を信じる自遊人の集まりで、最盛期には40人ほどの会員がいて、隔月で例会をもち、情報交換し、それぞれの活動を支え合い、励まし合ってきたといいます。

2代目会長の吉田茅穂子さんによると、会が触媒になって、会員の新しい活動や連携事業が生まれるなど異業種らしい大きな成果があったものの、会員の高齢化で出席率は下がり、例会ではいつものようにリセットの必要性を話し合い、タイミングを探ってきたといいます。不易流行は世の習いです。

そのタイミングが結成30周年記念展です。吉田会長は日本画、清末忠人さんははく製、稲垣晴雲さんは書、紙原四郎さんは切り絵、森文枝さんはちぎり絵、桜井郁枝さんは洋画、初代会長の須崎俊雄さん(故人)は花房睦子さんの詩を板に書作しました。会員の渾身の作品25点が並びました。

これらの作品が並ぶ会場で、平家六栄さんは紙芝居「はだしのゲン」を上演し、山陰ギター協会長でもある門脇康一さんは獣医師・細井亨さんとともにギター演奏を行い、多くの市民が鑑賞しました。

門脇さんらのギター演奏は「ロンド」「禁じられた遊び」「シルクロード」など8曲あり、市民は一流の演奏に聴き入っていました。門脇さんは曲の合間に話題提供して会場を和ませましたが、それによると、指を駆使するギターは脳を刺激するので、健康によい楽器として見直されており、東京などでは品薄状態が続いているそうです。

吉田会長は「ここで一区切りをつけ、また新しい親睦会が生まれることを願っています」と、今後の展開に期待していました。



門脇康一さん



ギター2重奏を楽しむみなさん



かよう会の30周年記念展

鳥取市の賀露地区社会福祉協議会(芥島寿美会長)は県立福祉人材研修センターで男の料理教室を開き、薬膳料理家の石谷泰子さんから薬膳カレーの作り方を学び、みんなで楽しくいただきました。

賀露社協の男の料理教室は年3回開いており、春のピザづくりと花見に次いで2回目です。どれもがおいしくつくれる料理ということで、今回はカレー料理にしました。約20人が集まりました。

講師は鳥取駅前の「Café 木の香り」オーナーの石谷さんです。石谷さんは製薬会社の勤務を経て薬膳インストラクターになり、薬膳の家庭料理の普及に努めています。「おいしく食べて元気に美しく」がモットーです。

石谷さんによると、すべての食材に体を温めたり、冷やしたりする効果があるので、それを知ることで体調をコントロールできる食事ができ、未病(病気ではないが、健康でもない状態)を防げるといいます。また、内臓はストレスや疲れ、睡眠不足などの影響を受けやすいので、良い食材を取れば、肌トラブルも防げるそうです。

そこで今回のカレー料理は、コロナウイルスに負けない、免疫力を上げるキノコと鶏肉の薬膳チキンカレーにしました。

参加者は石谷さんから「母親が子どもを気遣って作った料理が薬膳料理」「料理を作るときは、食べてもらう人のことを考え、愛情込めて作りましょう」などとアドバイスを受け、野菜の切り方から、味付け、盛り付けまで学び、2時間ほどで薬膳カレーを仕上げ、みんなでいただきました。

笑いの絶えないにぎやかな料理教室でした。薬膳カレー、スパイスが効いていておいしかったです。



石谷さん(中央)を囲んで



料理教室の様子



笑いながらも真剣に料理中



美味しくいただきました



キノコ入り薬膳チキンカレー

米子市淀江町にある淀江和傘伝承館で地元の米子白鳳高校が郷土学習で和傘づくりを体験しました。作った傘で傘踊りをするといいです。

指導したのは淀江傘伝承の会(山本絵美子会長)のみなさん。白鳳高校では2年生になると、選択科目の「郷土芸能」で和傘づくりの授業があり、10回ほどの授業で一人一本の傘を作っています。この科目が始まって今年で7年目です。生徒たちが作っているのは、学習発表会の傘踊りで使う白張り踊り傘です。

淀江傘は1821年に倉吉から淀江に来た倉吉屋周蔵が傘屋を開いたのが始まりと伝えられています。来年200年になります。大正時代になると、淀江傘の製造業者は71軒を数え、年間生産量は17万本、出荷先は県内はもとより西日本一円、遠くは関東・東北などに広がりました。

淀江傘は70ほどの工程があり、手間と時間をかけて作られています。その技術は米子市無形文化財に指定されています。山陰地方の雨、風、雪に耐える丈夫さ▽蛇の目の形(男は亀甲型、女は梅の花型)▽柄と傘とをつなぐ子骨の部分に施される糸飾り(桔梗の花びらなど)―が特徴です。

淀江傘伝承の会は和傘伝承館を拠点に、淀江傘の伝統技術を引き継ぎ、人づくりや和傘の魅力を発信しています。地元の児童・生徒に傘づくりを指導しているほか、大山寺や皆生温泉、米子城下町など地元イベントにも積極的に参加し、淀江傘をPRしています。

白鳳高生たちも熱心に傘づくりに取り組んでいました。「傘づくりは難しいけど面白い」と意欲的です。山本代表は「子どもたちに指導するのは楽しいです。子どもたちのなかから、後継者を志す若者が育ってくれたらと願っています」と笑顔で話していました。



生徒に和傘づくりを指導する山本会長



熱心に取り組む生徒たち



生徒がつくる踊り傘



淀江傘(桔梗の花びらの形をあしらった糸飾り)

世界でコロナウイルスが猛威を振るっていますが、古代の日本に疫病を持ち込み、広めたのは国づくりをした大国主命だった—。米子市のふれあいの里で山陰古代史研究会があり、会を主宰する田中文也さんが「疫病と大国主命」について講演し、そんな持論を紹介しました。

田中さんは中国全土を統一した秦(紀元前221～同206年)の方術士・徐福(生没年不詳)の研究を続けています。史記によると、徐福は始皇帝の命を受けて、紀元前219年と同210年、2度にわたって東方の国へ不老長寿の霊薬を求めて旅立ったといえます。3千人の若い男女と多くの技術者を従え、五穀のタネなどを持って出かけたのですが、秦には戻らず、そのまま「平原広沢」を得て王になったと伝えられています。日本各地には、その徐福の伝来地が数多くあります。

しかし、田中さんはこれまでの研究で、徐福が王になったところは中海・宍道湖周辺だったと見ています。大国主命と呼ばれました。青谷上寺地遺跡や妻木晩田遺跡など山陰の弥生時代の繁栄ぶり、大国主命と少彦名命にちなんだ「神無月・神在月」伝承などが根拠です。

田中さんによると、徐福(大国主命)は連れてきた若人や工人たちと全国各地を回り、稲作技術や青銅器・鉄器づくりなどを伝え、山陰・出雲に戻ったといえます。併せてそれまで存在しなかった疫病や寄生虫も全国各地に持ち込み、広げました。青谷上寺地遺跡からは結核が原因で背骨が溶け、変形する脊椎(せきつい)カリエスに侵された人骨が出土しています。

徐福(大国主命)やその子孫たちの国づくり指導は200年、300年と延々と続いたことでしょう。8世紀に完成した「古事記」や「日本書紀」には、崇神天皇(3世紀後半)のころに疫病が流行し、国民の大半が死んだと伝えています。日本最初の伝染病(感染症)の記録です。崇神天皇は奈良・三輪山に大国主(大物主)をまつり、疫病を鎮めたといえます。この故事にちなんで、ゆかりの大神社や狭井神社では、毎年4月18日に「花鎮祭」を開き、疫病除けの神事が続いています。

一方、日本各地には「田の神様」伝承が根づきました。さんばいさま、亥の子さま、幸神さん、道祖神、歳の神など愛称いろいろ。「田の神様は春になると山から下りてきて、秋になると山に戻っていく」「田の神様は春になると出雲からきて、秋になると出雲に戻っていく」などと言われています。これが「神無月・神在月」の由来、大国主が「大黒様」や「大黒柱」として親しまれ、国津神と呼ばれたゆえんです。

田中さんは「秦の始皇帝をだまして渡来した徐福(大国主命)は、日本の国づくりに励み、やがて先住の縄文人(天津神)に国譲りするわけですが、福の神でもあり、崇り神でもありました」と紹介していました。



田中文也さん



大国主命(白兔神社)



結核で変形した脊椎カリエスの人骨
(青谷上寺地遺跡のホームページから)

鳥取市の中心市街地で11月いっぱい、鳥取まちゼミが開かれています。まちづくりレディース鳥取(池本百代代表)の主催。今年で9回目です。若桜街道など6つの商店街はじめ、中心市街地に出店を検討しているところなど48店舗が、プロの知識や技を無料でお客さんに伝えています。今年は全52講座。その一部を紹介しましょう。

昭和歌謡を歌おう！

鳥取まちゼミ・NOHAS

鳥取駅前のサンロード。駅側から入ってすぐのところにNOHAS(ノハス)があります。1階はバー、2階はフリースペース。阪本いづみさん親子が経営しています。フリースペースはいづみさんの「お城」です。得意のいけばなやピアノや編み物を活かして、教室さんまいです。とくに毎週開く歌声喫茶「うたごえ広場」が大にぎわいです。それもそのはず、いづみさんは女性音楽グループ「紅のくれぐれも乙女」のリーダーでもあります。

鳥取まちゼミへの参加は3回目になります。今回のテーマは「昭和歌謡をみんなで歌おう！」。今年はコロナの感染予防対策で、参加者を例年の3分の1に絞り込んで開きました。この日の参加者は年配の6人でした。それでもギターの梶村洋明さん、コーラスの西村知英子さん、林美奈子さん、平野洋子さんがアシストに入り、にぎやかでした。

参加者は、いづみさんのピアノで1時間歌っぱなしです。「幸せなら手をたたこう」「高校3年生」「瀬戸の花嫁」「恋のバカンス」…。歌の合間に話がはずみます。「高校3年生でフォークダンスを踊ったが、待ち遠しくて、ドキドキしたものです」と女性。「高原列車は行く」では朝ドラの話題で盛り上がります。「君といつまでも」は男性参加者のセリフが上手で大受けでした。

最後はコロナに負けるなということで、「上を向いて歩こう」をリクエストし、お開きになりました。参加者はどなたも「マスク越しでしたが、久しぶりにみんなと歌って楽しかった。元気になりました」。

いづみさんは「店を知っていただき、楽しんでいただけたら、それでよいです。昭和歌謡は歌いやすく、それぞれに思い出が詰まっているので、心も体も癒やされます」。リフレッシュしたい方は、NOHASの歌声喫茶「うたごえ広場」をのぞいて見られてはいかがでしょうか。



阪本いづみさん



昭和歌謡スタッフのみなさん



昭和歌謡で心も体もリフレッシュ



NOHAS

鳥取市街地のど真ん中、若桜街道・若桜橋の近くにサービス呉服店が経営する絹の館サービスがあります。常務の渡辺光子さんは、まちづくりレディース鳥取の初代代表です。鳥取県内にいち早く、まちゼミを導入し、店や商店街のファンづくりを進めています。鳥取まちゼミ9年目の今年も、お客様に役立つ3つの講座を用意しました。そのひとつ、「風呂敷包みと活用法」講座に伺いました。

事典などによると、風呂敷の始まりは室町時代らしく、風呂に入る際に衣類を包んでおき、湯上りの時に足をぬぐうのに使ったといえます。他人のものと間違えないよう、家紋などを入れました。風呂場で使ったから風呂敷と呼んだそうです。

やがて商品を包む商売道具になり、江戸時代にはお伊勢参りなどの旅行かばん、頭巾などに使われました。便利で用途が広いだけに、たちまち普及し、よく引き出物に使われました。たいがいの家庭のタンスには2～3枚の風呂敷があることでしょう。

その風呂敷が近年、見直されているといえます。一時、プラスチック袋などにその地位を奪われてきたものの、地球の温暖化防止や環境保全促進などが背景になって、廃プラ運動が広まっています。

そこで買い物袋を忘れても、風呂敷1枚あれば、急場をおしゃれにしのご方法や技術があることを伝えようと、風呂敷講座を開きました。

さて、講座です。渡辺さんは真結びしても、風呂敷なら簡単にほどけることを伝え、風呂敷で素早く買い物袋やおしゃれなバッグ、三角巾をつくる方法を伝え、参加者は何度も体験しました。さらに渡辺さんは水を貯えたり、シャワーとして使える風呂敷も紹介しました。

「たかが風呂敷、されど風呂敷」です。何でも包める風呂敷は防災用品に欠かせないものになっています。「使い勝手の良い風呂敷をいつでもバッグに入れておくと、いざというときに助かりますよ」と渡辺さん。風呂敷のある生活の見直しを勧めていました。



渡辺光子さん



風呂敷でエコバッグづくり



風呂敷が三角巾に早変わり



絹の館さびす

鳥取市の鳥取県立公文書館は開館30周年を記念して、映像フィルムに刻まれた「昭和のとっとり」展を開き、ふるさとの昔の風景を懐かしむ県民でにぎわっています。11月29日まで。

県立公文書館は県政PRや観光宣伝のためにつくった映画フィルムはじめ、「わかとり国体」や「夢みなと博覧会」などのビデオテープを大量に所蔵していますが、その保存、活用に向けてデジタル化を進めており、その一部と個人所蔵の映像フィルムを合わせて公開するとともに、関連資料などを集めて昭和の鳥取県を紹介しました。

公開した映像は、奥日野の鉄山師・近藤家が所蔵する県内最古のフィルム▽全県公園 鳥取県▽砂丘と湯のまち とっとり▽鳥取県政百年(先人たちの歩み)▽明日へ向かってはばたこう(わかとり国体の記録)―など7本。これらの映像は県立公文書館のパソコンで閲覧できるほか、それらのフィルムのなかにある珍しい風景、38コマを写真にして取り出し、展示しました。

その写真には、買い物客でにぎわう米子市の元町サンロード(昭和41年ごろ)▽昭和44年に開業した久松山のロープウエー(昭和51年廃止)▽公設グラウンド(現・鳥取県立博物館)での鳥取しゃんしゃん祭、湖山池のそばを走る特急「やくも」(昭和44年)▽糸へん産業が盛んだった倉吉市の象徴・グンゼ倉吉工場の正門(昭和56年)―など、今では見るできない景色が含まれており、来場者の郷愁を誘っています。

また、昭和27年の鳥取大火をきっかけに、全国初の防災商店街づくりが進んだ鳥取市の若桜街道商店街の再建の様子も写真展示しており、関係者が多く訪れています。

「昭和のとっとり」展を案内する専門員の伊藤康さんによると、鳥取二十世紀梨記念館なしっこ館(倉吉市)や大山自然歴史館(大山町)など鳥取県の関連施設にも多くの映像フィルムやビデオが残っており、それらの発掘やデジタル化作業も今後必要ということです。

鳥取県では県立の図書館・博物館・公文書館・埋蔵文化財センターなどが連携して、それぞれが所蔵する映像を公開する「鳥取デジタルコレクション」構想が進んでおり、令和3年春には県のホームページで、それらの動画が見られるようになる予定です。



伊藤康さん



開設当時は人気を集めた久松山のロープウエーだったが…(1969年)



浜田―新大阪間を走っていた特急「やくも」(1969年)



かつて「山陰の大阪」と言われた米子市。にぎわう元町サンロード(1966年)



明治23年に開設された山陰製糸が起源のグンゼの正面(1981年)

鳥取県老人クラブ連合会(岡森裕会長)は太平記のふるさと・大山町名和で健康づくりのウォーキング大会を開きました。160人が参加し、地域の歴史を学びながら元気に歩きました。

県老連のウォーキング大会は昨年の倉吉市・白壁土蔵群に次いで2回目です。名和支部長・杉原俊雄さんのリードで体をほぐして出発しましたが、毎朝2万歩を歩く杉原さんならではの柔軟体操がユニークでした。深呼吸・背伸び・手もみ・高笑い。やるのはこれだけ。「ワッハッハッハッ！」と大声を上げて笑えば、元気になるから不思議です。杉原さんは「体温が上がれば、病気になりません」と、参加者を激励しました。

さて、ウォーキングは①峠(ねぐら)家—お腰掛けの岩—住吉神社—名和神社の後醍醐天皇コース(1.5km)②名和神社—名和公屋敷跡—長綱寺—的石—氏殿神社—三人五輪の名和長年コース(3.5km)。2グループに分かれ、友歩会の生田清さんらの案内で歩きました。

名和神社は名和長年など一族をまつる元別格官幣社です。海運業などを営んでいた名和一族は、天皇中心の政治を目指して隠岐島を脱出した後醍醐天皇を助けて船上山に立てこもり、「建武の新政」の道を開いた立役者のひとりです。御来屋港など旧名和町のところどころには、その歴史の足跡が残されていて、太平記コース(約13km)が設けられています。その一部を歩きました。

生田さんによると、名和公屋敷跡や長綱寺(名和一族の菩提寺)周辺が名和一族の拠点だったらしく、長綱寺の裏山には約300基の五輪塔がまつられています。五輪群は暴かれるのを防ぐため、土で覆い隠されていたそうです。

また、名和神社の参道には太鼓蔵があります。江戸時代に八頭町妻鹿野の大ケヤキで作られた大太鼓(口径140cm)で、鳥取藩の御用太鼓として使われた後、八橋郡の有志が浄財を集めて払い下げてもらい、名和神社に奉納したものです。実はこの大太鼓には兄弟がいて、同じケヤキで美保神社や賀露神社の大太鼓もつくられています。平成6年には美保神社で太鼓3兄弟の競演があり、話題を集めました。

参加者は秋晴れの太平記のふるさとを満喫し、来年の再会を誓い合っていました。



名和神社をガイドする生田清さん



出発前に深呼吸して高笑い



長綱寺の裏山にある五輪群(大山観光局のホームページから)



マスクをつけてウォーキング

羽柴秀吉が鳥取城を攻めていたころ、東伯耆(鳥取県中部)で何が起きていたか—をテーマにした鳥取県埋蔵文化財センターの講座が鳥取市であり、講師の眞田廣幸さん(倉吉文化財協会会長)が、伯耆にも「たいこうがなる」があったことや羽衣天女伝説にモデルがいたことを明らかにしました。今後の成り行きが注目されます。

秀吉の因幡攻めは、天正8年(1580年)と同9年の2度ありました。それぞれ4カ月ほどの滞陣でした。第1次は鹿野城を攻めて人質を奪い、鳥取城主の山名豊国を降伏させて姫路へ引き返しました。2度目の攻撃は私部城(八頭町)を拠点に因幡に攻め入り、鳥取城を包囲して兵糧攻めを進め、わずか1カ月ほどで餓死者が相次いだといいます。世に言う「渴殺・鳥取城」です。

その鳥取城の救援に向かったのが吉川元春です。しかし、秀吉軍に制海権を奪われたうえに、東伯耆では羽衣石城(湯梨浜町)を拠点にする南条元統らの抵抗で進撃を阻まれます。三徳山では吉川・南条両軍の合戦が日中3度に及んだといいます。

秀吉は鳥取城落城の翌日、南条らの救援に向かいます。吉川軍は馬の山に陣を張り、決戦に備えましたが、秀吉は羽衣石城近くに1週間ほどいて、戦うことなく、姫路に帰陣したといいます。その後は備中高松城の水攻め、本能寺の変へと舞台は転回していきます。

ところで、問題は秀吉が吉川軍と対陣したのはどこかということです。通説では伯耆一宮・倭文神社近くの御冠山ということになっていますが、これまでの現地踏査では陣構えの痕跡が見つかっていないということです。一方、羽衣石城そばの十万寺には、鳥取の太閤ヶ平と同じ規模の主郭(東西70m、南北50m)を備えた陣跡があり、地元の人「たいこうがなる」と呼んでいるそうで、眞田さんは「十万寺の古城こそ、秀吉本陣だったのではないか」と見えています。伯耆にも「たいこうがなる」があったということになれば、羽衣石城の史跡化調査に弾みがつきそうです。

次いでながら、羽衣石城は巨石の山にあります。1366年、南条の始祖・貞宗が築造しました。眞田さんによると、陰徳太平記に貞宗は天の羽衣の生まれ変わりという伝承があるそうです。その孫の元統は、織田と毛利の和睦後、打吹山城(倉吉市)に移りますが、関ヶ原の戦いでは西軍に属し、所領を失います。羽衣石城と打吹山城の主郭(東西70m、南北25m)は、ほとんど同じ規模、構えだったといいます。

民話「羽衣石の天女」は、羽衣石山に天女が降り立ち、岩に羽衣をかけたのが始まりです。やがて天女は昇天し子どもたちが「母さん恋し」と、太鼓を打ち、笛を吹きならしたのは打吹山でした。南条氏の盛衰記が民話となって語り伝えられているようです。



眞田廣幸さん



鳥取の昔話・羽衣石の天女(切り絵は紙原四郎さん作)

東伯耆の主な城郭跡



昔、何万円もしていたカメラが、店頭のかごに山積みして100円や300円で売られています。鳥取市・若桜街道商店街のヤマガタカメラ店(山縣勇太郎社長)。量販店を除けば、市内で唯一のフィルムカメラや関連用品を扱うお店です。今年もフィルムカメラ撮影体験会を開きました。

ヤマガタカメラ店は明治33年の創業です。祖父の長太郎さんが大工町頭にスタジオを開いたのが始まりです。立川町に移り、鳥取40連隊や出征兵士の記念写真を撮り、鳥取周辺の観光絵はがきなども作ってきたといいます。戦後、若桜街道に出て、カメラ販売に業態を変えました。鳥取大火ですべてを失ったものの、カメラの大衆化で業績拡大。3代目社長の勇太郎さんは「フィルム現像だけでも、やっていけました」。

ところが、平成時代になると、カメラのデジタル化が進みます。デジカメは小型化、自動化が当たり前です。撮ったその場で、写真の出来栄が確認できるうえに、現像も不要です。チップさえ替えれば、写真は何枚でも保存できるとあって、たちまちカメラの主流になりました。

勇太郎さんによると、日本のカメラメーカーで黒字経営が続いているのは1社くらいで、フィルム製造を含めてカメラ業界はどこも規模縮小が続いているそうです。カメラを売る店やフィルムを現像する店、ほとんどが姿を消しました。

そんなカメラ事情ですが、こだわる人はどこにでもいるものです。とくにフィルムカメラは絞りやシャッタースピードやフィルム感度などが出来、不出来を左右するだけに、経験や勘はもちろん、センスも問われます。「いいカメラは人生を変える」と言われるごとく、フィルムカメラには根強いファンがいます。そこに目をつけた勇太郎さんは、3年前からまちゼミでフィルムカメラの撮影会を開いています。

この日の体験会には、写真が趣味の市内のご夫婦が二眼レフを体験しました。左右が逆に映るファインダーをのぞいて、ピント合わせや構図決めに苦労しましたが、秋晴れの真教寺公園で無心にシャッターを切っていました。二眼レフ初体験の奥様は「フィルムカメラは奥が深いですね」と満足そうでした。



山縣勇太郎さん



参加者は袋川周辺で
二眼レフを体験



山縣写真館発行の絵はがき(智頭橋)



カメラのヤマガタ

鳥取市の歴史博物館「やまびこ館」は鳥取城の攻防を再現する山城合戦イベントを開きました。400年ほど前の戦国時代、久松山・鳥取城であった「渴え殺し」、や羽柴秀吉が布陣した本陣山・太閤ヶ平を知ってもらうのがねらいです。久松山を考える会(亀屋至郎会長)が協力しました。

山城合戦イベントには小学生や家族連れなど約20人が参加しました。久松山山頂にある鳥取城山上の丸と、直線距離にして約1.5km離れた秀吉の本陣・太閤ヶ平の間で、太鼓やほら貝の音が聞こえるかどうかを体験するものです。久松山には考える会のメンバー、本陣山には参加者が登りました。

この日は、あいにくの小雨で、山頂には霧も。合戦気分上々でしたが、音は雨に消されがち。それでも太鼓の音はしっかりと届きました。久松山から太鼓の音やハンドスピーカーを使った声が届くと、参加者からは「おお～」と声があがっていました。

鳥取城の攻防戦は「鳥取の渴え殺し」として有名です。秀吉軍2万人は周到に因幡のコメを買い占めたうえで、太閤ヶ平を拠点に鳥取城を取り囲み、徹底した兵糧攻めを展開しました。昼夜を問わず鳥取城に鉄砲を撃ちかけ、大声を上げ、炊飯のにおいなども流したことでしょう。鳥取城内は1カ月ほどで餓死者が相次ぎ、籠城3カ月ほどで落城しましたが、生き残った兵士も開門後の給食で胃けいれんなどを起こし、たくさん死んだと伝えられています。

鳥取市教育委員会の細田隆博さんによると、太閤ヶ平は織田信長を迎えるためにつくった陣で、何年もここで生活できるような御殿もあったといえます。その発掘調査が待たれるところですが、秀吉軍の土木建築集団の存在は、その後の天下統一の下支えになったといわれています。



太閤ヶ平を目指す参加者



ほら貝を吹く亀屋会長



久松山に向かって太鼓を鳴らします



太閤ヶ平から久松山を望む

2020年11月24日

鳥取まちゼミの人気講座「ひょうたんライトを作ろう」が若桜街道商店街の金居商店であり、今年も10人が好みのひょうたんに穴をあけて、光があふれるオンリーワンのライトをつくりました。

講師は鳥取県愛瓢(あいひょう)会代表の岡本利之さんです。岡本さんは4年前から愛瓢会に入り、ひょうたんづくりやひょうたん加工に取り組んでいます。仲間づくりを目的に公民館やまちゼミなどで、ひょうたんライトづくりを指導しています。

岡本さんによると、ひょうたん栽培は1年がかりです。できてから水につけて中身を取り出し、乾燥させて使います。素材づくりに結構、手間ひまが掛かります。毎年300個ほどつくっているそうです。ひょうたんは繊維が入り組んでいて、竹のように簡単に割れることがないので、いろいろな加工が楽しめるのが特長です。

この日の講座も、参加者は好みのひょうたんを選び、思い思いにデザインを書き込み、それに沿って千枚通しで穴を開けていきました。岡本さんは千枚通しの使い方、ひょうたんの持ち方、等間隔の穴開け、仕上げ技術など指導しましたが、「ひょうたんライトづくりに絵のセンスは関係なく、感性だけで十分。楽しくつくれば、よい作品になります」と励ましていました。

参加者は「ライトが入ったところを想像しながらデザインするのが難しく、穴開けで手も疲れましたが、夢中になってつくりました」と、3時間ほどで個性豊かなひょうたんライトを仕上げ、満足そうでした。



教室のようす。岡本さん(左)



無心で取り組む参加者



完成したひょうたんライト



光を入れると

2020年11月25日

鳥取駅前のサンロード、出口の交差点・鳥取民藝館向かいの路地を入ったところに栄養倶楽部鳥取(赤松玲子さん経営)があります。ここで鳥取まちゼミの下半身太り解消講座が開かれました。

赤松さんは肥満予防健康管理士です。見落としそうになるほどの小さなお店(12坪)ですが、オレンジ色の外観が目印です。若桜街道商店街でのチャレンジショップを体験し、現在地で開業しました。13年ほどになります。

「栄養倶楽部鳥取」。どこかの健康食品か健康ジムの全国チェーン？ と見まがう店名ですが、赤松さんオーナーの健康づくりハウスです。独自開発したプロテインシェイクを栄養・体形管理の個別指導つきで販売サービスしています。お店には簡単な運動設備も整っており、多い時で1日30人のお客さんがいるそうです。

赤松さんが体形管理に目覚めたのは20年余り前といいます。中学生だった長男が忘れ物をしたので、走って追いかけたときに苦しくなってしまう、このままではだめだと一念発起したそうです。通い始めたジムでは、運動した後、おにぎりを食べる人を見て、栄養バランスの良いプロテインの開発を思い立ったといいます。

お客さんは、きめ細かな心遣いのある指導を求めて通われているようです。赤松さんは、一人ひとりの話を聞いて、その方にあった運動、栄養管理や生活習慣に至るまでアドバイスしています。まちゼミでも参加者と話をしながら、生活ぶりを聞き、アドバイスを行い、ストレッチや下半身のむくみを解消するマッサージ、トランポリン体操を指導しました。

参加者は「盛りだくさんの内容だった。ストレッチ運動やトランポリン体操など、いろいろな体験ができて満足です。まちゼミを機会にこのお店を知ったので、これからも通ってみます」と話していました。赤松さんは「水分をとることに気を付け、1時間にマグカップ1杯の水を飲み、信号待ちの間にふくらはぎを鍛えるストレッチや、階段を上るときは1段飛ばしにするなど、日ごろから健康寿命を延ばす努力をしていきましょう」と、笑顔で指導していました。



赤松玲子さん



トランポリンを使用して運動



栄養倶楽部 鳥取



道にでている手がきの看板

2020年11月28日

「古事記などにある日本神話の高天原は蒜山」とする古代史研究グループの集中講義が北栄町中央公民館の大栄分館でありました。蒜山に隣接する伯耆は天孫降臨の地、日本始まりの地であることを確認するとともに、国譲りの舞台は中海だったという新説を発表しました。

集まったのは、蒜山高天原神話ロマンの会(橋本勝治会長)▽山陰古代史研究会(田中文也代表)▽倭国古代史研究会(道祖尾義孝会長)―の3団体と古代史ファンの約60人です。それぞれの代表が研究成果を報告し、意見交換しました。

日本神話の高天原は天照大御神など天津神が住んでいたところです。奈良県御所市や宮崎県高千穂町・高原町、熊本県山都町など全国10カ所余りが、そのゆかりの地を名乗っています。

岡山県真庭市の蒜山もその一つです。勝山中学(現・勝山高校)の教頭だった佐竹淳和さんが昭和2年、地域踏査して「神代遺蹟考」をまとめ、「高天原は日留山高原だった」と発表しています。蒜山の茅部神社奥には天の岩戸があり、中蒜山の中腹には宮城の名残があり、地域のすべての神社で天照大御神がまつられています。それらが蒜山高天原説の根拠になっています。

蒜山に高天原があったとすれば、天孫降臨したのはどこか。通説では九州ということになっていますが、倭国古代史研究会など3団体は蒜山に隣接した鳥取県中部とみています。

そのキーマンが徐福です。紀元前3世紀に大陸から五穀の種や多くの若人、工人を連れて日本にやってきたといわれる集団です。縄文海進で海岸が奥地に入り込んだ県中部にも上陸しました。そして蒜山へ行って稲作を伝えた、あるいは降りてきて王国を開いた、見解が分かれるところですが、徐福やその末裔たちは山陰を拠点に全国各地に稲作など先進文化を広めたと考えています。

道祖尾会長によると、天孫降臨の地は北栄町上種の大宮神社と推定しています。周辺からは弥生時代後期の住居跡が多く見つかっています。また、神武天皇の4兄弟は倉吉市の四王寺山で過ごしたといえます。そのふもとにある弥生時代の中尾遺跡からは日本最長の鉄の矛が見つかったばかりです。東郷湖の宮内遺跡からも、やはり日本最長の弥生時代の鉄剣などが発掘されており、道祖尾会長は「県中部に王がいた証拠」と言います。

田中代表は松江市の船神事・ホーランエンヤで、権伝馬船を繰り出す中海5地区の神社祭神が国譲りに登場する神々で、しかもみな大山・蒜山が見えるところにあることを突き止め、国譲りの交渉は出雲の稲佐の浜ではなく、中海の「否さの浜」で行われたのではないかと新説を紹介しました。



蒜山三山(天の岩戸がある茅部神社から)



道祖尾義孝さん



橋本勝治さん



田中文也さん

紀元前200年頃は海拔4m のところに海があった(伯耆の海辺)

2020年11月29日

とりアート2020の東部フェスティバルが11月の2日間、鳥取市のとりぎん文化会館であり、若いエネルギーがはじけました。シニアバンク登録者も新しい試みに挑戦しました。

とりアートのステージは、ホールを避けてフリースペースに設けられました。出演者と客席の一体感づくりがねらいです。コロナ禍にあっても、県民みんなでつくる文化の灯を絶やすなと、換気に配慮しつつ、仕切りのない交流と発表の場づくりを工夫しました。

ステージも新しい取り組みが続きました。尺八のTERU功山さんはカプリス弦楽四重奏団とコラボして、「メロディー」「恋人よ」などのポップスに挑戦しました。鳥取市の音楽家・上萬雅洋さんが尺八、バイオリンの譜面を作り、和洋合体が実現しました。

カプリス弦楽四重奏団は鳥取市交響楽団のメンバーが中心になってつくっており、いつもは仁風閣でコンサート活動を行っています。かつてTERUさんが仁風閣館長だった縁で、夢のコラボに発展しましたが、TERUさんは「新しい音楽を多くの県民に届けたい」と、演奏後も気分上々でした。

箏・てまり会(菊弘瀬恭子代表)は小・中・高校生の若いメンバーで、ジブリ音楽のヒット曲「いつも何度でも」と石垣征山作曲の「深みどり」を演奏しました。こちらは尺八のパートをバイオリンに変え、久保田新平さん(桜ヶ丘中)と上萬寧音さん(鳥取西高)が友情出演しました。演奏の途中には箏や弦を擦ったり、たたいたり、手拍子も入れたり、来場者を魅了しました。

日本舞踊鮎の会(花柳鮎代表)も若手8人がステージに立ちました。日舞の所作で映画音楽「This Is Me」を舞い、踊りました。花柳代表によると、お弟子さんたちが自ら考え、振り付けたそうで、ポップス曲と日舞のコラボに客席は驚いていました。

大トリを飾った鳥取ベンチャーズは、ステージとは真反対の踊り場がステージ。お客さんはイスの向きを変えてテケテケ・サウンドを楽しみました。リーダーの宮部兼寿さんたちは、コロナ禍でイベントがほとんどなかっただけに、久々の晴れ舞台が心地よさそうでした。

東部フェスティバル・企画運営委員長の井上拓也さんは「鳥取の明日の文化を開いてくれる若人に出演の機会が用意できてよかったです。出演団体にもいろいろ挑戦していただきました」と話していました。



鳥取ベンチャーズのサウンドはじける



尺八のTERU功山さんとカプリス弦楽四重奏団の共演

2020年11月29日

若桜鉄道90周年を記念して地元の音楽デュオ・MUMIN(ムーミン)が列車1両を借り切ってコンサートを開きました。満員のお客さんを乗せた音楽列車は若桜—郡家間を往復し、若桜鉄道の節目を祝うとともに、「これからも若桜谷の足となって、どんどん走れ」と応援しました。

ムーミンはピアノの六三四さんとボーカルの西村知英子さんの音楽2人組です。西村さんは石川県から縁あって八頭町に移り住み、ウクレレとギターをミックスしたようなミンミンという珍しい楽器を楽しんでいます。6年前から好きな音楽で地元で恩返しをしないと、「若桜めぐり」「カーネギーホーム丹比」「安らぎのさと八東」など若桜鉄道にまつわるフォークソングを作り続け、その数は30曲もあります。

若桜鉄道は郡家—若桜間19・2km(9駅)を約30分で結んでいます。1930年の開通。2020年12月1日で「90歳」になりました。2008年6月には沿線の駅舎や鉄橋など鉄道関連施設が国の登録有形文化財になりました。とくに終着駅の若桜駅には駅舎はじめ、プラットフォーム、給水塔、手動式転車台、流雪溝など多くの設備が開通当時のまま残り、昭和の雰囲気を楽しめるとあって、多くの観光客や鉄道ファンが訪れています。

若桜鉄道は第3セクターで運営しており、生き残りに向けて「昭和号」「八頭号」「若桜号」の観光列車を導入しています。それらの車両をデザインしたのは、JR九州の豪華寝台列車「ななつ星」を手がけた工業デザイナー・水戸岡鋭治さんです。

今回の列車コンサートは、若桜鉄道観光列車利用促進キャンペーンで実現しました。新型コロナウイルスの影響で落ち込んだ需要を呼び戻すため、若桜・八頭両町民を対象に令和3年3月末まで観光列車を無料で貸し出すというものです。対象外の人や団体でも5万5千円という安さです。若桜鉄道によると、列車を利用した結婚式や同窓会、忘年会などを期待しているといいます。

さて、列車コンサートは満席の30人を乗せて出発しました。ムーミンの音楽仲間や知人も応援に駆け付け、若桜—郡家の往復でオリジナル曲はじめ、「ふるさと」「上を向いて歩こう」など15曲をみんなで歌いましたが、マラカスや手拍子で大盛り上がりでした。折り返しの郡家駅では、Book(本名・福本弘文)さんがマリオネットの麒麟獅子を披露し、参加者はサプライズの演出に大喜びでした。

西村さんは「若桜鉄道に乗りながら若桜鉄道の歌を歌えるなんて夢のよう。みなさんと夢が叶えられて、とってもうれしいです」と胸を熱くしていました。



列車コンサートに集まったみなさん(郡家駅)

ムーミンの六三四さんと
西村知英子さん

マリオネットを披露する Book さん

鳥取県経済同友会西部地区(松村順史代表幹事)は、日本最大の砂州で「国引き神話」の綱になった弓浜半島の成り立ちや歴史などをまとめた冊子「弓浜半島物語」を発行しました。鳥取県の発展史がよくわかると評判です。子どもたちのふるさと教育読本に活用してもらうため、県西部9市町村の小学校に贈りました。希望者にも300部限定で無料配布しています。

編集したのは同会ふるさと教育委員長の石村隆男さんです。郷土史研究家の黒田一正さん(伯耆の古代を考える会)が主に古代から中世の歴史を担当しました。冊子は弓浜半島の地形や成り立ち▽古代の神話や地名考▽たたら製鉄の歴史▽弓浜半島開拓の歴史—など6章からなり、弓浜半島の歴史年表や用語集もつけています。B5判36頁。

弓浜半島はおよそ全長20km、幅4kmです。米子城跡・城下町や皆生温泉を根っこに、中海と美保湾を隔てるように美しい弧を描き、日本海の交流拠点・境港へと続いています。大山と一体となった景観が自慢で、白砂青松100選にも選ばれています。

石村さんは「なぜ、その場所に弓形の半島ができたのか」疑問に思って調べたところ、弓浜半島が鳥取県や山陰の歴史、文化を開いてきたことがわかり、1年がかりで「弓浜半島物語」をまとめました。

それによると、弓形の砂州をつくったのは日野川からの砂と美保湾流と東西の強風の合作です。島根半島と中国山地に挟まれた地溝帯(美保湾・中海・宍道湖)には、東西に風が吹いています。また、対馬海流は大山町あたりにぶつかって時計回りの美保湾をつくり、これに日野川からは日野郡などの鉄づくりに伴うかな流しで大量の砂が供給され、弓浜半島が誕生しました。今から千年ほど前、平安時代のことです。

砂地の弓浜半島は不毛の地でしたが、江戸時代に60年かけて農業用水・米川がつくられると入植者が増え、綿づくりの一大産地になりました。境港や美保関には北前船が入り、日野郡の鉄が綿とともに全国へ送り出され、鳥取藩の財政を支えました。明治時代の終わりごろ、山陰にも鉄道の時代が来ました。山陰の「文明開化」の始まりです。その発祥地は境港でした。観光ブームに乗って皆生温泉の開発も進み、米子市内には路面電車が走りました。

日中戦争のころには皆生温泉に傷病兵の転地療養所ができ、米子医学専門学校(現・鳥取大学医学部)のルーツになりました。平坦な弓浜半島とあって、太平洋戦争のころには陸軍の両三柳飛行場(現・ゴルフ場と陸上自衛隊米子駐屯地)と海軍の美保飛行場(現・米子鬼太郎空港)、2つの空港ができました。米子鬼太郎空港は大型フェリーが入る境港とともに、山陰の国際化の窓口になっています。

そして弓浜半島ではいま、近未来を開く大型バイオマス発電事業や遊休農地を活用した芝生産プロジェクトなどが進行中です。



石村隆男さん



大山から望む弓ヶ浜半島

(写真はいずれも石村隆男さん提供)



美保基地航空祭(昭和38年)



米子陸軍飛行場

「大山を詠む！」大山俳句大賞の表彰式が米子市の日本海新聞西部本社であり、全国から寄せられた1400点余りのなかから、一般の部は定常まゆみさん(琴浦町)、子どもの部は高見真依さん(中山小6年)がそれぞれ大賞を受賞しました。新日本海新聞社、大山山麓・日野川流域観光推進協議会主催、鳥取県社会福祉協議会共催。

大山俳句大賞は大山開山1300年祭を記念して始まったもので、今年で3回目です。北海道から宮崎県まで、全国36都道府県から1427点(一般1074点、子ども353点)が寄せられ、遠藤甫人さん(鳥取県俳句協会副会長)を選考委員長に佐藤夫雨子さん、由木みのるさん(同顧問)、中村襄介さん(同理事)の4人が審査しました。

応募は大山に関する事なら何でもよく、四季折々の大山の景色や自然や行事、祈りの山・大山の歴史、大山さんに守られていることへの感謝—など幅広い作品が集まりました。審査は10月に行われ、一般の部は定常さんの「大山の大パノラマを鳥渡る」、子どもの部は高見さんの「北壁をながめ楽しい紅葉狩り」が大賞に選ばれました。

定常さんは7年前から公民館の俳句教室に通っており、いつも見慣れた大山をバックに飛ぶ渡り鳥を見て、ひらめいたそうです。「初めての大きな賞で、びっくりしています。これを励みにがんばります」と喜んでいました。高見さんは家族と毎年行く紅葉狩りを詠みました。北壁のいろいろな色が楽しかったそうです。

表彰式で遠藤委員長は、大賞句について「広大な風景を素直に詠んだのがよかった」とほめました。遠藤委員長は「良い俳句は情景が浮かび、気持ちが伝わる作品」と指摘し、参加者に日々の暮らしのなかでの俳句づくりを勧めていました。

大山俳句大賞には南部中、大山中、中山小、大山西小の4校が団体に応募し、特別賞が贈られました。



遠藤甫人さん



高見真依さん



定常まゆみさん



大山俳句大賞選考会

2020年12月5日

大山について学び、考える「大山講座」が米子市の日本海新聞西部本社でありました。大山1300年祭(2018年)にちなんで誕生した市民講座で、今年4年目です。歴史と自然の2講座があり、講師はそれぞれ「大山さんのおかげ」を説きました。新日本海新聞社、大山山麓・日野川流域観光推進協議会主催、鳥取県社会福祉協議会共催。

歴史講座は境港歴史研究会代表の根平雄一郎さんが大山を開いた金蓮上人と、その末裔について紹介しました。末裔とはNHK大河ドラマの主人公・明智光秀役の長谷川博己さんです。年明けのNHK番組「ファミリーヒストリー」に登場するそうです。

根平さんは郷土史研究で末裔を突き止め、大山講座で発表したところ、NHKの番組担当者の目に留まり、1年がかりの取材を経て放送実現につながったといいます。「郷土史研究の成果が全国の茶の間に届くことになり、この上ない喜び。大山さんのおかげです」と根平さん。大山寺の全国紹介にもつながる大ホームランになりました。

さて、大山開山にまつわる文書は、鎌倉時代の「撰集抄」と「大山寺縁起」があります。それによると、獵師が山に入って獵をしていたところ、衆生を救うという地蔵菩薩に出会い、これまでの殺生を悔い改めて修行を始めました。金蓮上人と呼ばれました。大山の地蔵信仰の始まりです。

明治時代の「大山雑考」(沼田頼輔著)には、金蓮上人(俗名俊方)は出雲国玉造の人で、その子孫は長谷川というとあります。根平さんはこれを頼りに調査を進め、玉造温泉の老舗旅館、長楽園・長生閣・保性館グループがその末裔と突き止めました。長谷川博己さんの父で、昨年亡くなった長谷川堯さん(武蔵野美大名誉教授)も、この一族です。

根平さんは大河ドラマ「麒麟がくる」に関連して、羽柴秀吉の備中高松城攻めや本能寺の変に話を進めましたが、備中高松城の水攻めでは大山寺の豪円僧正の雨乞い祈禱が実って城明け渡しにつながった史実を紹介しました。

「ファミリーヒストリー」が大山寺や明智光秀や本能寺の変をどのように描くのか興味の尽きないところですが、国民の関心事のなかに、鳥取県の歴史も加わることになり、まさに「大山さんのおかげ」と言えそうです。



根平雄一郎さん



金蓮上人の墓(寂静山)



大山寺であったファミリーヒストリーの取材風景

大山講座の自然編は大山町教育長の鷲見寛幸さんが講師です。「大山の自然と私たちの暮らし」について、あらまし次のように語り、西日本最大のブナ林がある大山の恵みを紹介しました。

大山(1729m)は1万5千年前まで火山活動が活発でした。5万年前の大噴火では、火山灰が偏西風に乗って静岡県あたりまで飛び、降り積もったといえます。森林限界は富士山で2500mですが、大山の場合は6合目1350mあたりです。独立峰の大山は日本海からの季節風をまともに受けて、高木は育たず、東西南北で山容を変えています。独立峰のため、「ダイセン」を冠する固有の動植物が多くいて、自然の宝庫を誇っています。そして大山全体には西日本最大のブナ林が広がっています。

その自慢のブナ林は4～5合目が中心です。中の原スキー場近くの宝珠山にある大ブナ(幹回り約5m、樹齢推定300年)が最大のもので、ブナは水分を多く含むため、家具や建築材に不向きですが、保水力に優れ、ヨーロッパなどでは「母なる森」と呼ばれています。試算によると、幹回り2m(樹齢100～150年)のブナで約8tの水を貯えるそうです。500mlのペットボトルで1万6千本。そんなブナの木が、大山にはあちこちにあります。

大山は「緑のダム」そのものです。私たちの生命の水になり、水田を潤し、ミネラルを含んだブナの水は地下水となり、川や海に流れ込み、プランクトンを育て、魚介類を育てています。「大山さん」に感謝です。

大山には食べておいしい山野草、食べて体に良い薬草が多くあります。薬草では、胃を丈夫にするタンポポ、ヨモギ、リンドウ▽下痢止めならゲンショウコ▽脳血栓予防にツククサ▽高血圧予防にドクダミ、ワラビ▽糖尿病ならタラノキ、カキドオシ、ヒルガオーなど。これらも大山の恵みです。

近年、大山でナラ枯れが増えてきました。併せて猛毒のカエンタケ(火炎茸)も増えています。江戸時代の書物には、カエンタケはナラ枯れとともにやってくるがあります。なぜ、いまか。かつてナメコは倒木にびっしり生えていたものです。ところが、最近の生え方はまばらになりました。キノコは木を土に返します。キノコが少なくなると、森が育っていないことを暗示しています。山の木を使わなくなったことや地球温暖化などが原因かもしれません。

私たちの大山が気がかりです。大山に関心を寄せましょう。大山の素晴らしい自然を未来に続けていくために、私たちは私たちのできることをやっていきましょう。



ブナ林の分布



鷲見寛幸さん



大山・中の原スキー場近くにある大ブナ



大山・宝珠山のブナ林

鳥取市の鹿野公民館で女性リーダーが集まって「みんなのつどい」があり、整理収納アドバイザーの小谷裕美さんから「年末の大掃除」について学びました。クイズや実演を交えての楽しい講演で、参加者は「目からウロコ」と大喜びでした。

「みんなのつどい」は健康増進や認知症予防など暮らしの向上を目的に毎年開いており、今年は「生活習慣病の予防」と「年末の大掃除」がテーマです。約20人が参加しました。

講師の小谷さんは接客業の仕事を辞めた後、10年前に整理収納アドバイザーの資格をとりました。片付けや整理整頓のスキルを持った人です。多いときで年に4～5回、片付けのアドバイスをしています。小谷さんのモットーは「手抜き」です。掃除などは苦手なので、大掃除のまえに日々の小掃除が大事だといいます。

今回の講座でも、手間をかけずにきれいを保つ方法を伝えました。例えば棚の上に物をおかない、使いやすいように掃除道具はひとつにまとめて収納する—など。また、掃除する場所によって掃除する日があるそうです。風呂場や窓ふきやキッチンなどは湿気の多い日、押し入れやくつ箱などは晴れて乾燥した日。湿り気がないと、ふき掃除の効率が上がらないからです。「天気が良いから掃除でも」というのは間違いと指摘されて、参加者から「えーっ」と驚きの声が上がっていました。

小谷さんは掃除の楽しさや工夫を伝えるとともに、「片付けは後始末ではなく新しい生活の始まりです。年末に片付けをして、すっきりとした気持ちで新たな年を迎えましょう」と励ましていました。

参加者は「天気の話や掃除道具の使い方など目からウロコの話がたくさん聞けてよかった。帰ってすぐにやってみなければ」と意気込んでいました。



小谷裕美さん



色紙を使ってそうじクイズに答える参加者



網戸掃除を実演する小谷さん



障子のさんの掃除を体験する参加者

2020年12月6日

岩美町出身の外交官で初代国連大使を務めた澤田廉三が亡くなって50年。これを記念したフォーラム「愛郷・外交官、澤田廉三の生涯」が出身地のいわみんホールでありました。「愛国は愛郷より」が口癖だった澤田。郷土の偉人をたたえるとともに、小説「愛郷」の出版を祝いました。

小説「愛郷」は地元の元高校教師・片山長生さんが書いたものです。外交官兄弟の澤田節蔵・廉三とその妻・美喜の物語をNHKの歴史大河ドラマに取り上げてもらうため、その原作本として書きました。節蔵は戦前日本の国際連盟脱退に抵抗し、廉三は戦後日本の国際社会復帰に尽力し、美喜は戦後日本の混血孤児を救済したことで有名です。それぞれ戦前、戦後の日本を動かした人たちです。

小説は廉三の一代記の形で史実に基づき、実名で書かれています。小説の舞台は明治時代半ばから日本が国連に復帰する昭和30年代まで、およそ80年間。日本や世界が戦争を繰り返した時代です。郷土の外交官は、その渦中にいました。

本は「なぜ日本は戦争に突き進んだのか」「満州事変や日中戦争の内実はどうだったのか」「その時、政権の中核は何を考え、どう動いていたのか」などに迫り、天皇とのやり取りや密室での会話は、手紙や手記などを基に再現したといえます。小説なので読みやすく、日本の現代史がよくわかると好評です。文科省は2022年から高校教育に近現代の世界史・日本史を学ぶ「歴史総合」を導入することにしており、その副読本としても期待されています。

さて、フォーラムです。澤田廉三顕彰会（澤田廉路会長）の旗揚げイベントになりました。衆議院議員の石破茂さんをゲストに招き、およそ120人が聴講しました。

石破さんは講演で、但馬選出の衆議院議員・斎藤隆夫が「何のための戦争か、どのように終わらせるか」と国会でただしたところ、反軍演説だとして議員除名されたことなど、民主主義が破たんしていた戦前の姿を紹介するとともに、戦後はアメリカに気兼ねして現代史を教えない歴史教育の問題点を指摘しました。さらに戦後75年もたっているのに、日本は独立の在り方をあいまいにしたままで、貧富の格差も拡大しており、民主主義は危機を迎えていると問題提起。日本の歴史を変えるのはいつの時代も地方から、小説「愛郷」に学ぼうと訴えました。

フォーラムでは地元音楽グループ・Amyu（河下哲志代表）の演奏をBGMに小説の朗読や片山さんの解説などがありました。顕彰会の澤田代表は「日本の国際的な自立、世界平和を目指した郷土の偉人の志を受け継いでいきたい」と誓い、顕彰活動の活発化を約束していました。



片山長生さん

顕彰会代表の
澤田廉路さん基調講演する衆議院
議員の石破茂さんフォーラムをショーアップする
Amyuのみなさん

「コロナに負けるな」と、はがき出し運動を続けている倉吉市の小鴨シニアクラブ(北村孝雄会長)は、「届きそうな小さなはがき」という応援歌をつくり、小鴨公民館で発表会を開きました。カラオケCDをつくり、歌とともに、はがき出し運動を広げるといいます。

作詞したのは北村会長、作曲は高校の元音楽教師・佐々木道也さん(湯梨浜町)です。小さなはがきに思い出や明日の夢や地球の平和を託し、ポストに入れる気持ちを表したもので、佐々木さんはだれもが口ずさめるよう、ゆっくりしたテンポで明るい曲に仕上げました。佐々木さんによると、鳥取県中部出身の音楽デュオ・ペペが歌ってくれることをイメージしてつくったといいます。

発表会にはシニアクラブの会員約20人が出席しました。佐々木さんの指導で「届きそうな小さなはがき」をハミングし、応援歌の完成を祝いました。佐々木さんはよし笛で「里の秋」なども披露し、シニアクラブの活動にエールを送りました。

シニアクラブのはがき出し運動は今年4月から始まったものです。コロナウイルスの感染拡大防止で外出自粛が求められ、それに伴って出会いや交流が減り、だれも運動不足になりがちです。そこで会員が友人や知人や孫などにはがきを書き、ポストに入れに行くことで、心と体のダメージを取り除こうと取り組んでいます。

「コロナに負けるな」というのはがき出し運動。スマホやパソコンの普及で、手紙やはがきを出す機会が減っているだけに、はがきの文面を考えたり、絵手紙に挑戦するきっかけにもなるなど、県内外で運動が広がりつつあります。

県内のあちこちの図書館では、手紙の書き方や絵手紙の作り方などのコーナーが誕生しているほか、NHKの「所さん！大変ですよ」やFM東京の「サンデーポスト」などの全国放送にも取り上げられ、鳥取県発の元気イベントとして成長しています。



「届きそうな小さなはがき」
を作詞、作曲した2人



よし笛を演奏する佐々木道也さん



はがき出し運動の紹介パネル

届きそうな小さなはがき
遠くの宇宙の話をすれば、心が弾む
一億光年程よい距離に神様が
届きそうな、届いてほしい
心を込めた、小さなはがきの旅する思い
載せる言葉を、はがきに書いて、出かけてみよう
あなたとポストの、程よい距離の、思い出ふるさと
届きそうな、届いてほしい
心を込めた、小さなお願い、平和の歌を
元気にします、元気なようね、うれしい便り
夕陽とあしたの、程よい距離に、神様が
小さな幸せ、届いたはがき
折りを込めて、平和な地球に、みんなの地球

日南町の生涯学習講座「やさしい国語」の最終講座が町役場であり、中永廣樹さん(鳥取県スポーツ協会会長)が徒然草を解説しました。参加者は鎌倉時代と現代の日本人に共通する「もののあはれ」について学びました。

「やさしい国語」講座は平成29年から始まり、今年で4年目です。源氏物語に続いて、昨年からは徒然草を題材にしてきました。今年も22人が受講し、年間3回ありました。

徒然草は吉田兼好が書いた随筆で、日本三大随筆のひとつです。鎌倉時代末期の作といわれています。書き出しの「つれづれなるままに、日暮らし、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ」が有名です。心に浮かぶことを面白おかしく書いてみたといったところでしょうか。その徒然草から現代人にも通じる人生論、人間論、社会論などを学びました。

この日は四季の移り変わり、とりわけ新年を迎えるころの趣について学びました。そこには約700年前の年末も人々は忙しく正月の準備をしており、大みそかには夜中をすぎても騒いで浮足だったものの、新年を迎えると、お墓参りをするなど、とたんに静かになり、厳かになっていく様子が見られます。

中永さんは、兼好が生きた時代も、今と変わらない新年を迎える気持ちがあったことを紹介し、懐かしい風習や習慣、心情を伝えるのが随筆の面白さだと解説しました。併せて長い歴史の中で変化が起こり、清新さが薄れてきているとも指摘し、昔の風習やいわれなどを子どもたちにしっかり伝え、日本人の心をつないでいまいと説いていました。

講座終了後、中永さんは受講生一人ひとりに修了証を贈りました。受講生は「楽しかった。先生の授業は面白く、テンポもよいのでまるでドラマを見ているようでした。来年もぜひ参加したい」と、やる気満々でした。



中永廣樹さん



修了証を受け取る参加者



講座の様子

2020年12月12日

鳥取市の桃の里・神戸地区の公民館で「かんど冬の祭典」があり、マジックや落語やマリオネットの上演などで楽しいひと時をすごしました。

神戸公民館の冬の祭典はクリスマス前の恒例行事です。地域挙げて公民館をイルミネーションで飾り、ブタ汁などを食べながら演芸を楽しみ、住民の交流に役立てています。シニアバンク登録の芸達者たちもゲストで招かれ、イベントを盛り上げていますが、この冬はコロナ禍とあって、飲食は中止になり、演芸の観覧と子ども花火だけになりました。

シニアバンクから出演したのは、マリオネットの石田一高さん(劇団どんぐり代表)と福本弘文さん(麒麟でいっぱい代表)。石田さんはマリオネットで、かわいい女の子のリコーダー演奏や尺八名人・アンクルTERUさんの尺八演奏、お藤ばあさんの長生き音頭、ダンゴ虫ダンスを次々に繰り出し、観客は大喜び。お藤ばあさんが「100歳になってお迎えが来たら、追い返せ」と客席を回ると、大人たちは手をたたいてうれしそう。子どもたちは石田さんの指導でマリオネットの動かし方を体験しました。

福本さんは7年がかりで作った因幡の麒麟獅子舞のマリオネットを紹介し、笛とカネのおはやしに合わせ、16本の糸を繰って舞う獅子舞を演じました。福本さんによると、麒麟獅子舞は因幡の138カ所の神社に伝わっているものの、舞い手不足などで減りつつあり、伝統芸能保存のために、舞い方などを伝えるマリオネットをつくったといいます。

手さばきや話術が得意の石田さんはマジックもたしなみ、スカーフやお札やロープ、リングなどを使って手品も披露。新聞紙が千円札に、さらに1万円札に変わっていくと、会場から大きな拍手が起こっていました。小学2年生の男の子は、ステージにくぎ付けでした。

落語もあり、舞台歴9年という市内タクシー会社役員の山田稔哉さん(39)は、「動物園」という題材で笑いの大切さを説いていました。

江山学園PTA副会長の山本賢璋さんは、今年春に閉校した神戸小学校110年の足跡をスライドで紹介し、卒業生は1,652人だったと報告していました。



猩々を操る
福本弘文さん



お藤ばあさん



ロープ・マジック(右が石田一高さん)



みんなでダンゴ虫ダンス

2020年12月13日

鳥取市国府町の殿ダム交流館で、たこづくり教室があり、30人余りの親子が倉吉市のたこづくり名人・黒川哲夫さんから手ほどきを受け、たこをつくりました。この日はあいにくの雨で、たこ揚げ大会はお預けになりましたが、「正月には必ず揚げよう」と約束していました。

まちづくり・いきいき成器の会(山崎豪太郎会長)の主催です。殿ダム広場(約1.5ha)の有効活用を狙いに毎年春に開いているもので、今回で8回目です。イベント名は因幡万葉湖・たこ揚げ大会。「たこ揚げは正月のもの」という要望を受けて、正月前の開催になりました。

たこづくりの前に、黒川さんがたこ揚げの歴史を説明しました。それによると、たこは平安時代に中国から入ってきたものらしく、「イカのぼり」と呼んでいたそうです。江戸時代には子どもの成長や出世を願って武者絵や金太郎などを描き、正月に盛んに揚がったそうです。幕府の自粛要請があったものの、庶民は「イカのぼり」を「たこ揚げ」に名を変えて続けたといいます。その名残で、倉吉市ではいまでも「イカのぼり」と呼んでいます。

この日作ったのは倉吉イカです。真四角の和紙に耳のような赤紙がついているのが、倉吉イカ独特のデザインです。これに、参加者はクレヨンやマジックで「鬼滅の刃」や「来年の干支」など思い思いの絵を描き込んでいきました。裏を竹ひごで支え、糸を通し、和紙の一本足を垂らして完成です。成器公民館のみなさんは、コロナ退散を願って2m大の「アマビエ」の六角たこをつくりました。

残念ながら、この日は朝から氷雨に微風、芝生広場もぬかるみ、たこ揚げ大会は中止になりましたが、参加者はカレーライスで昼食をとったあと、お開きになりました。

いきいき成器の会は毎年、殿ダムのPRと地域活性化に向けて野外音楽祭やウォーキング大会なども開いています。



黒川哲夫さん



たこづくりを指導する黒川さん



ちびっ子も参加



大だこづくりに挑戦

鳥取県社会福祉協議会は大山山麓・日野川流域観光推進協議会や新日本海新聞社とともに「こども大山クイズ」を実施していましたが、その成績優秀者11人が決まり、記念品を贈りました。夏休みの大山野外講座に代わるイベントで、「密」を避け、親子や家族で大山を楽しんでもらう趣向でした。設問は大山の自然・歴史・環境の10問と「大山の自然を守るために、あなたは何をしますか」という作文でした。大山町教育長の鷲見寛幸さんが監修しました。

クイズは大山寺地区にある大山町観光案内所や大山自然歴史館などの解説パネルを読めば、答えが見つかる仕組みですが、このクイズがきっかけになって、夏休みの自由研究に大山を選んだ子どももいました。

子どもたちの作文の一部を紹介しましょう。

「大山に登って一木一石運動に参加したり、いろんな季節に遊びに行って、大山のきれいなものをたくさん見たり、知ることが大事だと思います」(面影小4年)

「私は大山の自然を大切にしたいです。道徳の時間に、『ひと踏み10年』を読み、一度踏んでしまった植物は、10年も元に戻らないと知りました。大山の高山植物を傷つけないようにしたいです」(大山西小5年)

「大山のおいしい水は境港にも来ています。このおいしい水は大山の森が守っています。私は大山のおいしい水をもらうため、一木一石運動に参加して森を守ります」(中浜小2年)

「ゴミ袋を持って、大山登山をしながらごみを拾う。自分もごみは捨てない、自分で出したごみは持ち帰る」(中山小3年)



こども大山クイズの解答に感心する鷲見寛幸さん



自由研究も添えられた解答



大山北壁

改めて「こども大山クイズ」を掲載します。あなたも挑戦してみませんか。そして大山1400年祭に向けて、あなたができることを考えてみませんか。

- 【問1】 国立公園・大山の最高峰は剣ヶ峰(標高1729m)ですが、山頂碑や避難小屋がある弥山の標高は？
- 【問2】 大山の山麓に広がるこの木の森は西日本最大規模を誇ります。「緑のダム」とも呼ばれ、たくさんの水をためています。漢字では「木」へんに「無」と書くこともあります。この木の名前は何でしょう？
- 【問3】 大山の8合目から山頂周辺に広がるこの植物の林は、国の特別天然記念物に指定されています。赤い実をつけるこの植物は何でしょう？
- 【問4】 大山は昭和40年代から登山する人が増え、踏みつけられた頂上は草がなくなり、土がむき出しで道が崩れて危なくなりました。そこで大山の自然を守ろうと頂上に木や草の苗を植えたり、ふもとから石を運ぶ保護運動が始まりました。この活動を何と呼びますか。
- 【問5】 大山寺本堂の境内には銅でつくられた大きな牛の像が寝そべっています。この牛の名は？
- 【問6】 大山は植物や昆虫など自然の宝庫です。ダイセンの名前がついた生き物の名前を一つ教えてください。
- 【問7】 大山には平安時代に仏師良円が作った阿弥陀仏三尊像をまつお堂があります。このお堂と仏さまは国の重要文化財ですが、このお堂の名前は何でしょう？
- 【問8】 かつて大山では、牛や馬を売り買いする牛馬市が開かれていましたが、日本三大牛馬市に数えられる大きさで大変にぎわいました。この場所は、今は駐車場や緑地の広場になっています。その場所の名前は何でしょう？
- 【問9】 大山寺を開いた人はだれでしょう。昔、ある猟師が大山まで金色の狼を追いかけて矢を放とうとしたところ、お地蔵さまが現れて狼は尼さんに姿を変え、ありがたいと思った猟師はお坊さんになって大山にお寺をつくったとされています。
- 【問10】 国の重要文化財・大神山神社奥宮は、昔は大山寺の大智明権現社でした。明治時代の神仏分離令で神社とお寺に分かれてしまい、たくさんの建物が壊されましたが、奥宮の入り口にある神門は残されました。この門の名前は？



大山の牛馬市(鳥取県立公文書館蔵)



大山の山頂に石を運ぶ



大山山頂に広がる天然記念物の林

バードハットでクリスマスソング

ムジークテアターTOTTORI・紅のくれぐれも乙女・ウクレレみよこさん

2020年12月19日

鳥取駅前前のバードハットでクリスマスときめきホリデーがあり、シニアバンクのメンバーも出演してクリスマスソングを歌い、師走のまちを活気づけました。

バードハットのクリスマスイベントは鳥取駅前商店街振興組合(英義人代表理事)が毎年開いているもので、今年で6回目です。全国でも珍しい歩車道の開閉式大屋根・バードハットの活用と歳末セール活性化がねらいです。今年は砂像イルミネーションが登場し、例年通りマーケットやステージも用意されました。

今年の師走は寒波に見舞われ、市内は久しぶりの積雪。この日も寒風が吹き、小雪が舞う荒天でしたが、バードハットの“威力”でイベントは予定通りありました。

シニアバンクのメンバーが出演したのはステージ。社会人コーラスのムジークテアターTOTTORI(邨上美子代表)▽女性ボーカルの紅のくれぐれも乙女(阪本いづみ代表)▽ウクレレみよこさんの3組です。それぞれの音楽グループはコロナ禍とあって、フェイスシールドやマスクで飛沫防止し、寒さに震えながらも、久々のステージ発表を喜び、元気に合唱、演奏しました。

サンタクロース姿のムジークテアターTOTTORIは、クリスマスソングに続いて、お得意の「北風小僧の寒太郎」「宇宙戦艦ヤマト」や「津軽海峡冬景色」などを披露。歌の合間には客席にプレゼントも届けました。紅のくれぐれも乙女も黒と赤の衣装で登場。クリスマスソングのほかにも、往年のヒット曲「ふりむかないで」や「やさしい悪魔」などをかわいらしく歌いあげました。ウクレレみよこさんも十八番の美空ひばりメロディーを熱唱しました。

イベント会場には山陰三ツ星マーケット(渡世唱子代表)の14店が出店しました。鳥取・島根・但馬のこだわりの商品や食品などを扱うグループで、いつもは鳥取大丸5階に販売拠点を設けています。鳥取県土地家屋調査士会は創立70周年を記念して、会場にキャラクター「地識くん」の砂像を設置し、PRしました。



ウクレレみよこさん



紅のくれぐれも乙女



ムジークテアターTOTTORI



バードハットに登場した砂像とイルミネーション

「ちびっ子科学者集まれ！ 自然の法則を体験しよう」というサイエンスカフェ鳥取が鳥取市の鳥取環境大学でありました。進行役は環境学部の特任教授・足利裕人さんです。10組の家族が参加し、いろいろな実験を通じて科学の楽しさを学びました。

サイエンスカフェは科学者と市民が科学の話題についてコーヒーでも飲みながら気軽に語り合う場です。講演会やシンポジウムと違って、自由な雰囲気の特徴です。20年ほど前にイギリスで始まった運動で、「理科離れ」が指摘される日本でも取り組みが拡大しつつあります。

サイエンスカフェ鳥取は足利さんが15年前から始め、パレットとっとりなどを拠点に年間数回開いてきました。これまでに延べ1500人ほどの市民が科学や技術について学び合ってきたといいます。鳥取環境大学では今年から山陰海岸ジオパークをテーマにサイエンスカフェを始めています。

さて、この日は小学生とその家族が対象です。足利さんは身近にあるものや100円ショップの商品を使って実験器具を作り、参加者に実験してもらいながら自然界の法則を伝えました。

参加者が盛り上がったのは気体の実験です。アクリルでできた透明の圧気発火器を使って、一気にピストンを押し込み、筒の中の綿に火をつけるというものです。ちびっ子たちは「ついた」「光った」などとはしゃぎながら、この作業を熱心に繰り返し、気体を圧縮すると気体が熱くなり、発火することを学びました。ディーゼルエンジンの発明につながった原理だそうです。

おしっこ人形も人気を集めました。高さ10cm足らずの陶製の人形です。おしっこが出る小さな穴が一つだけ開いています。これにどういう方法で水を入れ、おしっこが出るかを考えました。足利さんは「人形を温めると中の空気が膨れて外へ出る。冷たくすると空気が縮むので水が中に入ってくる」ことを紹介。人形を熱いお湯につけた後、水に沈め、それを取り出して、お湯をかけると、勢いよくおしっこが飛び出してきました。ちびっ子たちは代わる代わるおしっこに手を当て、歓声を上げていました。

足利さんは「科学を学ぶといろいろな仕組みが見えてきます。理科の授業が楽しくなります。科学を楽しみましょう」と、ちびっ子科学者たちを激励していました。



ヘリコプターが飛ぶ原理を
紹介する足利裕人さん



圧気発火器で火起こし



勢いよくおしっこが飛び出す

